

うちは一族として生き  
残る！

黒百合

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ご都合主義を極力排した状態でうちは一族に生まれた転生者が生き残る話。  
ご都合を排したのでまあ大変です。

実際はオリ主視点からの昔のイタチを書きたいと思ったための作品。  
昔のイタチはこうだったろうなくという妄想をもとに書いています。  
作者はイタチ好きなのです。

イタチが最終的にどうなるかは話の流れで無理ないように決めるので未定です。

☆以下注意事項☆

☆主人公は中身男の女の子。もといTS。

TSにしたのはそう都合よく男に生まれるかな〜という思いと、単に女のうちは一族がないため。そんなに深い理由はない、思いつきです。

☆ラブコメ成分は少なく、あつたとしても百合成分です。(そう都合よく女の主人公に惚れる女のヒロインが出るわけがないというツツコミはごもつともですが、お見逃しください。)それをご了承ください。メインは主人公の悪あがきとイタチの昔の話、です。多分。

☆独自解釈のような部分があります。単に間違えてる可能性もありますが。

☆主人公はうちとはとしての能力のみで切り抜けるので、神様からもらったチートでどかーんっ！みたいな展開にはなりません。仮にあつたとしても不完全な万華鏡レベル。ちなみにうちは抹殺の時期になっても完全な万華鏡は手に入らない予定。もとい万華鏡の力を使いまくってどかーんっ！という展開にはなりません。

☆作者は大変打たれ弱いため、お手数でながら悪めの感想を書く場合はオブラートに包んでください。ただ悪いというのではない、治すための改善案やこの設定おかしくない？という感想は歓迎です。

☆原作から逸脱するつもりもキャラ崩壊も無いはずですが、重度のNARUTOファン、重度のイタチファンは念のため読まない方がいいかもしれません。そういった意図での感想は受け取りかねます。作者はコミックスを買い揃えて、作画のいい時のアニメ

を見てる程度です。

また、作者は軽いサスケアンチですが、極力主観を入れずにご都合を排除した表現や展開がアンチっぽくなるかもしれません。サスケ好きはご一考を。

☆原作キャラはうちは一族抹殺時期までほぼ出てきません。ナルト世代のキャラはまず出ないものと考えください。出るのはカカシ世代、自来也世代、うちはシスイなどを含むうちはです。

☆主人公の一人称があやふやなので、「私」に修正する作業を暇を見て順次行います。紛らわしくてごめんなさい。

# 目次

プロローグ	1	兜一族と。	103
転生してしまったようだ	1	タマモの理由	112
忍者学校編		火影とのコネクションを作ってみよう	118
チャクラを練ってみる	7	ホワイトのゼツのスポアがハウスで	118
おねだりするのには中身的にキツイ	16	デイスパスする	127
写輪眼が開眼したようである	29	イタチ、悔しがって・・・	135
イタチの力量を測ってみる。	41	九尾来襲	145
初めての友達	56	悔恨と苦し紛れの策	166
タマモに教えてあげよう	67	中忍試験編	
熱き珍獣マイトガイ	79	蓋を開ければ	174
イタチはやっぱり脅威的	92	うちはシスイとは	187
		Cランク任務	196

それぞれの戦い	ヒビキ	207
それぞれの戦い	タマモ	220
それぞれの戦い	イタチ	232
痛みに甘えはない		241
うちの現状		252
ある休日の悩み事		261
中忍試験その壱		272
なぞなぞがでるよ!		283
試験と暗躍と		297
イタチの力		310
宿泊場までのお話		322
カナグという忍		334
一方、ヒビキ達は		352

激突		361
鬼才イタチ		377
焦り		392

## プロローグ

転生してしまつたようだ

「一体、なぜまたこんなことに……」  
さてはて。

場所はうつつそうとした林が広がり、その奥にポカンと空いた案山子の置いてある広場。

演習場と呼ばれる場所である。

ここには1人の少女がいた。

見た目は3、4歳。

高めに見積もつても5歳にはならないであろう、一人歩きを始めてしばらくといったくらいの子供——いや、幼児である。

その幼児はというと、ため息を一つ。

「なぜ(こんな)とこ……」

同じ言葉を繰り返す幼児。

彼は——いや、彼女は、というべきか。

もともとは地球にいた男であり、死んで気づいたらここにいたということである。男は驚いたものだ。

死因などはどうでもいいから語らぬとして、男はごく平凡で普通の社会人2年目。ようやく落ち着いてきて、社会人としての最低限のルールに慣れ始めた頃だったのだが。

死んで気づいたら漫画の世界に良く似た———というかそのものの世界にいたというのだから驚きだ。

しかし、それと同時に喜びも沸いた。

死後の先があると分かったこともそうであるし、今回生まれたのは忍術と言う魔法みたいな力を使える世界のようなからである。

とはいえ惜しむらくは性別が女として生まれたことと、この世界。

NARUTOであるが、その世界におけるまず間違いない死ねる、うちは一族として生まれてしまったことであろう。

女として生まれてしまったのは至極残念だ。

そこでまず思うのが自身の結婚相手の性別うんぬんであろう。

ネット上ではそういった類の小説もあり、肉体に精神が引つ張られるなどと言う胡散臭い理由から徐々に男が好きになっていくと言う話も聞くが、正直それは疑いの余地が



ある。

肉体が精神に影響を及ぼす。

これはまあいいとしても、その影響が如何ほどというのか。

もしそんな簡単なことで精神的な性別が反転すると言うならば、世のオカマ達はいじめや精神と体の不一致などに苦しまないのである。

身体は男。

頭は乙女。

彼ら——彼女達に謝れと言う話だ。

おそらく、否。

普通に考えて男を好きになることはないと考えている。

となれば百合の道であるが、それもまたどうかと思う。

正直女顔の男などは女性からしたら気持ち悪いだけであろう。

余程、中身が良いならばともかく。

幸いなことにこの世界には忍術と言う魔法のような物がある。

死人を生き返らせたり、他の人間の体に乗っ取ったり、心臓を代替えて生きながらえたり、自称不死身だったり、大量のチャクラさえあれば長生きしたりと、現代医学では説明も付かないような仰天な不思議を可能にする。

幼児は、完全な男は無理でも長年連れ添った相棒を股に生やすくらいは出来るだろうと信じ、気を紛らわせ今は性別の問題には目を背けることにした。

「イタチが生まれてないのが幸いだよな・・・」

それよりもこちらの問題がなによりの問題だ。

うちは一族の抹殺。

いずれうちは一族は物語上、皆殺しにされる。されてしまう。

うちは一族最強とされる仮面の男と鬼才うちはイタチによって。

彼は——以降、彼女と称するが、彼女は輪廻転生というのが存在すると言うのは身染みて分かった。

だからこそその点で言えば別に死んでもいいかな？とも思っていた。

もちろんであるが彼女に特別な力などは無く、うちはとして生まれたその力と才能しかない。

特別な力が無く、中身日本人の彼が彼女としてこの世界で生き残るなどは土台無理であらう。

可能だったとしても日本に居た頃に比べて全くの別種の苦勞を強いられてしまう。

そんな苦勞をするくらいなら——と楽な方へ思考を切り替えていたのだが、次の人生もこの記憶が引き継がれるのかと言われれば些か疑問の余地がある。

まず、自分が生きていた世界で前世がどうのというような人間は1人も居なかった。居たとしても氣狂いとして扱われただろうから、隠していただけなのかもしれないが少なくとも滅多に居ない。と見ていいだろう。

記憶はもともと消えるはずで、自分の今の状況がたまたまだとしたら？

次の人生が始まる頃には自分と言う存在が消えているかもしれない。

ゆえにこそ彼女は考えたのである。

「イタチとまだらを倒す．．．でないかと死ぬな。俺。」

いつそのことイタチの兄弟の一人として生まれていたら．．．とチラリと考えたが、彼は任務のために、里のために、恋人はおろか両親すらも殺せる忍の中の忍。

サスケを生かしたのは弟と言う肩書きだからではなく、純粹に彼がサスケという一人の純粹な子供を好いたのだろう。

そこにどんな理由があつて、どんな思いがあつたにせよ、弟だから兄だからと言って生かしてくれるような甘い人間ではないことは確かだ。

ともすれば。

自分が仮にここで恥を忍び、彼に色仕掛けを行い、惚れさせたとしても殺される。友人でも親友となっても殺される。

彼女がこの世界で生き残るためにはあの強敵二人を退けるか二人から逃げるかしなければならぬということである。

あの漫画の中でもトツプラスの2人を相手に。  
彼女はもう一度ため息を吐いて案山子に寄りかかる。

この物語はご都合主義を出来るだけ廃し、うちは一族として生き残るためにどうするかを悪戦苦闘しながら模索する主人公の苦戦振りを楽しむものである。

## 忍者学校編

## チャクラを練ってみる

「ダメだ。まるで取っ掛かりがつかめない。」

そんな嘆きを込めてうなだれる幼女が居た。

彼——いや、彼女の名はうちはヒビキ。

前世では日本人で、死んだらうちはとして生まれた一般人である。

色々ツツコムところはまだあるにせよ、彼女はとりあえずの目標を決めた。

もちろん、修行である。

このままではうちは一族はサスケを除いて殺される。

なればこそ、生き残るために修行が必要だ。

とはいえ、ついこの前に4歳になったばかりの幼女が修行したいなどと言えるはずも無く、新しいこの世界の両親に散歩と言って、演習場にきている。

そしてここで日課の写輪眼の開眼訓練を行っていた。

ところがどっこいもちろん現実と言うのはそんなに甘くない。

写輪眼の開眼は早くても12歳前後。遅くとも成人する前には開眼するもので、4歳

の、それもチャクラがどんなものかすら分からないような少女が開眼出来るほど甘くは無いのである。

ヒビキがやった訓練と言えば、単にじつと物を見るということだけ。

これではさすがに無理と言うものであろう。

「くそう．．．サスケはこれで写輪眼を開眼したはずなんだけどなあ．．．やつぱり窮地に追い込まれないとダメなのだろうか？」

彼が言っているのは抜け忍、白とサスケの戦いのことだ。

この際、サスケは白の氷遁のスピードを見切るために開眼した。

自分も何かを見切ろうと思えば開眼できる．．．と思い、空を飛ぶ鳥やトンボなどの昆虫の後をじつと追ったり、羽の動きを見切ろうとして一週間ほど見つめていたのだが、開眼の気配はまるで無かった。

サスケが開眼したのは窮地に追い込まれていたこともあって、そちらも条件に含まれるのかもしれないと考え直すヒビキ。

実際、カカシの親友、オビトは見えない敵に追い詰められた際に開眼している。

見ようという強い意志。

そして生存本能が開眼の鍵を握ると思われた。

だがしかし。

「窮地つてどんなよ？ていうか普通に嫌だし。」  
窮地。

命の危険が迫るような窮地に望んでツツコミたいとは思わないし、そもそも痛いのは誰だつて嫌である。

出来れば地力でどうかしたい。

手裏剣や体術の前に写輪眼を開眼しようとしたのだから、写輪眼を開眼したものはどんな動きも見切り、模倣が可能だと言うから最初に開眼して模倣と習得してしまえばそんなに頑張らなくてもあつという間に強く——という楽したい思いから来ていたのだから。

何よりも効率が良い。

ヒビキはいまだ知らぬことであるが、彼女は普通に天才だ。

普通の忍に比べてうちはは天才と呼ばれるが、その中でも特に天才と呼ばれる類の一種である。

これは嬉しい誤算であつた。

が、しかし、それでもうちはの鬼才。

イタチには適わない。

彼は鬼才である。

無駄を省いて効率よく修行。

そして娯楽にわき目も振らずに修行、修行、修行、修行でようやくイタチを確実に殺せる実力をもてるのである。

もちろん彼女としてはイタチの悲劇は知っている。

が、しかし新たな両親。

何よりも自身の命のためにはイタチを倒す、殺す、退ける、逃げ切る。

この四つのどれかの目標を講じるしかないのだ。

さらにイタチと一緒にやってくるうちはマダラの脅威もある。

効率を突き詰めてひたすら修行をしてもどうなるかはまだまだ不安要素が残るところである。

ともすれば、今から躓いていてはどの道、死の未来しかない。窮地に飛び込んででも開眼を急がねばならないのだがやはりそこは——この世界に来てまだ日の浅い日本人。

「とりあえずチャクラの扱いだけは覚えないとだめかな・・・よし、明日聞こうか。父さんは・・・任務でないから母さんあたりに。」



甘い部分は出て当然と言えよう。

☆ ☆ ☆

「ふむむむむむ。」

「そうそう。しつかり出来てるわ。」

うちはヒビキの母親。

うちはミコト監督の下、チャクラを練る修行をするヒビキ。

その顔は真剣そのもの。

「・・・すごいよね。」

この歳でこのチャクラとは。」

そしてミコトの隣にいるのはイタチ、サスケの母親である。

彼女は目を見開いて驚いていた。

ヒビキのチャクラ量に。

しかしこれは別に凄いことではない。

チャクラは精神と肉体。

この二つのエネルギーから作られる。

ヒビキの場合、日本で学生の身分とは違って色々なストレスに耐えなければならぬ社会人を二年とはいえどもやっていた上、この世界に来てさらに4年ほどを過ごしてい

る。

そんな彼女は精神エネルギーが同年代の子供に比べて桁違いに多い。

肉体は歳相応だが、肉体エネルギーは細胞一つ一つから掻き集める力。

当然だが細胞一つに含まれるエネルギーには個人差があり、これが個人個人のチャクラ量の変化に大きく影響する。

もともとチャクラ量に恵まれたうちは一族であるからして、この細胞エネルギーは例え体が小さい幼女と言えどもバカには出来ない。

すなわち本来であるならば例え肉体エネルギーに恵まれたうちは一族と言えども精神エネルギーが足りず、あまり多量のチャクラは練れないとされる。

が、ヒビキは中身が社会の荒波に多少なりとも揉まれた成人男性ゆえにこそチャクラを同年代の子に比べて練りこむことが出来るのである。

今でこそ驚きの対象であるが、年齢が上がるに連れ差はそこまでのものではなくなっていくだろう。

そもそも、女性はチャクラ量が男に比べて少ないとされる。

将来的にはむしろ多少の見劣りすらする可能性が高い。

「凄いわね・・・チャクラコントロールも良い。」

「でしよでしよっ。」

イタチの母に自慢げに答えるミコト。

ちなみに彼女の見た目は女子高生と言った感じの肩くらいの黒髪で切りそろえられた快活少女といった感じである。

どこから見ても一児の母には見えなかつたりする。

チャクラコントロールもまた女性の方が良いとされてる。

これは量の多い傾向にある男性に比べて女性の方が少なく扱い易いからだ。さらに子供の時は一度に練り上げられるチャクラの量もそれほどではない。

ゆえにこそそのコントロールのよさ。

もちろんヒビキの才能も多分に入っているけれども。

「・・・これで大丈夫?」

「きやーっ! 可愛い!! 大丈夫よ!! ヒビキ!!」

「・・・親ばか過ぎないかしら?」

小首を傾げて不安げにたずねるヒビキ。確かに見た目だけなら可愛いと言っても良い。

そして、それに抱きつく女子中学生に見えないことも無い童顔の母。

傍目から見れば歳の離れた姉妹に見えないことも無かった。

ヒビキとしては子供っぽい仕草を意識してやっているだけである。

口数が少ないのは中身がばれないようにとのこと。

ヒビキの容姿は目つきが若干鋭く、耳を覆うくらい黒髪。そして言わずもがな整っているので将来的にはクールビューティーになるだろう。

鋭いのは父親であるうちはギタンの遺伝だ。

彼も親ばかだったりする。

「つと、それはそうとアンタ、子供産んだんだって?」

満足したのか、ミコトはヒビキを存分に頬擦りした後、イタチの母に向き直る。

「ええ、イタチって言うの。」

「・・・っ!」

思わず無口キャラを演じてるのに変な声が出そうになったヒビキ。

いや、演じてるといふほどでもないが。

「・・・早すぎる・・・死亡フラグが・・・」

「ん?何か言った?」

「な、なんでもないよ。」

つい口に出た言葉を慌てて誤魔化す。

これは困った。

こんなに早いとは。

ヒビキは冷や汗ダラダラである。

いつそのこと殺してしまおうか？とも思ったがそれは論外だ。

そうすると色々な問題が発生してしまう。

まず産まれたばかりの子供を殺す。

日本の感覚が抜けてないヒビキには土台無理な話だし、仮に可能だったとしても殺した後で母親、父親に殺される。だけならばまだしも、母親にまで迷惑がかかる。

わずか4歳で人を殺す忌み子の親と言うことで。

いや、これはまだ良い方だろう。

下手をすればミコトが子供に命じて殺させたという疑いもかけられる。

むしろそれが自然だ。

そうなれば少なくとも拷問、尋問コース行き。

そんなのはもちろんのこと嫌である。

親バカな彼女のこと。

最悪なのはそのままヒビキをつれて抜け忍になってしまいかもしれない。

もう色々和最悪な将来への道（ロード）へまっしぐら。

うん。無理。

そう結論付けたヒビキである。

## おねだりするのは中身的にキツイ

ヒビキがチャクラを扱えるようになって数日。

イタチが風邪にでもかかってそのまま死んでくれないかなあと不謹慎なことを思い  
つつ。

しかし小さな赤ん坊が死ぬと言うのも——なんてことを考えて少し気落ちするヒ  
ビキであった。

今度はチャクラを目に集めてトンボや鳥を見る。

見る。

見る。

見る。

じーっと見る。

そんなことを続けてきたヒビキであるのだが。

「……違うよなあ。これ。」

確かにチャクラを扱えるようになってからというものの動体視力が増したのか、トンボ  
の羽の翅脈や鳥の翼の動きをしっかりと見れるようになった。

今ならばプロ野球選手が投げたボールにかかれた文字でも軽く見て取れるだろう。でもこれ。

「写輪眼じゃ……ないよね?」

もちろん写輪眼では無い。

トンボの羽を見切るくらいならば普通の忍にも可能である。

手裏剣をクナイで叩き落せるくらいなのだから。

要は忍としての一人前の目を手に入れたというだけの話だ。

むしろ出来て当たり前レベルである。

とはいえその習得の速さは驚嘆に値するのだが。

「うむむむ……こうなったらしようがないか。」

嘆息して呟く。

そしてヒビキは考えたのだった。

出来れば秘密裏に……と考えていたのだが、やはりここは格上に協力してもらえないようだ。

☆ ☆ ☆

「どうしたんだ? ヒビキ?」

「父さん……お願いが……」

「と、父さん？」

泣きそうな顔をするうちはギタン。

ギタンは少し老け顔のイケメンである。

そのギタンが泣きそうな顔をするのでヒビキは戸惑った。

やむをえないとばかりに少し目を伏せ、もう一度顔をあげ、いまいちに乗り気にならない呼称を使用した。

「……お、お、お」

「ああ、そうだ！」

「パパだよっ!!」

呼び方を改めると一気に満面の笑みを浮かべるギタン。

言わずもがな親ばかである。

小さな頃からパパと呼ばされるヒビキにとって少々なりともこれは苦痛だった。

前世では親父、お袋。

そして今生では父さん、母さん。

自身にとっての両親は親父とお袋で。

ヒビキにとっての両親は父さんと母さんで。



今と昔は違うという意味でもってヒビキは呼称をわざわざ変えたのだが、その呼び方が気に入らないらしいギタン。

ヒビキが言葉を喋るようになってから、パパの方が良いとダダをこねたものだからやむを得ず使うことになってしまった。

正直、かなり、結構「パパ」は辛いのだが、育ててくれる肉親の願いとあればしかたないとバレないようにため息を吐く。

別に呼び方が特別悪いわけではないのだ。

小さな頃からパパ、ママで通ってる人間からすれば問題は無かったのだが、今まで親父、お袋という呼び方をしてきた人間にはちよつと抵抗感が・・・それだけの問題である。

パパ、ママと呼ぶ男子中学生以降の男性はおそらくわかるのではないだろうか？

思春期の頃に気になり始めて、ダサイという子でオヤジとか父さんに変えようとしたけど結局恥ずかしくて未だにパパママ呼びという人も少なくないはず。

あまり考えないことにして話を進めるヒビキ。

この人の良い両親のためにも頑張らねばならないと思いなおす。

「とうとう・・・ばばの、ばばの戦つてるところが見たい。」

「・・・ん？」

そらまたどうして？

というかヒビキは女の子なのだから戦わなくてもいいんだぞ？

パパが守ってやる!!」

それは困る。

このままでは死ぬことは分かっているのだから。

「・・・でもお母さんは？」

「いや、ママはもともとパパと出会ったときには忍だったから・・・それにオマエを忍の世界に入れるつもりは無いんだ。・・・いや、こんな話をしても意味が分からないか。」

「・・・ねえ、見たい。いいでしょ？」

この流れは困る。

確かに自分の父の気持ちも分かる。

立場が違えば、ヒビキも自分の娘を死の危険と隣り合わせの忍の世界に入りたいとは思わなかっただろう。

よくもまあ世の忍一家は自分の息子や娘を忍者学校（アカデミー）に入れられるものである。

うちはに生まれたものでなければ忍になるつもりなど微塵もなかっただろうが、それではいずれ降りかかる死亡フラグに立ち向かえない。

「しかし……うむむ。」

ギタンとしては娘には忍に興味を持って欲しくなかった。

憧れるなりなんなりで忍になると言い出して欲しくなかったからだ。

そのため忍術が書かれた巻物などもヒビキの目に付くところには置かれていない。

わざわざ幻術や土遁を使ってまで隠しているのだ。

ゆえにヒビキは今出来ること。写輪眼開眼のための模索をしているのである。

修行効率だけではなく、そういった面からも開眼をしなければならなかったのだ。

時間は無駄に出来ない。でなければイタチより早く生まれたアドバンテージがすぐ消えてしまうだろう。

社会人としても時間を無駄にする人間は出世できないと先輩から言われた。

「ね、いいでしょ？」

可愛くを意識しておねだりをするヒビキ。服のえりを軽く引つ張りながら上目遣いで少し寄りかかりながらおねだりをする。

我ながら気持ち悪いと思いつつも背に腹は変えられない。

幸い見た目は美少女である。否。

美少女である。

中身はともかく見た目だけならばとても愛らしい。

あまりのプリティキにノックアウト寸前になるギタン。

しかしギタンもさるもの。

ギタンは親バカであるが、バカ親ではない。

文字が前後入れ替わっただけであるが、意味は大きく異なる。

娘のため。

娘の幸せのためにもギタンはヒビキのおねだり攻撃をグツと堪えた。

別に見せるだけならば問題は無い。

むしろ見せて「ばばカッコいいっ!!」とか言われたい。

めっちゃ言われたいと考えてる。

だがしかし。

だがしかし。

それで忍になると言い出しても困るのだ。

まあ四歳だし、構わないか?とも思う。

だけれど子供の時の大きな出来事はいつまでも覚えてるものだ。

油断は出来ない。

軽んじてはならない。

油断は死を招く。

そんなことは忍である自分が一番分かっているのだ。

しかし、見て欲しい。という強い欲求が湧き上がるギタン。

凄いつて憧れの目で見られたい。

出来ればそのままちゅーでもしてくれれば良い。

さらにわがままを言えば「将来の夢は、ばばのお嫁さんっ！」とか言つて欲しい。

めちやめちや言つて欲しい。

言つて欲しいのだが・・・これもまた娘のため。

娘のためだ。

「・・・だめ、・・・だめだ。」

「・・・手ごわい。」

断腸の思いで娘の懇願を蹴るギタン。

号泣してながらそれを見られまいと顔を背けつつ、そっけなく断る。

内心、これでは嫌いな！とか言われなかな？とか不安になりつつもそれが娘のため

であると信じて。

しかし娘であるヒビキとて命がかかっている。

ひいては両親のためでもあるのだ。

引き下がるわけにはいかない。

父親の気持ちは分かるけれども、ここはヒビキのほうでもまた断腸の思いで——中身は普通の男なのにぶりっ子するという屈辱を受けるという意味も含め——再度アタックをしかけねばなるまい。

「どうしてだめなの？」

「ばばのお仕事見るのがそんなにだめ？」

「ぐおっ!!」

頭を抱えてうずくまるギタン。

ブルブル震えながら我慢する。

だめじゃない!

だめじゃない!!

むしろ見まくって欲しいっ!!

そう言っつてやりたいが、そこをググンっつと我慢する。

そんなギタンを見てヒビキとしてはもうコレくらいでやめてやりたい。酷だと思う。

でも、死が背後にあるのだから引けない。

色んな意味で辛い。

辛いと言えどアタックの手は緩めない。

写輪眼を開眼できる気配が無い以上、アプローチを変えねばならない。

次のアプローチは忍の戦いを見て勉強する、だ。

見て勉強することで目の動体視力が上がり、写輪眼の開眼を試しつつ、忍術の印や体術の基本を見て学べる。

これならば今の状況でも隠れて特訓が可能だ。

素直に教えを請えばいいとも思うが、4歳児が熱心に修行に励むのは異常だ。

別に力を隠す必要は無い。しかし、修行を一生懸命やる姿を見せるわけにはいかない。

素直に教えを請うのはまだ早いだろう。

「おつかいもいく。家のお手伝いもするよ？」

それでもだめなの？

おりこうさんにもしてるから・・・お願い。」

「ぐぐぐぐぐつ!!」

「どうして・・・どうしてだめなの？」

段々と目が潤んでくるヒビキ。

ちなみに演技ではない。

このままでは死んでしまう。

目の前の父も。

もちろん母も。

彼等は他人ではない。

四年間もずっと一緒に居て、自分の世話をあれこれと焼いてくれているのだ。

さらには一度死んだせいとか、すんなりと両親だと認識してる。

その2人が死にそうになる。

いずれは自分も殺される。

それを思うとどうにもなく、泣けてくるのだ。

それだけならばまだ良かった。

ヒビキが泣いたのは他の思いもある。

死ぬことではなく、もつと他のことで——どうせ生まれるなら普通の家庭が良かったとか、どうしてこんな殺伐とした血筋に生まれてしまったのか？とか強くならないと死んでしまうという将来への道が決められてるのも嘆いた。

どうして自分が辛い思いをしてまで両親を守らないといけないのかとか、それでも自分が守るしか無いというこの状況を目の前のギタンを説得しながらも考え出していた。やるしかない。

自分が1人でやるしかない。



あの強い強いイタチとマダラと名乗る仮面の男を相手に。

日本人であるヒビキにとつてはそれはとても辛いことのように感じた。

しかし、やらねばならない。

やるべきことから逃げてでも解決しない。

それは彼が日本に居て、社会人になつてまず最初に学んだことだ。

そのために。

どうしても父親を説得する必要がある。

「・・・わ、分かった。しかたない。」

「ほ、ほんとう?!」

「泣くこともないだろう。まったく、ほら。」

そういつて涙をぬぐうギタン。

ヒビキはぬぐわれて初めて涙を流していることに気づく。

「い、い、い、めんなさい。」

「謝ることじゃない。では・・・ううむ。」

次の仕事は明後日か。明日を逃したらしばらく休みは取れないな・・・よし。

明日のお昼でいいか？」

「ほんとっ!?!」

「ああ、ほんとだ。

でも、ちゃんとさっきの約束を守ること。いいな?」

「うん!!」

ヒビキは満面の笑みを浮かべた。

これでどうにか今の停滞を打ち破れそうだと。

# 写輪眼が開眼したようである

次の日。

ヒビキの家にやってきたのは父親のギタンともう1人。

「……はじめまして。ヒビキです。」

「あら、行儀がいいのね？」

はじめまして。花菱（はなびし） キリカよ。」

「当然だ。俺の娘だからなッ!!」

「はいはい。親バカはいいから。」

で、この子の目の前で戦ってあげればいいのか？」

「ああ、そのとおりだ。」

やってきたのは短く切りそろえられた赤い髪が特徴的で、少し垂れ目気味のスリムな女性だ。

小柄な割りに胸のあるミコトと違って胸もスリムだったりするのが……アレである。「ふうん。隊長の子供って言うからどんな子だと思えば、隊長の血を本当に引いてるのが疑わしくなるほどの可愛さね。」

「そうだろうそうだろう。」

「皮肉も通じんか。」

「ん？」

「べつにつにく。んで、娘の見てる前で良いとこ見せたいとかそんなところ？」

「うむ!!」

「良いお返事で……ていうか私も暇じゃないのよ?」

「どうせ婚活だろう? 一日くらい、いいじゃないか。」

「どうせつて言うけどね……これがまた忌々しいことに昨今の男つてヤツはもうつ!!

胸胸胸胸とっ!!

二言目には胸とっ!!

そんなにたかだか脂肪の塊がいいのかつてくらい連呼しやがるバカやろうばかりで、このままだとホントに結婚できないくらいヤバイのよっ!!」

「……そうなのか? ……そうだ。今晚は家に泊まつていくか?」

「え!? ちよっ!」

「このタイミングでそれを言うつてことはその……ふり——」

「俺の娘を眺めてるだけでその荒んだ気分が晴れること間違いな——」

「本気で殺しに行くから。」

「なんでっ!？」

そんな父とその部下と思える相手を見て少し不安げになるヒビキ。

一応父親はうちはだし、その部下であるキリカも優秀なはずだけれど、どこかそんな気がしない2人である。

もしくはこれが強者の余裕と言うものだろうか？

「と、とにかく、組み手だからな？殺す気でくるんじゃないぞ？」

「え〜。」

「え〜じゃないっ!!」

もしヒビキに流れ弾が当たったらどうするんだ!!それに殺されたらもうヒビキのかわゆい姿が拝めなくなってしまうっ!!」

「そつちかい。．．．たく、このバカちゃんが。本気で殺したるか。」

．．．とりあえず満遍なく、適当に。って感じでいいのかしら？」

「ああ、そんなもんだ。」

「幻術はめんどくさいから使わないですよ。」

「もちろんだ。」

それでは傍から見て凄さが分からないだろう？

「ぱば大好きとか言われたいからなあっ!!」

「派手派手で、なおかつ弱い術を使えっ!!」

「・・・とんち?」

「いいからかかってこいっ!!」

「ほれ、ハイハイ!!」

「ふん、んじゃ小手調べに。」

「といつて瞬と消えるキリカ。」

「ヒビキはイキナリでびっくりした。」

☆ ☆ ☆

「やばい。」

「全然見えないよ?」

「ぱ、ぱばに戦ってもらったのはいいけれど予想以上にハイレベルすぎる気がする。」

「ほらほらどうしたどうしたっ!!」

「ふふふっ、ほれっ!!」

「楽しげな2人の声が聞こえるだけである。」

「トンボや鳥とはまた違う動きやスピードで動くものだから目で追えるだけの物が」

あつても、すぐに視界外へ2人は出て行ってしまふ。

これは気合を入れて視なければならぬ。

僕には時間も猶予もあまりないのだ。

今日が終わつたらまた次のパパの休みまでいつになることか。

二人が戦つて10分ほどが経過しただろうか？

お互いに手加減しつつ戦つてるのでなんとか目で追える様になつてきたし、忍の戦いにしても長いだろう。

まだまだ続くはずだ。

「火遁 豪火球の術っ!!」

よしきたっ!!

今度こそ印を・・・印を・・・印を見切つて・・・やるつもりだったんだけどなあ。

早いよお。

もつと遅くやつてよ。

早すぎるよ。

「ちよっ!？」

殺す気かっ!？」

「あつちを見てみる。

ヒビキが俯いている。きつと地味で飽きたに違いないっ!!

多少なりとも派手にいかなくてどうするっ!?

見切れなくて気落ちしただけです。

「だからってそれを使うやつがあるかツ!!アホっ!!ていうかそつちがその気ならこつちもその気でいくからねっ!!」

「おいっ!」

その印は・・・」

よしっ!

なんか知らんがあ印は始めから見れた。丁度、僕の位置からは良く見える。

えーつと忘れないうちにメモっておかなくては・・・仕込んでおいた紙にカキカキと。

亥、辰、未に、えーつと?

よし。

今度はしつかり印も見たしメモもした。

なんか強いっぽい術なのでどんな術か、キリカさんを見るといつの間にか複数になつていた。

ほほう影分身か?

いや、でもナルトがいつもやってる十字の印は見てなかったからおそらく既に使つて



おいたものだろう。

そしてさらに印を結ぶ。

これも忘れずにメモる。どうやらこつちが影分身のようだ。

さらに数が何倍に増える。

「水遁 水絞弾っ!!」

水で出来たサメが飛び出て、パパに飛び掛った。

なるほど。

原作でキサメが使ってた術ね。

ただ自分が水遁の素質を持っているのかどうかというのがネックだ。火遁を得意とするうちには水遁術を扱う才はおそらく無い。

あると良いなと思いつつ。

というかそれぞれ影分身がそれぞれの方向からあの術を使うとはなかなか強い人らしい。

多少なりともかじったからこそ分かる難易度。そしてチャクラの消費量。

チャクラ多いなあ。

影分身に術を使わせようとするとその分のチャクラも一緒に練ってから影分身をしなくてはならない。

そう考えるとナルトのチャクラチートぶりが分かる。どこか落ちこぼれやねん。あれだけでかなりのアドバンテージがある。

大抵の相手には強い忍術ブツパでそれだけで勝てるだろう、多分。

閑話休題。

今いる分身は10人。

水絞弾の術がどれほどのチャクラを使うかは分からないにせよ、水で出来たサメが相手を食いちぎるべくある程度の誘導性（ホーミング）を持って体当たりをするという術なのだから、少なくとも無いチャクラを消費してはるはず。

それに分身一つから2〜3匹のサメを射出してるし。

「ちっ！火遁 豪龍火の術っ!!」

そこに。パパが同じく誘導性を持つ術、豪龍火で水のサメを焼き千切っていく。

しかし多勢に無勢。威力は豪龍火の方に分がありそうだがそれでもサメの数は30前後。

対して火で出来た龍頭は4、5ほど。三分の一にも満たない。

これは大怪我ではっ!?!と心配した矢先だったが、それは無用だった。

水がいきなり高温にさらされたせいか、爆発して周りのサメも巻き込んで潰したのである。

水蒸気爆発と言うものだ。

すごい勢いで軽く、というかすぐく命の危険を感じるレベル。  
轟音が家の庭に鳴り響く。

周りの水蒸気に視界がさえぎられたが、幸い二人の姿を見失っては居ない。

そのままキリカは影分身を進ませ、パパを牽制。

ここでパパは写輪眼を発動させた。

分身を見切り、潰し、斬り上げる。

キリカの分身は次々に消えていく。

写輪眼相手ではどんなに早い攻撃も無意味。

写輪眼でも見切れないような常人離れたスピードの攻撃を当てるか、死角から攻める、態勢を崩すような攻撃を組み立てる。

ざっと思いつく対策はこれくらいだろうか？

「さすが隊長っ！」

でもこれでどうっ!？」

「おいっ!？」

本気になってないからっ!？」

そうして使ったキリカが使った忍術は大きな大きな双頭の竜を出す術だった。水で出来てるので水遁だろう。

もちろん印はカキカキ・・・っと。

双頭の竜がパパに迫るがパパはそこで目の色を変えた。いや、模様を代えた。

「・・・万華鏡っ。」

思わず息をのむ僕。

でもこんなところで使ってるの？

訓練ですよ？これ。

視力減っちゃうよ？これ。

「ふははははっ!!」

どうだっ!!この超写輪眼はっ!!」

「そ、それを使うのは卑怯でしょっ!!隊長っ!!」

その能力は凄まじかったとだけいっておく。

そして万華鏡のことは良く知らないんだね。パパは。

超写輪眼とか言っちゃってるし。

まあ原作でも開眼するのは少ないって話。

それも仕方無いことだろう。

いずれ目に悪いと言うのは勝手に気づくだろうから———とうか今日、気づくだろう。

なんか「目がおかしいな？」とか言いながら擦ってるし。

眼科に行けどだけ僕から言っただけ置けば、親ばかなパパのことである。

きつとすぐに行くに違いない。

そこで聞かされるはずだ。そして気づくはずだ。

万華鏡のリスクについて。

なにはともあれ、良い勉強になった。

途中から印もすっかり見切れるようになったし。

「うん？」

あ、ちよっ!?

隊長ツ!?

「うん?なんだ?」

「あ、あれ、アレ見てくださいよっ!」

「家の娘を指差すなっ！任務をふや——は？」

二人してこちらを阿呆のような顔で見ってくる。

なんじやらほい？

「何？」

「開眼してるじゃない・・・すっごい子ね。」

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおつ！！

なんとっ！さすが俺の娘・・・っじゃないっ！！

どうしてこんなことにつ!？」

なるほど。

どうりで。

途中から見失うことが無かったわけだ。

僕は開眼できたようである。

写輪眼を。

# イタチの力量を測ってみる。

ヒビキが写輪眼を開眼して7年の月日が経過した。

第3次忍界大戦が終結し、2年が経った頃合である。

うちはヒビキ11歳だ。

「……母さん」

「……。」

声押し殺して無くうちはミコト。

そしてうちはヒビキもまた瞳は潤み、今にも号泣しそうだ。

彼女達がいるのは慰霊碑の前。

そこにはうちはギタンの名がある。

「……かあさん……。」

「……。」

さらに泣きそうになるヒビキ。いや、もう涙がこぼれていた。

そんなヒビキを抱きかかえて、声を出さずに無くミコト。

遺体は戻ってきた。

任務中に激戦の果て、敵の大将と相打ちとなったらしい。

死体となって戻ってきたギタンの手には7年前、父の誕生日にあげたクナイがあった。

あの人に家の手伝いをして、お小遣いをためて父親にプレゼントしたものだ。

何の変哲も無いただのクナイ。

そこががんばって、とたどたどしい文字が刻まれてるだけの。

残されたのはまだ生まれたばかりの小さい妹と自分。

そしてヒビキの目の前で必死に何かを堪えるミコトである。

悲しみを、憎悪を、不幸を、強がりを、何を思っているのか。

「・・・お別れはすんだの?」

必死に声を整えてミコトは問う。

「別れてない。・・・まだ、ばばの目がある。」

万華鏡を、それを貰った。

もう潰れかけ、見えなくなっていた万華鏡。

パパと最後まで一緒にいたキリカさんによると大将と戦う前にはすでに目が見えなかつたらしい。

それでも戦ったのは、逃げずに戦ったのは。



キリカを含めた自分の隊の味方を逃がすためだったと言う。

泣きながらに語ってくれた。

「隊長はさ……最後まで……締まらなかつたよ。」

泣きながら『お前達、先にもどれ。俺は死にたくない。愛する娘達に会えなくなるからな。だから本当ならお前らを盾にしても生きて帰りたいのだが、何を間違つたか隊長になつちまつたからなあ』とか言つてさ。ま、もちろん冗談だつたんだろうけど……いや、本音かな。本音であるからこそ、あそこに残るといふ選択をしたあの人を私は尊敬する。」

それでも、部下を盾にしても生きて戻つてきて欲しいと願つた自分は冷たいのだろうか？

そんなことをキリカに聞いた。

「……さてね。私は孤児だったから……でも、そうだな。きつと私もヒビキちゃんの立場だつたらそう思つてただろうね。」

僕はただ泣いていた。

父の万華鏡を引き継いだ。

これで失明の危険は無くなった。

きっと。パパのことだ。

娘の失明とあらば喜んで自分の目を使えと言うだろう。

とはいえ移植に既に潰れた目を使っても大丈夫なのか？という不安があるが。

それにまだ万華鏡は開眼してない。

ゆえにこそ万華鏡が開眼したらすぐにでも試すつもりだ。父の目を。

そして父の意志を。

家族を守ると言う意志を継ぐ。

絶対に殺させない。

絶対に。

☆ ☆ ☆

ヒビキが決意新たに頑張るべく一步を歩みだした。

まずは忍者学校（アカデミー）である。

ヒビキも11歳。

普通ならば7、8歳の頃から入るものだが、結局ギタンの教育方針でヒビキは表ざたには忍術に関われなかった。

ギタンに内緒でキリカに特訓を受けたりしてただけである。

うちはの血統を守るためにも、女性のうちはが忍になるのはあまり推奨されてないという点もあった。とはいえども戦争後で優秀な人材がいなくなった今、そうも言つてられない。

結果、忍者学校では一年生だったりする。

正直、小さな子供に囲まれた生活環境は苦痛なことこの上ないのだが、それでも強くなるためには上忍の監修の元、任務をこなしていく必要もあるだろうし、強い忍具をそろえるためにもお金も欲しい。

そのためには忍者学校を卒業せねばならない。

見た目的には身長が発育が悪く、歳の割にはいまだ初潮の兆しすら見えないので、別問題は無かったりするのには余談。

ちなみにイタチも同じ学年だ。

イタチは8歳。

ヒビキが遅生まれの4歳の時に早生まれで産まれて来たので現時点では3歳差だったりする。

「ダンゾウを殺す．．．いやダメだな。」

彼は暗部の総元。彼を殺せば木の葉の暗部が混乱するし、上忍の中でも優秀な人間が

暗部になるんだ。それらを敵に回すのはまずい。そもそも殺せるか微妙だ・・・恨みを  
買う立場だから用心深いだろうし。第一、彼を殺したところでうちのクーデター自体  
をどうにかしないと意味がない・・・」

ヒビキはブツブツと呟きながら今後の目標を立てる。

もちろん第一は修行して強くなることだ。

でも、未然にうちは一族抹殺の危機を取り除くというのも試す価値はある。

手元のメモに自分で作った自分しか分からない言葉で作戦を書き込んでいく。

「おまえ、何言ってるんだよ?」

隣の席のガキ大将的な子供がヒビキの書いてるものに興味を引かれたのか、つつかか  
る。というのは建前で、実際は郡を抜いて可愛いヒビキにちよつかいをかけたくなった  
のだ。

好きな女の子に虐めをするのは男の子の本能であるからして。

一体どうしてそんな本能があるのか理解に苦しむのだが。

もちろん単純にいじめっ子である可能性もある。

「黙れ。臭い。死ね。」

「なっ?!人に死ねとか言うなよな——ひっ!?!」

何事も一生懸命やっているとときに邪魔されるのは腹が立つものだ。

写輪眼で睨むヒビキ。別にわざわざ目を変えたのではなく、自然と写輪眼が出てしまったのだ。

その異様な劍幕と、見たことが無かつただろう写輪眼の目の紋様に気味悪さを抱いたのかすぐに立ち退くガキ大将。

もちろんすぐにヒビキは態度をあらためる。

「・・・はあ。やってしまった。」

大人気ないと分かっているのだが——自分で思う以上に父親の死は衝撃的だったのかもしれない。

最近、感情の起伏が激しい。興奮で写輪眼が浮き出るほどに。

後で彼には謝らなくてはなるまい。

そしてなんだかんだで良い子ジャン。みたいなギャップを相手に与え、その見目麗しさも手伝って今日もヒビキに惚れる男の子が増えるのである。

そのため、女子には大層嫌われているヒビキであった。中身が中身なので、実際は男よりも女の子に好かれないと思っているのだが。

忍者学校（アカデミー）の授業は殆ど聞かず、基本的に授業中はトレーニングメニューを考えたり、写輪眼の使い方の模索、どうすれば悲劇の回避法などなど。

授業は聞いているフリだけだ。

ヒビキはそのまま静かに椅子に座っているイタチに目を向ける。

「ここで殺したほうが良いんだろうけど……それは根本的な解決にならないし……」

ぞつとした殺気を感じたのかイタチは身震いをする。

クナイまで抜く始末だ。

それを教員に咎められ、周りを警戒しながらも座り込むイタチ。

ヒビキはすぐに視線を逸らして、机に向かう。

「あの年から殺気に反応できるとは……ほんと恐ろしい。」

ただイタチの才能の深さを思い知らされただけである。

何よりもうちはマダラと名乗る男の問題だつて残つてる。

頭が痛い。

本当に頭が痛い問題だ。

次の日。

この日は全て実習に当てられる。

手裏剣の投げ方。

クナイの持ち方、扱い方。

忍具を入れる際のホルスターのつけ方や位置の調整など。

本当に初歩的なものである。

もちろんヒビキもやる。

いかにも初心者ぶる演技をして。

平穩に暮らすために目立たたくないとか、力を隠していざという時に本気を出してギヤツプ萌を狙おうなどという、そういった転生物にありがちな理由ではなく、イタチに自分の実力を、ひいては自分の手の内をばらさないためだ。

むしろ目立つだけなら問題は無い。

イタチがヒビキの方を見て「俺も負けられないっ！」とか思われちゃ叶わないのである。

ただでさえ天才なのだから、そこに努力が加わってもらっちゃ叶いつこない。

そんなことを考えながらホルスターを左腿（ひだりもも）に付けていると、おおおつ！というどよめきが沸く。

どうやら手裏劍の的のど真ん中に当てたものが居たようだ。

いわずもがなイタチであるが。

「まあうちの頭領の息子だしな。これくらいは……は？」

4歳ごろから手裏劍に触らせてればイタチのことだ、それくらいは出来るだろうとイタチを見たのだが、どうやらイタチの才能はそれでは終わってくれないらしい。

地面に数点手裏劍が落ちていた。

これだけを見ればどこに投げてんだよ、コイツは！とバカにされるだろうが、ギヤラリーの雰囲気と女子の熱の籠った視線。イタチの顔色。

そして教師すら驚いているところを見るに。

「・・・厄介な。この時点で手裏剣の当て投げが出来るのか。」  
当て投げ。

手裏剣同士、クナイ同士を当てて本来なればありえない軌道を描いて物の影などに隠れた敵に当てる技術。

「・・・写輪眼で見っておけばよかった。」

模倣（コピー）っておきかったと後悔するヒビキ。

さすがのイタチでもそこまでとは思ってなかったのである。

羨望、嫉妬、情欲といった物がなймаぜになつた視線を受けて少し頬を赤くしているイタチ。

「歳相応なのは人格だけか。まったく・・・とんだ化け物だ。」

その後、ヒビキは手裏剣の授業を適当に終わらせた。

その成績は平均程度だった。と言っておこう。

お昼をはさみ午後の授業。

今度は体術である。



組み手をしろと言われる。

ヒビキの相手はイタチ。

これは好都合。

現段階の戦闘力を見て、その後の戦闘力も見えていけば大まかな成長率が分かる。成長率が分かれば自分の修行のペース配分も幾分か楽になるはず。

ちなみにこのクラスにはうちが三人。

イタチを除けばヒビキともう一人の女の子。

おそらく教師はうちにはうちを当てるしかないと思ったのだろう。

もう一人の女の子は特に小柄で男の子のイタチとは戦えなさそうだったためにヒビキを選んだと思われる。

「よろしくおねがいます。」

「・・・よろしく。」

行儀良く対立の印を作りつつ、挨拶をするイタチ。

どこまで本気で行っていいものか。

いや、むしろ本気でいかないとダメだったりして？

そうだったら嫌だなあ。

ヒビキは顔を顰めた。

「どうかしましたか?」

イタチが不思議そうに言うが、それには答えずヒビキは慚然としたまま口を開いた。

「・・・準備は?」

「大丈夫です。俺はちよつとだけワクワクしてます。」

「・・・。」

ヒビキは何も言わない。

ずーつと喋らないようにしてきたせい、独り言意外ではあまり喋らないと言う悲しいくせが付いてしまったせいでもあるし、喋ることは情報であることからできるだけ普段からうつつかり喋らないように口を噤むようにしているというのもある。

「今まで他のうちはと戦ったことが無かったので。」

そのイタチの言葉には父親や母親からオマエは天才だとか言われていても比較対照が無いゆえにこそその不安が込められていた。

本当に父と母の言うとおりなのか?

自分は強いのか?

「俺はようやつと俺の器を計ることが出来る。」

「・・・。」

図らずもあのセリフに近い言葉を言うイタチ。

ここで自分は強いと驕らせておきたいものだが、どうせ父親と母親がすぐに気づかせるだろう。

当初の予定通り底が見える程度には戦うつもりだ。

というかこの歳の子供は普通、親に褒められたらそれで満足するものである。だといふのに。

内心でやつぱりコイツは歳相応じゃないな。と認識を改めるヒビキだった。

「始めッ！」

「しっ！」

「っ。」

教師の合図と共に、勢い良く息を吐いて突きを繰り出すイタチ。

それを難なく避けるヒビキ。

イタチも初撃で決まるとは思っておらず、そのまま回転して回し蹴りをくりだす。

しかし軸足に向けて足払いをするとすぐにドテつとしりもちをつくイタチ。

そのまま蹴り上げようとするヒビキだが、イタチはすばやく立ち上がり背後に下がる。

だが、距離を取らせまいと追い込むヒビキ。

ここからが本番。仕掛ける。

「くっー！」

「ほっ。」

突きと瞬時に回し蹴り。

図らずもイタチと同じパターンで攻める。

が、イタチはこれをヒビキの軸足を払って対応する。

「っ!？」

驚いた演技をしつつもコレはイタチの対応を見るため。

自分がやった対応策をそのまま模倣してきた。

これすなわち、それだけの目と体術をすでに持っているということに他ならない。

そのままドテっところけるヒビキ。

欲しい情報は全て取りえた。

現在の身のこなし、対応力。

追い討ちの蹴り上げも一緒だ。

受ける覚悟でヒビキは両腕を交差させ防御する。

が、ここで止めの合図が入った。

「勝者、うちはイタチ！」

きやーきやーと女の子からは声援が上がり、男からは嫉妬の怒号を受けるイタチ。

「ありがとうございます。」

「ありがとう。」

和解の印をしてそのまま下がる二人。

イタチは少し不満そうだった。

まだまだやりあえそうなところを止められたためか、手加減されたことを理解してか。

おそらく前者だろうが。

「なかなかどうして、今からアレか。先が思いやられる。」

すっかりクセになった独り言をぼつりとこぼし、ヒビキは帰宅するのであった。

## 初めての友達

組み手から数日。

ヒビキはお茶を飲みつつのんびりしていた。

「ほう……おいし。」

ほっと息を吐き、ゆつくりとする。

妹はまだ生まれたばかりで母親のミコトはそちらにかかりきりだ。

1人でのんびりとお茶を飲む。

学校ではイタチの観察と効率的な修行の考案。

家でも大抵は外で修行の毎日。

今日は久方ぶりの何も無い休日だ。

イタチの現在の力を見るにこうしてたまには休んでもいいだろうとの判断をしたのだ。

ちなみに家や修行中は常に写輪眼の状態である。

もちろん理由があり、写輪眼もしよせんは忍の道具。

その忍の道具の扱いを誰よりも上手くなるためにも常に写輪眼を使っているのだ。

事実、うちはマダラは常に写輪眼を使っていた。

自然に写輪眼で居られる状態まで持つていくのが理想である。

「ヒビキ?」

「・・・何?」

「ちよつと買出しに行つてきてくれないかしら?」

「・・・ん。」

ミコトからおつかいを頼まれ、頷き、立ち上がる。

母親からおつかいを頼まれる。

なんと平和な世か。

戦争を経験した、と言つても忍者学校（アカデミー）にも通つていなかったヒビキはソレを間近で経験した人間たちと比べると意識の違いが顕著だが、それでもあの全体的に空気がピリピリした里は嫌だった。

たまに里に入り込んだ敵忍が殺された場面に出くわしたこともあるし、恨みがましい目で死んでいくその目は咄嗟に目線を逸らすには十分に醜悪だった上に、悲しかった。

それが今や無い。

もちろん戦争の傷跡はそこかしこに色濃く残っている。まだ2年しか経っていないのだから。

戦争で各地の治安が乱れたためか難易度の高い任務が多いと聞かし、引退していたミコトまで借り出されることもある。

まったく、平和とはかくも大切なものだったのかと気づかされる。

そしてこの平和を守るためにも自分は負けられないのだ。

そう改めて気を引き締め、おつかいに行く。

「気をつけてね。」

「ん。」

ミコトの挨拶にヒビキはまたも頷きで返し、おつかい——キョウカのオムツを買いに行くのだった。

☆ ☆ ☆

「あ。」

「ん?。」

文字通り、あつと驚く、というよりは見かけてつい声を上げてしまった風な声の方向へ顔をめぐらせると、そこには同じクラスのもう一人のうちは。

「・・・名前は?。」

「う、うちはタママです。」

「タママちゃん。」



「た、タマちゃん?」

「何か用?」

はつきり言うとう自分の家族を守るのが精一杯なヒビキとしては他のうちには情をかけづらいし、かけたくない。

ちつほけな同情心で救えるほどヒビキの手は広くないのだ。

情が移れば罪悪感を感じることになる。

助けたいのに助けられない自分の無力さに。

そんなのは御免だし、四歳の時に自分は思いのほか精神的に弱いらしいことが分かったヒビキとしては抱え込む荷は少ない方がいい。

そっけなく応対する。

「あの・・・それ写輪眼ですか?」

「あ。」

こんどはヒビキがあつとした番だ。

確かに写輪眼のままだった。

基本的にうちは一族には写輪眼が使えることを教えていない。

ギタンも他の一族に自慢はしていなかった。彼の性格からして、したかっただろうが

そんなことになれば忍になれと他のやつらから言われることが分かっていたからだ。わずかに4歳にて写輪眼を開眼。

放つて置く選択肢は無い。

さらに今の自分は戦争後で忍が大量に死んだ後。

知られれば小さいことは度外視で、すぐに下忍とされてしまう。

それは遠慮したい。

母親の話によると人手が足りないばかりに実力の割に酷な仕事を任される下忍が多いらしく、そんなことになれば再起不能になり、最悪死にざまをさらすことになる。

ヒビキは確かに早く強くなりたいが、それで無茶して怪我しては本末転倒なのだ。

それにもう少し。いつになるかは分からないがイタチが10前後の時に木の葉の里を九尾が襲う、九尾事件が起こる。

あと2、3年だ。

これがおそらく一番楽しんでマダラを倒しうる絶好のチャンス。

なにせ九尾を捉えに来たマダラ相手に四代目火影と共闘できるのだ。できればその時に確実に潰したい。

そのためならば多少の修羅場をくぐるべきとも思うが、如何せん難しい選択である。いつそのこと四代目に話して修行を付けて貰おうかとも考えている。

「秘密にしておいて。」

「その・・・あのイタチさんと互角に戦って、写輪眼も使えるなんて凄いですね。」

「それで？何が言いたいのです？」

「あ、いえ・・・その・・・」

ヒビキはそっけないまま。

「私は落ちこぼれだから・・・ヒビキさんなら分かると思いますけど。」

「知らない。見てないもの。」

「そ、そうですか・・・そうですね。私なんて・・・」

どうも自分に自信が無い子のようだ。

ヒビキはため息を吐いて、タマモに向き直る。

その顔は自虐で塗り固められていた。

笑っていればさぞかし可愛い顔立ちであろうに。ちなみに髪はウェーブのかかった

肩くらいのもの。

うちはでクセつ毛とは珍しい。

毛に注意が行っていたのが分かったのか、そのことに対してタマモが答えた。

「私は純血のうちはじゃなくて・・・」

「聞いてないよ。」

「は、はい。すいません。」

別にどうでもいい話だ。

半分とは言え、うちの血が入っているのは彼女も抹殺対象だろう。

「家を追い出されたとか言うユクモの娘？」

ありがちなのだが、こういった血統に誇りを持つ一族は一族間で結婚するのを当たり前とする。

その辺の馬の骨に惚れたのが遺憾で、追い出されたとかいった所。ヒビキもさわり位なら聞いたことがあった。

別に珍しくは無い話らしいのだが、今まではうちの血を守るために殺していたそう  
だ。

木の葉の里に腰を落ち着けた今となってはそうした風潮は廃れて行ったらしいが、やはり風当たりは辛いのだろう。

事実この娘を今まで家の近くで———うちの区画で見たことが無かった。

うちはと名が付いてはいてもうちはの家紋を付けてもいない。

「は、はい。ユクモは父さんの名前です。死んじゃいましたけど。」

泣きそうになるタマモ。

なんだか苛めているようだ。

というか泣き始める。

「忍が泣くな。」

「でも・・・お父さん、帰ってくるっていったのに」

その時のことを思い出したのか、泣きじやくり始めたタマモ。

そんなのは自分の家だってそうだ。

いつもと変わらず特に気負いもせずに父親のギタンは「すぐに帰ってくる。」とにこやかに笑ってそのまま逝ってしまった。

涙をハンカチでぬぐってやりつつ、ヒビキはそのまま翻る。

このままだと雰囲気当てられて自分も泣きそうだった。

「またね。私、おつかいがあるから。」

「ふえ・・・は、はい!」

何が嬉しかったのか満面の笑みを浮かべるタマモだった。

☆☆☆

「へえ、タマモちゃんに会ったのね。」

キョウカにお乳を上げながら、晩御飯を食べるミコト。

「知ってるの?」

「聞いてただけだけどね。お父さんのユクモさんはパパの親友の1人で、結構やり手のうちはだったらしいよ？」

私から見たらただのチャラ男だったんだけどね。なによりパパにキャバクラを教え  
た野郎だし、ぶち殺したいくらいなんだけど。」

「ふ、ふうん。」

殺気が溢れていた。

殺しはしないにしても本気で殴るぐらいはしそうだ。

というか多分したのだろう。

「ねね、タマモちゃんは可愛かった？」

「うん。まあ。」

「そう！見てみたいなあ!!」

あ、でも、ヒビキとキョウカには叶わないでしょうけどね！ねえ、きょうかあ？」

「あぶ。」

撫でながら乳を懸命に吸うキョウカに向き直るミコト。同意を求めるとような口ぶりに不機嫌そうに声を上げる。

ちよつと興奮して動いたせいか乳が口からはずれ、みつともなく口の周りを汚していた。

「あら、ま、ごめんねえキヨウカ。今、フキフキするからねえ。」

にこやかに笑いながらキヨウカの口の周りを拭くミコト。

それを見て微笑むヒビキ。

「今度、お家につれてきなさいよ。」

「え。」

「嫌なの？」

「いや、別に・・・」

「貴方、今までずっと友達らしい友達を作らないんだもの。母親としては心配なのよ？」

「ぜひとも見てみたいわ。ヒビキの友達がどんな子なのか。」

「・・・わ、分かった。」

友達というには気が早いし、もともと仲良くなるつもりは無かったのだが、母親にいらぬ心配をさせていたとは初耳である。

ただでさえ今の母親はたまの忍としての仕事と子育てや夜鳴きで心身ともに疲れている。

要らぬ心配はかけたくなかった。

それにうちはの家紋を付けることを許されていないというならばギリギリ彼女はセーフな気もする。

もともとうちは抹殺はクーデターを阻止するため。

ダンゾウのことであるから監視くらいはするだろうが、それでも殺すまでとはいかないだろう。

ちよつとだけ友達になつてもいいかなあと思ひ始めていたヒビキだった。



## タマモに教えてあげよう

「・・・はあ、今日もまた修行か。」

毎日のように演習場に通い詰めるヒビキ。

今日は写輪眼で盗み見たイタチの手裏剣術の模倣が目的だ。

写輪眼はありとあらゆる忍術、体術、幻術を見切ることが出来るがゆえに見切った技を真似ることが出来る。

が、これにはもちろんそれを成しえるだけの下地があつて初めて可能なこと。

チャクラを大量に消費するならチャクラが無ければ無理だし、手先の器用さが求められるならそれだけの器用さを持ち合わせて無くてはいけない。

ただ写輪眼で見切ったからと言つてもうちはなら誰でもすぐにコピーできるといふのはお門違いなのだ。

だからこそ千の忍術を模倣（コピー）した忍者としてカカシは有名になつたのである。

普通はそこまでの数を模倣するのはうちでも無理だ。

つまり何が言いたいかと言えば、模倣眼としての側面も持つがそれは不完全なものであるため、一度見た技でも多少成りの練習が必要であると言うこと。

手裏剣術を始めて一週間。

かなり様になってきた。

やはり手先の微妙な動きすらも見切る写輪眼さまさまといったところだろう。

普通に見るだけでは年単位の修練が必要だった。

ただこうも小さな頃からずっと修行だと元日本人である彼にとつて若干以上に飽きてくるのは仕方が無い。

しばらく休むのもいいかなあと思つても、こうしてる間にもイタチが強くなつていく！とか考えてしまいろくに休めない。落ち着かない。

であるならばいつそのこと修行していた方が有意義であろうとのことだ。

そして今日も演習場に来ている。

もう半ば強制的であるがゆえになおのことやる気が沸かない。でもやらないと死ぬ。

うんざりしながら今日も特訓し続けるのである。

早くイタチとマダラが襲つてくる日になって欲しいと思う反面、もつと遅くなつて修行する時間を稼ぎたいと考えながら案山子に向かつて手裏剣を投げる。

スコンスコンと軽快な音を発てて、演習場の案山子に手裏剣がささる。

イタチの当て投げ投法も結構な命中率になってきたと思うが、これが動く的だったらまず当たらないというレベル。

常に写輪眼は使っているのです、どう投げるとどう飛ぶかが分かっている。それでも難しいのがイタチの手裏剣術。

真面目な話、彼が火影でもいいくらいだ。戦闘力という観点だけで言うならばだが。なんてことを考えながら特訓をしていると。

「・・・こんにちは、ヒビキ。」

「ん？うん。こんにちは。」

演習場で特訓しているヒビキに声をかける人影があつた。  
うちはタマモである。

「・・・今日はアカデミーもないよね？」

「休みだけれど、それが？」

「えと・・・ううん・・・別に。」

「そ。」

会話終了。

あまり喋りたがらないヒビキと自身の劣等感（コンプレックス）のせいか内気な人間であるタマモ。

当然の結果である。

ヒビキは話しながら手裏剣を投げ続ける。

ちなみに当て投げはしない。

まかり間違つてイタチにそれが伝わり、「俺以外にも強くなろうとしてるヤツがいるのか。俺も負けてられないな」みたいなやる気を出されたら叶わない。

もう最近はいタチを見るたびいつそのこと殺して・・・みたいなことを思つてしまうから考え物だ。結構追い詰められていることを自覚してきたヒビキである。

多少のゆとりを持った方が良い。

「あの・・・」

「見ての通り忙しいんだけど？」

「・・・ご、ごめんなさい。」

「・・・何？」

何か言いたそうにしてたタマモを見て、手裏剣を投げのをやめて向き合うヒビキ。たまには誰かとゆつくりおしゃべりするのも良いかもしれない。

「い、忙しいならいいよ。ご、ごめんね。」

「別に忙しくないよ。」

「いや、でも今・・・」

「じゃあ言い方を変える。忙しくなくなった。だから・・・えと・・・お喋りでもする？」

「う、うん！」

嬉しそうに答えるタマモだった。

お喋りの内容は日々の他愛の無いこと。

修行のこと。写輪眼についてなどもろもろだ。

「……その……えと……手裏剣の投げ方を教えてください。」

「……私に聞くより親に……ああ、今はまだ戦後処理が忙しい時期か。」

例えヒビキがうちではであろうと今の段階ではさすがに大人の忍にはあらゆる点で見劣りする。

ゆえに親に聞いた方が良いとおもったのだが、今はまだ戦後処理で忍は引退した者まで借り出される始末。

ヒビキの親と同じで彼女の母親も忙しいのだ。

「……分かった。いいよ。」

「ほ、ほんとっ!?!」

「まず手裏剣を構えて。」

タマモは嬉々として手裏剣を構える。が、興奮して刃の部分を持ってしまったのかブツツリと指を切ってしまった。

「っあう。」

「……何やってるのさ。」

「ご、ごめんね。」

「私に謝られても……どんくさいなあ。」

「ご、ごめんなさい。」

「だから謝ることじゃなくて……」

「……。」

笑顔から一点、悲しげに顔を伏せるタマモ。

ヒビキはため息を吐きつつ。

「ほら、もう一度構えて……」

「ほんとにごめんね……。」

そのまま走り去ってしまった。

再度ため息を吐くヒビキ。

「謝るくらいなら僕の善意を無碍にするなど言いたい……。」

呆然と走り去るタマモを見ていたのだった。

特訓する氣勢も削がれ、みたらし団子を買って帰るのだった。

☆ ☆ ☆

次の日、アカデミーをタマモは休んだ。

何かおもうところでもあるのか、はたまた単純に風邪でも引いたのか。

「ヒビキ、俺と組み手しないか？」

「おことわる。気分が向いたらね。」

「そうか・・・残念だ。」

この前の組み手以来、こうして組み手を誘ってくるイタチ。

こちらとしてもイタチの力量を測れる機会なのでイタチが奮起しない程度に戦う分には構わないのだが、比喩ではなく戦えば戦うほど強くなるイタチ相手にあまり組み手をしたいたとも思えず、なんだかんだで一週間に一回の頻度くらいが大体だ。

それが分かっているくせに毎日誘ってくる目の前のイケメンを意に介さず、ヒビキはアカデミーを出て行く。

そのまま帰りにみたらし団子を買って向かった先はうちはタマモの家だった。

うちはを追放されたとして有名であるから家の大体の位置は分かるのだ。

「ごめんください。」

呼び鈴が無かった。

付けとけよと思いつつ。さらに言えば家自体もかなり古めかしい。

もしかして呼び鈴をつけるお金も無いのだろうか？なんてことをちよつと思つた。

「あつっ！」

いらつしやい。」

「あ、えと……」

「タマモのお友達かしら?」

「……そうです……多分。」

知人の方が正しかっただろうが、多少表現が過剰になるだけと思い肯定した。

違うとタマモ本人から言われたら言われたで、前言撤回すれば良いだけの話。

「多分?」

わざわざ娘が休んでいたのにも関わらずやってきてくれたのよね?

赤の他人が来てくれるとも思わないし……」

タマモと同じちよつとウエーブした髪の毛を揺らして首を傾げるタマモ母と思われる人物。

「うちはヒビキです。」

それで風邪ならと思つて見舞いに来たのですけど……」

実際は昨日のことであつたとモヤモヤとした部分を解消しようとしてやってきただけに過ぎない。

なんというか、あんな感じに帰られると誰だつて後味が悪いだろう。

「ああ、ごめんなさいね。ちよつと引越しをしようと思つていて、それで娘にも手伝つて



もらっていたの。」

「引越し?」

「ええ、少し纏まったお金が入ったものだから・・・」

悲しそうに言う。

纏まったお金とは保険金的な物だ。

夫が死んだことで里から殉死した尊い犠牲に報いるものをみたいな感じで纏まったお金がもらえた。

別に今まで越すための金が無かったわけではないが、これを機に新しい家に引っ越そうと言うのだ。

今まで使っていた家では死んだ夫を強く思い出すということだ。

中にはむしろ忘れたくないと考える遺族もいるだろうがーヒビキ一家がそうであるー今回彼女達、母娘は去ることを選んだのだろう。

「・・・心配して損した。」

風邪の時は弱気になる。

もしくは昨日の一件でアカデミーに行きたくないとか言われたら寝覚めが悪い。

励ますというほどの意志はないけれど、謝られる筋合いは無いと言いに来たのだが無用な心配だったようだ。

勝手に心配してるだけだろ？と言われてしまえばそれで何も言い返せないけれど、多少の不満が沸いてくる。

「あ、ヒ、ヒビキ君。こんにちは？」

「どうしたの？こんなところまで来て？」

「たまたま通りかかっただけ。そしてなぜ君付け？」

風邪か気負いか。

とりあえず精神的に参っていただろうから、お見舞いの団子まで用意したと言うのに空ぶった。

サツと団子を隠したヒビキである。

そして通りがかつた際にちよつと気になってという体を作った。

タマモ母はニヤニヤしている。

「え？」

「ご、ごめんなさい・・・ヒビキさんは・・・いえ・・・そのつい・・・」

「ついて何だよ。」

「下手な男の子よりも振る舞いが男らしいから・・・」

「・・・女らしくない？」

「ご、ごめんなさい！」

「別に怒ってないよ。．．．むしろ嬉しい。」

「え？」

「何？」

「あ、いえ．．．なんでもないです。」

振る舞いが男らしい。

中身男であるヒビキにとつてこれほど嬉しい事は無い。

自分の男らしさは女になつても内から溢れ出てくるということである。

「どんなところが男らしい？」

無表情を心がけているヒビキにしては珍しく笑顔で聞くヒビキ。

顔が近いのもあつて、ちよつと照れたのか頬を赤くして答えるタマモ。

「あ、えと．．．言葉がぶつきらぼうなところとか．．．」

「．．．さいですか。」

一気に落胆するヒビキ。笑顔が一瞬で無表情に切り替わつた。

男らしいと言うのは結構単純なところから来ていて、身から溢れ出る男オーラなんて

ものは無かつたようだ。

はしゃいだせいか、団子の入つた袋がタマモの目に入る。

あつと気づいたヒビキはこの際だから押し切つてしまうことにした。

「私はもう食べ過ぎたからいる？みたらし団子。嫌い？」

「だ、大好きですけど・・・良いんですか？」

「食べ過ぎてお腹一杯。これ以上食べたら太る。というわけで食べてくれたら嬉しい。」

「でも悪いですし・・・」

「じゃあ言い方を変えよう。」

「食べてくれると嬉しい。」

「・・・は、はい。」

こうして2人はちよつとだけ仲良くなったのだった。

## 熱き珍獣マイトガイ

タマモと今まで以上に話すようになって一月が経つ。

「上手くならないなあ。」

「ごめん。」

「いや、私の教え方が悪いのかもしれない。」

あれからヒビキは自分の特訓の合間にタマモにも教えると言う形を取っていた。

だが、タマモはあまり上手くならない。

ヒビキは教え方がと言っているが、実際はそんなことは無い。

写輪眼でどこが悪いかをハッキリと分かることが出来るのだ。

特別良いとまでは言わないけれど、少なくとも悪くは無い。

となれば。

「才能無いんだよ・・・私。」

「そうだね。」

「・・・ぐず。」

普通に肯定するヒビキの言葉にちよつと涙目になるタマモ。

そこはもうどうしようもない。

ヒビキはそう話している間でもチャクラコントロールを身に付けるための木登り修行をしていた。

木にぶら下がりながらもタマモと話している。

「・・・もういいよ。」

「何が？」

「私が修行したって無駄だし・・・ヒビキにも悪いよ。」

「何が？」

「何が・・・って、だからどうせ無駄だからヒビキの修行を邪魔しちゃうから・・・」

「いいの?」

「私ね・・・前々からそうなの。クラスの皆からもうちはのくせに落ちこぼれだってバカ

にされてるし・・・」

「ふうん。別にいいならいいけど。」

「うん・・・じゃあ、今日はこれで・・・また明日、あうっ!」

去ろうとするタマモの服の裾を引っ張るヒビキ。

いつの間にか木から下りていた。

「迷惑かどうかなら別に迷惑じゃない。」

「えと・・・」

そつぽを向きつつ答えるヒビキ。

ソレに対してタママは呆然としただけだった。

単純に迷惑かどうかじゃなくて、タママが強くなりたいかどうかをたずねるつもりだったのだが、なんとなく少年誌っぽい青臭い言葉を吐くのに恥ずかしさを感じたために回りくどい言い方をしている。

いちいち態度や行動がツンデレっぽいのはそのためだ。

良く考えてみれば分かると思うが、大人になってから少年少女の子供向け漫画を見るときのこそぼゆさを思い浮かべてもらえれば良い。

友情とか努力とか大人になってくると面と向かって言うのは中々恥ずかしいことだろう。もちろん人によるし程度にもよるのだが。

要は、自分のことを気遣ってるなら必要ないよ、タママが強くなりたいてって言うなら手伝う。ヒビキの言葉を意識するならばそういう意味である。

全部理解すると言うのは所詮子供に過ぎないタママには分からないが、気遣ってくれているのは理解した。

「でも・・・」

「強くなりたくないの?」

「強くなりたいよっ!!」

「……でも……」

「なら問題ない。」

ほら、さつき言った動きを反復して。もっと丁寧に教えていく。

型が崩れたら指摘するから意識して、そして一回一回を注意して。」

「……うん!」

こうして2人で切磋琢磨していくのであった。

帰り道。

「ありがとう。」

思い立ったように言ったお礼の言葉に。

「ん。」

ただ頷いて返すだけのヒビキがいた。

☆ ☆ ☆

「……ガイ上忍。」

「ん?」

なんだ君は。



見たところ・・・忍であるが・・・額当てが無いところを見るとアカデミー生かつ！」  
忍術、幻術は印とチャクラの動きを見切れば、チャクラ量が許す限りある程度のレベルまではその場で模倣しきれる。

しかし体術においてはそうは行かない。

こればかりは日々の地道な積み重ねが物を言う。

そして日々の積み重ね。そこで思いついたのが、体術の力量においては火影どころかおそらく忍の世界トップ3には入るであろうガイの体術を学びたいと考え、探していたのだ。

「それにその家紋。うちは一族の―」

「うちはヒビキです。ガイ上忍。」

「そうか。そっちは俺のことを知っているようだが、初対面だしな。自己紹介はしておこう！」

俺はマイト・ガイっ!!

この里で一番ナウい、イカした猛獣だ!!

「それで、ひとつお願いが・・・」

ガイの天然ボケをスルーした。

「なんだ？」

「体術を見せて欲しいのです。」

「ほう？」

「……一応理由を聞いて良いかな？」

いきなり見ず知らずの子供がやってきたというのに、親切に対応してくれるガイに対してヒビキは答えた。

「強くなりたいです。誰よりも。」

それで体術の強い人を探したら貴方を見つけた……ということだ。

「……ふむ。その猛る情熱。しかと受け取ったっ!!」

「……?」

情熱？

自分は普段どおり無表情で声にも抑揚はないはずなのだが。

確かに情熱を燃やしているとは思う。だって、強くならなければ死ぬのだし。

「ふっ、何。目を見ればおのずと分かる。」

目の前の男がどれだけの情熱を秘め、それが一体どういった質のものなんてのはな。

この俺、マイト・ガイにとって朝飯前だっ!!

何よりも同じ木の葉の仲間。

強くなろうと言う意志にこの俺が少しでも手助けできるといふのなら、これ以上に嬉しいことは無いっ!!」

「・・・良い人だ・・・良い人なんだけど・・・ちよつと苦手だ。」

ヒビキはちよつとだけこれからのガイとの絡みに不安を覚えた。ついでに言うヒビキは女である。

「さて、まずは・・・そうだな。俺にも任務がある。」

知っているとは思うが今の時期はまだ戦争の影響がいたるところに残っている。」

「はい、それは承知しています。」

「ゆえに今は無理だが合間合間を見て俺の体術を見せてやるし、直接組み手の相手もしてやろう。さらには超強くなれるともつぱら噂になっている、この根性ベルトもプレゼントだっ!!」

「・・・。」

どこで噂になっているのかは不明である。

「あ、ありがとうございます。」

「これをつけて日常生活や普通に戦う上で影響が無くなったら一人前だっ!!」

「頑張るんだぞっ!!」

「は、はい。」

早速、両足につけてみるヒビキ。

予想以上に重く感じる。

「そうだな・・・3日後くらいか。3日後の昼に演習場で待っているぞ！」

「分かりました。それとありがとうございます。」

「ふっ！気にするなっ!!」

そのまま瞬身の術で任務に向かうガイ。

「これで体術の件は問題ない。」

幻術は写輪眼の瞳術があれば十分だし、そもそもイタチやマダラに対しては通用しない。  
い。

対応策だけ練習すれば良い。

忍術は残念ながら基本的なものと、ミコトから教えてもらった火遁系、水遁系がいくつか。  
つか。

あとは影分身と螺旋丸。

ただし螺旋丸はまだ練習中。練習方を知ってて良かった。ただ小遣いが練習用のゴムボールや水風船などに使われて、懐が寂しいのはやむをえない犠牲か。

「次は医療忍術辺りかな。」

ひたすら術を覚えていく。

ありとあらゆる状況に対応するために。

イタチとマダラコンビを退けるためにはまだ足りないくらいだ。

そして約束の3日後が来た。

「関心、関心。待たせてしまったなっ！」

「昼といわれてもどれくらいか分からなかったので、11時にはここに。」

「そうか。それなら俺ももっと早く来るべきだったかもしれないな。ま、それはともか

くとして根性ベルトを愛用してもらっているようで何よりだ。」

「愛用はしてません。」

「またまたあ！」

照れなくても良いんだっ!!」

「いえ、使つてまだ三日目・・・」

「ははあ〜ん？」

さてはヒビキ。

オマエ努力とかダサイとか思うタイプかっ!!

いかなあ、いかなぞ！

努力と言うのはナイスガイには必ず必要と言っても良いくらいの要素でな、俺がオマエくらいには三度の飯よりも努力が好きだったほどだ！

ナイスガイになりたければ熱き俺のように努力でゴハン三杯はいけないとな！！  
恥ずかしがる必要なんて無いんだっ！！」

「・・・確かにゴハンだけで三杯はちよつとした努力が必要そうですね。それと私は一応、女です。」

「ではさつそく・・・ん？」

そういうえば写輪眼だな。もう使えるなら・・・よし、ならばまずは俺が一連の動きをやる。

それを真似て見ろっ！！動きを真似たら実践による試験だっ！！」

「は、はいー！」

そして熱き燃える特訓が始まったのである。

「遅いッ！」

それでは亀に抜かれるぞっ！！

もつと気合をいれろっ！！」

「りよう・・・かい・・・ですっ!!」

汗をだくだくと垂れ流し、休憩も挟みつつ、ガイの熱血特訓は日が暮れるまでマンツーマンで続いた。

「それでも男かつ!!」

「だから私は女・・・はあ、はあ・・・だと・・・何回、言、えは・・・はあはあ・・・」

「敵の動きを見切れっ!!」

出来なければ死が待っているぞっ!!」

「見切れても追いつけ・・・」

「なにいつ!？」

重りを外したいっ!？」

重りをつけてやらないと意味が無いだろうっ!？」

「でもしんどい・・・」

「しんどいのがなんだっ!!」

俺も辛いっ!!」

ただ見てるだけしか、応援することしか出来ない俺だっって辛いんだあっ!!」

だからヒビキも頑張れっ!!」

俺も頑張るからなああああああっ!!」

「……はあはあ……」

「タテエツ!!」

立ち上がるんだっ!!

辛いだろうっ!?

苦しいだろうっ!?

しかしその苦しさの向こうに強さへの道が開けているっ!!

さあ、負けるなっ!!

自分に負けるんじゃないやなあああああああいつ!!」

「……うるせえ。集中できない。」

「す、すいません。」

こうしてガイの熱血男の猛特訓は終わった。

「ヒビキ……どうしたの？」

すっごい疲れてるみたいだけど。」

「肉体的にも精神的にもへビーだった。」

「アカデミーってそんなに厳しかったかしら? あ、そうそう、明日の帰りにキョウカのオ



ムツを買ってきてね。」

「・・・ん。じゃあ、私すぐにお風呂入って寝るから。」  
「おつかれさま。」

その日は良く眠れたと言う。

## イタチはやっぱり脅威的

「・・・ふう。」

「どうしたの？」

「別に。大丈夫。今日も組み手？」

「なんか疲れてるね。」

「ああ、うん・・・その・・・まあね。」

「えと・・・悩みなら聞かせて？」

「いつもお世話になってるし・・・その、話すだけでも楽になるものだって、お母さんが言ってた。」

「・・・悩みじゃないんだ。心配しなくても・・・ただ、しんどいだけだけ。」

「わ、私との特訓？」

ヒビキの言葉に涙を滲ませるタマモ。

「ち、違う違う！」

「そうじゃなくて・・・体術の訓練をするようになってね。それがちよつとヘヴィで、疲れが中々どうして・・・」

「体術？」

わ、私もやる!!」

「い、いや・・・それはやめておいたほうがいいんじゃないかな？」

「どうして？」

その・・・足手まといにはならないから!!」

「いや、足手まといがどうかじゃなくて、純粹に子供の身体には辛いんだよ。」

「ヒビキも子供じゃん。」

「いや、僕の方が大人だろ？」

「一緒くらいだもん。」

「・・・身長の話？」

身長の話はしないで。憂鬱になる。」

体の出来上がっていない子供の頃に過度の運動をすることは健康に悪いとされている。同年代の子供に比べて体が小さいどころか3歳年下の、それも比較的小柄なタマモと同じくらいの身長しか無いというのは、成長不良であるといえよう。

このままだと下手をすれば日本人の平均身長である160前後すら行かないかもしれない。

とはいえ、それが分かっているにしても修行の量を減らすわけには行かない。

なんせ健康うんぬんと言っていられるのも未来（さき）があつてのことなのだから。

「ヒ、ヒビキ君?」

「何?」

「と、とにかく私もやる!!」

「・・・分かった。僕からも頼んでみるよ。」

そのやる気に根気負けするようにヒビキはタマモの参加を認める。

自分が子供の時、こんなに熱心に何かに頑張ったことなんて無かつたなあと思いつつ。

タマモとしては単純に唯一の親しい友達との接点が修行しか無いため、友達であるがために懸命に喰らい着くという感じである。

もとい、修行は口実で、ただヒビキと一緒にいたいだけなのだ。

それだけのために心身ともにつらい修行に付き合うタマモは辛抱強いと言うべきか、子供らしいというべきか、それだけヒビキに対する思いが大きいと言うべきか。

☆☆☆

「なんだってえっ!?!」

「ひうつ?!」

その話をガイにするとガイは声を荒げて、タマモを睨む。ガイ自身には睨んだという自覚は無い。

「おっと、すまない。驚かせてしまったか。」

「……。」

ヒビキの背後に隠れるタマモ。

少し震えている。

これは相手が見ず知らずの大人であると言うのもあるが、一番はガイの見た目の問題だ。極太の眉毛と黒光りするオカツパ頭。

それが声を荒げれば子供としては多少なりとも身構えるのも無理は無い。

「タマモちゃんと言ったか。ライバルに差をつけられまいとするその情熱っ!!」

しかと受け取ったあっ!!

この俺がどこまで力になれるかは分からないが、全身全霊!

俺の技術を教え込んでやろうっ!!

まずはこれだっ!!」

といってタマモに渡すのは根性ベルト（小）。

さすがにヒビキ以上に華奢なタマモにはガイといえど気遣いを見せたようである。

ヒビキに渡したものの自体、軽めのだが、それよりもさらに軽い重りだ。

一見、根性という言葉だけで強引に理屈をすつとばしてしまいそうなガイであるが、修行に置いてはしつかりとした良識と常識を持って取り組む。

「これをつけた状態で自然に動けるようになるのが第一目標！」

毎日、欠かさずに走りこみをするのだ!! ライバルの隣に立っていたいというのならばサボるなよっ!!」

「は、はいっ!!」

「そしてヒビキ!!」

オマエは今日も俺と男の熱血組み手だ! 青春を爆発させろおっ!!」

「・・・僕は女ですし、爆発できません。・・・デイダラじやあるまいし。」

「それと、タマモチちゃんは俺とヒビキの組み手の見学だ。・・・よしっ! ヒビキっ!!」

どこからでもかかってこいっ!!」

「今日こそ一発は当てるっ!!」

ヒビキはいつもよりも写輪眼にいつそうの力を込めてガイとやりあう。

「熱血旋風っ!!」

あまりの蹴りの速度に空気の摩擦で炎を起こす蹴りがヒビキに襲い掛かる。

それを変わり身で避け、背後から渾身の拳を打ち込むが、目も向けずに避けるガイ。

そのまま翻って蹴りを繰り出す。

「くっ!!」

「殴られるのを恐れずに向かってくる、その意気やよしっ!!」

「でりやあっ!!」

「脇を締めろっ!」

「ばかものおっ!!脱力が基本だと何度言えば分かるっ!!」

「はいっ!!」

「こうして今日もガイの熱血特訓は終わった。」

「おっと、もうこんな時間か。今日も良い修行になった。」

「ガイ上忍も修行になるのですか?」

「うむ。」

「そ、そうですか・・・」

「次は二週間後くらいだ。それまでに精進するんだぞ。」

「分かっていきます。」

「そのままガイは自分の家へ帰っていく。」

「・・・はあ。疲れる。」

「はい、タオル。」

「あ、ありがとう。」

タマモに渡されたタオルで汗をぬぐう。

「で、どうだった？僕としてはオススメしないよ。」

「だ、大丈夫。」

ヒビキがやってるんだもん。」

「どういう根拠さ。ほんと、辛かったら別に・・・」

「辛くないもん。」

「そ、そう？」

「うん。」

「・・・まあいいけど・・・帰ろうか。」

「あ、うん。」

こうしてヒビキは着実に強くなっていくのであった。

ただ・・・

☆☆☆☆

「さすが俺の子だ。」



うちは頭領の家。

その庭先で一人の男が呟く。

向かい合うように立つ少年。イタチは少し疲れた様子を見せるも多少以上の余裕があるようだ。

「チャクラのコントロールがまだ甘い。無駄なく練れる様にな。」

「はい、父さん。」

「ところでアカデミーでの調子はどうか？」

大丈夫だとは思うが、いじめられたりとかは無いか？」

イタチは驚異的な速度で強くなっていく。

今ではなんでもありの組み手で父親であるフガクに本気を出させるほどである。

そこまで飛びぬけた子供が他に嫉妬されることを案じてフガクはたずねる。

「いえ・・・特には。」

「そうか。なら良い。」

「ただ・・・」

「何だ？」

「少し気になる相手が・・・」

「ほう？誰だ？」

「うちはヒビキです。」

「オマエと並ぶのは同じうちはであるというのは分かっていたが……うちはヒビキ……確かギタンの子だったな。」

「知っているのですか？」

「名前だけな。ただ、ギタンの娘というならば確かに納得だ。やつはうちはでも優秀な方だった。惜しい男を亡くしたものだ。」

「楽しそうに言うのですね。」

「……む、そうか？」

「はい。」

めずらしく微笑む父親の様子に顔を崩すイタチ。

「そう……だな……ライバル、と言っても良かったかもしれん。」

「羨ましいことです。」

「オマエにはまだ……そうか。そのうちはヒビキが？」

「はい、彼女はまだ本気を出していないようでした。」

「写輪眼で見たのか？」

「はい。どうして本気を出していないかまでは分かりませんが……チャクラの流れからし

て実力は俺くらいかと・・・それに他の生徒から聞いたのですが、彼女も開眼しているとのことですよ。」

「・・・将来有望だな。オマエの嫁に欲しいくらいだ。」

それを聞いて苦笑するイタチ。

「・・・その話をしたということは・・・」

「はい、俺としては本気で彼女と戦ってみたいというのがあります。」

「・・・そうだな。下忍になるまであと3年ほどか。」

・・・その子がオマエと同じ班になれるように根回しが必要かも知れんな。」

「あの・・・父さん?」

「同じ小隊に属せばその子の実力のほども分かるだろう?」

何、それほど無茶をするつもりは無い。ただ出来るだけそういう方向に、と願うくら

いだ。」

「・・・。」

「あなたー、イタチ、ご飯よー。」

「ほら、母さんが呼んでいる。家に入れ。」

「はい。」

フガクとしては実力うんぬんよりも単純に仲良くなつていずれ子供を、とちよつとした打算で言つただけである。

同じ小隊になれなかつたらなれないでも構わない。

できれば・・・程度である。

もちろんそんな思惑に乗つかるほど単純でないヒビキであるし、中身は男である。

そして、イタチも特にそういった対象だとは考えていない。

そもそも、まだ8歳児なので結婚はいささか以上に気が早いというべきだろう。

ヒビキが実力を隠していることにイタチがすでに気づいているということをヒビキは知らない。

イタチに対する警戒がまだ甘いヒビキであった。

## 兜一族と。

一年後。

ヒビキは順調に成長していた。

年齢12歳にしてその辺の・・・という少し言い方が悪いものの、並みの上忍を打ち破るほどの力を有するに至ったのだ。

とはいえ、それを知るのはうちはタマモと体術の師匠であるマイトガイ。忍術の師匠である花菱キリカ。

なんだかんだで力を隠していることを見破っているイタチのみである。

「かあ、もう勝ち越されちゃったかあ・・・さすが隊長の一人娘だよ。」

「いえ、それほどでも・・・」

「なあに言ってるの。謙遜されても嫌味にしかないよ。」

キリカは頬を掻きながらそう言った。

螺旋丸も無事習得し、かなりのハイペースで強くなっているヒビキ。とはいえ、それ以上の成長速度でイタチはヒビキに追いついてきているのだが。

実際チャクラコントロールとチャクラ量では負けてしまっている。

「それにしてもキリカさん、今日はやたらと浮ついているように見えましたか・・・」  
「あれ？分かる？分かつちやう？」

「・・・。」

あれ？今日のこの人、なんかウザい？と思い始めたヒビキ。

浮ついていた理由に関係するのだろうか、それを尋ねるとこのウザさを享受しないといけないらしいそうなので、早く話題転換を・・・と思つたのだが、手遅れなようだ。

「ついに・・・ついに私にも青春がやってきたのっ!!」

くねくねと身体をしならせながら、悶えるキリカ。

正直、キモイ。

「・・・残念です。あなたもガイ上忍のお仲間になんか・・・」

「ええ、ガイ上忍の——つてちつがああああっ!!」

あんなのの仲間にしないで!!」

「あんなのつて・・・見た目をのぞいて暑苦しいところを除けば、良い人だと思いますけど・・・。」

見た目と暑苦しいところを除いてしまうと、それはガイのキャラの否定、もとい個性が要らないといっていることに気がつかないヒビキ。

それを無くしたら良い人も何もないだろう。

「私に春が来たのっ!! はーるっ!!」

「ええと・・・」

「私のような貧乳でも良いって人が現れたのっ!!」

「・・・は、はあ。」

「鈍いわねっ!!」

結婚を前提とした彼氏が出来たってことっ!!」

「それはおめでとうございます。」

「ありがとうございます!!」

「それで、その彼氏の方はどんな方なのですか?」

聞いて聞いてオーラを醸し出すので仕方なく聞いてやることにしたヒビキ。

「私の貧乳を気にしない人よっ!!」

「・・・。」

「むしろそれが良いんだって!! 困っちゃうわよねっ!!」

人となりが良い分からない。

僕が聞いたのって、キリカさんの彼氏の趣味思考のことだったか?

可愛らしく首をかしげたヒビキ。

「・・・ええと、どういうところが好きなんです？」

「貧乳万歳って言いながら私の胸を揉みしだくところかな？」

「・・・」

僕が聞いたのは彼の惚れた所・・・だったはず？

ここまで自信満々に言い切られるとこつちが何か聞き方を間違えた気がしてくるから困り者である。

「もう一度、もう一度・・・聞きますね？」

「どういふところが好きなんです？」

「ひんぬう万歳って叫びながら私の胸を夢中になって揉みしだく彼の変態的な顔・・・かな？」

ん？

あれ？

うぬ・・・？

ふむ。

ああ、これはボケか。ツツコまないかね。

「それ、短所ですよね。」

「え？」



「え？」

そなの？的な顔をされたキリカを見てヒビキは驚く。

「・・・あ、えと・・・そういえば口寄せ使いたいなあ!？」

もう話を変えることにした。

これ以上聞いていたらおかしくなりそうだ。

「え、あ、そう。よしよし、ならば私が口寄せの動物のいるところを紹介してあげよう。と言つても、紹介して、ちゃんと契約できるかはヒビキちゃん自身の交渉次第だけだね。」

「おおおっ。もえてきたああああ。」

棒読みで話に乗りまくリアピールをするヒビキ。

というわけで。

☆ ☆ ☆

「・・・着いた・・・のかな？」

戦争後は、二年経っていたとしても治安が悪化していたため、アカデミー生はおろか一般人すらろくに外に出れなかった。

しかしさらに一年経ち、ある程度治安や荒廃が回復してきたところでようやくやく里から

出れるようになった。

とはいえ、ヒビキは里の外に出れなかった。

それはなぜか。

当然のことながら、うちの目は非常に高位で有用な血継限界だ。

ゆえに1人で外に出ればたちどころに狙われる。

抜け忍や、やましいことをしている里の暗部などに。

ゆえに里の外に出る許可は一般人や普通の忍、上忍以上のうちならばともかく、アカデミー生が外に出れるはずは無かった。

だが、ここで裏技を使ったのである。

それは逆口寄せ。

本来は忍が口寄せされる動物を召喚するのだが、そこを逆に動物側に召喚してもらうと言うことである。

これならば例え他忍が襲ってきて、すぐに送り返してもらえれば良いし、里からそうした動物の住む山に行くまでの過程を安全に効率よく省略できる。

そしてそんなヒビキの向かった、というより口寄せされた先はうつそうと茂る森の中。

一箇所だけ大きな大きな空間が出来ている。

『ようこそ。客人。』

「っ!？」

いきなりの声にぱつと振り返り、身構えるヒビキ。

『そう警戒なさるな。誰も取って食いはせぬよ。そもそも我らは植食性ゆえにな。』

植食性とは一般に言われる草食動物という言葉の正式な呼び名みたいなものだ。

植物食性だからと言って、草のみを食べるわけではなく、根や茎、花粉、樹液、種と食べる部位は種類によって異なる。

ゆえに植物しか食べない動物として正しく表現する場合、植食性の動物と呼ばれるのだ。

などというんちくはさておき。

「・・・か、カブトムシ?」

『うむ。人はそう呼ぶな。我らは兜一族と呼ぶが。』

そこには大きなカブトムシがいた。

カブトムシと言っても日本産の赤みがかった黒いカブトムシではなく世界最大といわれるヘラクレスオオカブトの姿だ。

伝説の三忍が呼び出す、ガマブン太やカツユ、マンダを髣髴とさせる大きさである。

でかい。

ただ単純にそう思った。

『キリカから話は聞いている。まずはゆるりと話をしようか。』

「ええと・・・お、お邪魔します。」

『うむ。』

それからぼつりぼつりと話し始めると、兜一族とやら。

どうも結構な古参口寄せ動物らしいのだが、最近はキリカもほとんどやってこなくなつたため、人恋しいらしい。

ゆえに話し相手になつてくれればそれだけで口寄せの契約を結ぶと言う。

なんか楽勝過ぎて拍子抜けしたヒビキ。

「樹液美味しいですね。」

『そうだろうか？』

キリカ以来の新たな客人が来ると聞いてな。

出来うる限りのおもてなしをさせてもらった。』

コップに並々とつがれた樹液。

黄金色に輝き、凄く濃厚で軽い甘みがある。

呑んで分かったことなのだが、どうも経絡系が活性化され、一時的にチャクラ量が増

すようだ。

これは良い拾い物をした。

うちは一族抹殺の日のための準備に使おう。

「あの、この樹液を頂いても・・・」

『問題ない。いくらでもあるからな。代わりと言ってはなんだが、たまに遊びに来てくれ。兜一族は基本的に寡黙な物が多くてな。長年生きているせいとお喋りな我としては些か以上に退屈だ。』

「はい、それくらいなら・・・あ、ありがとう。」

隣にいた中型犬位のカブトムシに酌をしてもらうヒビキ。

礼を言うと、黙って一礼。コップに注いだ後は一歩下がって佇んでいた。

執事みたいだな、とちよっと思っただけである。

もちろん本物の執事は知らないのです、本物がどんな感じなのかは分からないが。

本日の成果。

ヒビキは口寄せが使えるようになった。

## タマモの理由

「大丈夫、がんばれる。」

「そう……。」

口寄せの契約からしばらく。

今日も今日とて修行である。

修行修行修行の毎日。

うんざりしながらもまた修行。

修行だ。

ヒビキは気になった。

目の前の少女。

うちはタマモのことが。

今日も彼女と演習場で特訓だ。

自分は良い。

これから先死ぬ運命が待ち受けていることを知っている。

知っているからこそ嫌でも、辛くても、苦しくても頑張れる。

ミコトの、キョウカのためでもある。

頑張れる。

頑張らなきゃいけない。

日々、修行を強制される形に、時々その理不尽さに泣きたくなる時があるものの、それでも頑張れる。

しかしどうだ？

目の前の少女はそんなことが起きるとは露も知らない。

いや、そもそも彼女はどの授業でも成績的によろしくない。

うちはのくせに、うちはのくせに。

そんな言葉を周りの子供たちに受け、バカにされてきた彼女。

たかだか9歳の子供が頑張るのはどうしてなのか？

アカデミーなんてやめてしまえば良いのだ。

何もそれが義務付けられてるわけではない。

うちはとして生まれたならともかく、彼女はうちはの名を受け継いでは要るものの、うちは一族からは疎まれてる。

強制されることはまず無い。

のにも関わらず。

どうして頑張れるのだろうか？

ふと気になった。

9歳の子供が辛い思いをしてまでここまで頑張れる理由は何なのか？

そこが気になった。

ちよつと考えてみる。

彼女は内気だ。

決して闘争を好むタイプじゃない。

強くなりたいたいから、とかそういう理由ではないだろう。

演技だとしたら大したものだが、まずその可能性は無い。

火影になりたいのだろうか？

子供が夢の職業に憧れるのは当然のことだ。

アイドルになりたいとか、飛行機の運転手（パイロット）になりたいとか、お嫁さんになりたいとか。

この世界ではそういった憧れの職業に上忍や火影があるのかもしれない。が、そんなそぶりは無いように思える。

「……タマモってさ。」



「・・・うん？」

「何でそんなに頑張るの？」

「・・・え？」

「別にそんなに頑張らなくても良いじゃない。」

そんなことを考えていたためか、ついと出るように言葉を発する。

それを聞いてきよんとしたタマモは、ちよつとしてから笑った。

「楽しいからだよ。」

「・・・？」

楽しい・・・のか？

ヒビキには分からない感覚だ。いやいや修行をしているヒビキには分からない感覚である。

忍術や幻術は確かに楽しい面もある。

前世には無かった要素で魔法とも言つて良いだろう。

だが、もう12年もこの世界にいれば苦痛の方が多い。

チャクラを使えば疲れるし、印を結ぶスピードをあげるためにひたすら同じことを繰り返す訓練だつてある。

それで腱鞘炎になつたり指を吊る、なんていう新感覚も味わった。

彼女も一緒に特訓していた時に一回吊っていたし、腱鞘炎でしばらく修行を休んだこともある。

それでも頑張るのは楽しいから。

そりや何かに向けて一生懸命頑張るのは楽しいと感じるかもしれないが、それはあくまでも自分を鍛え上げるもので・・・楽しさなど皆無だと思うのは自分だけなのだろうか？

そんな疑問が首をもたげる。

「・・・そうなの？」

「うん。そうだよ。だって、私今まで誰かと一緒に何かをしたこと無かったし・・・確かに大変だけど、こうして2人きりで頑張る時間がとっても楽しくて好きなの。」

「・・・そう。」

「・・・ひ、ヒビキは楽しくなかった？」

「・・・楽しいわけ無いじゃん。修行だもの。」

「・・・そう、だよね。」

がっかりしたようにしゅんとするタマモ。

「・・・だから、今日のノルマが終わったら団子屋に・・・その、2人きりで行こう。」

一緒におやつを食べるのは楽しくないわけじゃないし。」

「っ!?

・・・・えへへ、そうだよね!

一緒に団子屋に行く方が楽しいよねっ!!」

歸りに団子屋によると、ほっぺについたシロップをタママが舐め取ると言うハプニングがあり、年甲斐も無く（精神年齢的な意味で）慌てふためいたのはヒビキの黒歴史と化した。

## 火影とのコネクションを作ってみよう

カツカツと案山子に刺さる手裏剣。

その手裏剣は寸分の狂いもなく、案山子の頭に突き刺さっている。

「……」

それを行ったのは12歳という歳のわりには、まだまだあどけなさの残る顔立ちをしているヒビキである。

体術もそこそこに、忍術で言えば上忍クラス。幻術も対抗策ならば十分に修練した。

大人の意志を持ち、チャクラの流れが見える目、普通よりも潤沢なチャクラを持つうちはの体。

その三つがうまくかみ合った結果である。

「修行はこのくらいでいいかな？」

ヒビキの修行期間はほぼ終わりを迎えていた。

正確にはそろそろ本格的に準備に入らないと間に合わないかもしれない。もともとの修行の目的は火影との共闘によるマダラと名乗る男の抹消。

いわゆる九尾事件の時に決着をつけるということである。

そのため、写輪眼の能力と大人としての意志力をフル活用して、ハイペースで強く  
なつたつもりだ。

ただ、これには数点の問題がある。

まず第一。

うちは抹殺のことに関しては根本的な解決にならないこと。

うちは抹殺はうちは一族がクーデターを企てたがために起こる出来事だ。

ここにマダラは直接的な関与していない。実際にイタチによるうちは抹殺の手伝い  
をしたとはいえ、おそらくはそれほど大々的には動いてないはず。

ゆえにマダラという最強クラスの忍を倒すのはいささか以上にリスクのほうが大き  
い。

何もしなければ特に命の危険もなく、四代目火影とその嫁であるクシナという犠牲は  
出るものの、九尾をナルトに封じることができる。

第二。

仮にマダラを倒すとしてどうやって倒すかという問題がある。

四代目が戦っている最中に追い討ちをかけるようにマダラに追撃をかけるとしても、  
自分のことを微塵も知らない四代目が突如現れたヒビキに気をとられてマダラに討ち

取られる、なんてことがあるかもしれないし、とっさの行動でこちらが攻撃を受けるかもしれない。

一種の賭けになる、ということだ。

### 第三。

今のヒビキにとっての一番の武器は血筋でも、一般のうちはよりも天才であることでもない。

言わずもがな、ある程度の原作知識である。

さすがに事細やかに何がどの時に起こるかということまでは予測できずともどこで動けば効果的に未来を変えられるか？

それにある程度の検討をつけることができる。

これは大きなアドバンテージといえるが、今回のひとつの賭けによってマダラに注意を向けられるようになるというリスクが出てくる。

今後常に、だ。

このリスクは大きい。

マダラはイタチの真実を知っていた。

木の葉の相談役、暗部の総元であるダンゾウ、火影しか知りえぬことを知っていたのだ。

これすなわち、火影クラスの盗聴対策をされた部屋でも忍び込めるないしは盗聴手段を持ちえるということの意味する。

それが彼の使う時空間忍術によるものなのか、この時点で白ゼツ、ないしは黒ゼツによるものなのかはわからないが、とにかく木の葉という里のどこにいてもヒビキが付けねらわれるということに他ならない。

四代目に協力して倒しに行くならば決して顔を見られてはいけない。

そして、うちはであることがばれてはいけない、ということである。

うちはというヒントだけでも彼ならばヒビキをかぎつける、少なくとも疑えるまでには調べることができるはず。

それはまずい。

そしてこれが何よりも大事だが、うちはのクーデター関連は原作でも描写が少ない。

メインキャラの過去の話という扱いであるがために当然であるが、もしもこの機会を逃せば原作知識は原作時期になるまでほぼ役に立たなくなる。と、デメリットばかりあげてきたが、もちろんメリットもある。

まずは心強い味方ができること。

四代目火影だ。

彼が生きたままならば、ナルトの父である彼のこと。

おそらくうちのクーデターの阻止にダンゾウとは違ったやり方で協力してくれるはず。

三代目火影もあわせればどうにかできそうな気もする。

これが一番のメリットであり、見返りだろう。

次に四代目火影のミナトが生きているということは彼の扱う秘儀。

飛雷神の術が学べるかもしれないこと。これもまた大きなメリットであり、彼に直接師匠となってもらうのもいいかもしれない。

とはいえ、彼は火影。あまり付きっ切りでは鍛えてくれないだろうが。

将来的な脅威の排除にもなりえるし、どこまで力を貸したのかは分からないが多少なりともうちは抹殺のための戦力を削ることができる。

リスクに見合うだけのリターンはあるのだ。

四代目と一対一で戦っている段階でマダラを押ししていた。そこにヒビキが加わればマダラを殺すことは夢ではない。

そのためにも必要なこと。



それはヒビキが火影との接点を持つことだった。

「……これがまた難しいんだよね。」

頭を抱えるヒビキ。

今はまだアカデミー生だ。

戦争後で人材の不足ということもあつてもうすぐ卒業試験という異例の事態があるものの、それでもマダラの襲撃に間に合うかは微妙だ。

ほかの上忍に力を見せて早々に下忍にしてもらったとしても、火影と直接話せるかは望みが薄いといえる。戦争からまだ一年半しか経っていない。

そんな時期に火影が暇をもてあましているか?といえばノー。

时期的にもそろそろナルトが生まれるころだ。

クシナの状態も気になるだろうし、仕事が終わればすぐに家に帰っているのではないだろうか?そして九尾の封印が弱まるという出産の時期が近づいている今、なおいつそう火影宅は神経を張り詰めているに違いない。

そこにマダラがやってきますよお!なんていう変なことを口走るガキがやってきたらどう思う?忍の世界では日本で言う織田信長とかそんな感じの立ち位置にいるマダ

ラ。

いきなり家を訪ねてきた子供が織田信長が実は生きていて、あんたの家の家宝を狙っているんだよ!!とか言われて信じる人はいるだろうか?いくら四代目火影が優しそうだからといって、少々以上に信じがたい話であるはず。

下手をすれば四代目火影の周りをかきまわって、チャンスをうかがっているマダラに警戒されかねない。

「なぜ俺のことを知っている?」と尋問、下手をすれば拷問だ。

どうやって彼らの様子を伺っているのかも分からないうちから監視されているだろう彼らにヒビキが近づくのはナンセンス、以上にかんりの危険行為。

信じる信じないの問題どころか、それ以前の問題だ。

信用されずに追い返された帰り道にマダラの使う得体の知れない時空間忍術で捕らえられるなんてことも考えられる。

どちらにせよ良いビジョンは浮かばない。

火影と話す。

このこと自体ができない状況だ。

もちろん影分身を使って、変化の術を使った後に火影に会うということも考えられる。

だが、それでもマダラに知られる。

「自分がいるということを知っているやつがいる」という意識を相手に与えてしまう。

このリスクを犯す気にはなれなかった。

何せ向こうは「自分が木の葉を襲うまで自分の存在は知られていない」という思い込みがある。この思い込みこそが最大の間隙であり、最大の攻撃のチャンスなのだ。

四代目と戦うときも誰かが四代目に援護に来るかもしれないとは考えてはいるだろうが、不意打ちの九尾にそれどころではない。

そう考えているその油断こそがヒビキにとつての活路だ。

そのチャンスをつぶしかねない行動には踏み切れず、軽々しくそのチャンスをつぶして良いのか？ そう考えると今一歩が踏み出せない。

かといって四代目に死なれてはまずい。

四代目が生きていろいろな原作展開がことなるが、そんなことはもはやヒビキの頭には微塵も入っていない。

ただ生き残るためにどうすればいいか？ それだけを考えている。

一応、四代目が死なないように、死鬼封陣を使わないようにすむように自分で封印術を編み出した。

封印術なんていうマイナーな忍術は日常生活では扱わないし、見れる機会もなかつ

た。

ゆえにオリジナルとして、忍術における物理法則のようなものに則り、作り出したのだが、これが九尾にどれだけ通用するか。

下手をすれば10分の1、いや、100分の1も封印できないかもしれない。

オリジナルで作り出したものが既存の、長年伝えられてきたものに勝るなんて都合のいいことはあるはずもなく。

使えればマシ程度の封印術である。

本格的な封印術を学ぼうにも、その専門のうずまき一族はすでにほぼ壊滅状態。クシナには会えるはずもなく。

「・・・くそ。」

うまくいかないことに苛立ちの声をあげるヒビキだった。

# ホワイトのゼツのスポアがハウスでデイスパースする

いろいろとグダグダと考えてみたものの。

やはり、すぐにあきらめてしまうにはあまりに惜しい。

四代目さえ生きていればそれだけで、うちの問題が片付くかもしれないのだ。この機会をあきらめる前にまだまだできることがある。

というわけで。

「えーつと……この巻物によると……」

母親のミコトからもらえるお小遣いは殆どが忍術関連に消費されている。うちは一族のクーデターを乗り切ったら、豪遊してやると思いつつ。

「これで……どうだ？」

感知忍術を学んでみたのである。

響が選んだのは感知忍術としては初心者用のポピュラーなものであるが、ポピュラーであるがゆえに習得は容易かった。

印を結び、集中して目を瞑る。

それだけでチャクラの大小や位置、質などがわかるという忍術だ。使うチャクラも少

ない。

とはいえ、ヒビキは感知タイプではない。

そういったセンスは無かったようで、せいぜいどの位置にチャクラを持つ生物がいるかどうかわかる程度である。

もちろん長く使われ、ポピュラーであるということはそれなりの対応策もあるためその程度の精査の術があてになるはずも無い。しかし、概ねの事柄において、やらないよりはやったほうがいい。

その気持ちで使ったのだが、やはりチャクラがわかる程度ではどうにも判断がつきにくい。

生物は大なり小なりチャクラを有している。それを無差別に探知してしまう上に才能の無いヒビキには大小がわかりづらい。

才能がマイナスということではないので、練習していけば実用に足るレベルになるのは確かであるが余計な修行に割く時間は残念がらなかった。

「・・・使えないな。」

何らかの手段で無効化されていることも考えると、かなり信用性は落ちると思つてもいい。

とはいえ、さすがのマダラとてそもそも自分の存在を知る人間がいなと思つている

のだからそこまでの対策はしてないはず。むしろわざわざチャクラを消していたら怪しいやつだと言っているようなものである。

「……こういう時に白眼がつかえたらいいんだけどな。」

白眼。

日向一族が持つ血継限界で、木の葉の瞳術としてある種有名なものである。

例外はあるものの、ほとんどのものを透視し、360度の視界、写輪眼を超える観察力を持つといわれる。

もちろんヒビキに使えるはずはない。

「くそ……ここにきて仲間がいないのがつらいと感じるとは……」

人間というのはどんなに優秀な人間でも一人でできることには限界がある。

その限界をカバ―するのが仲間であり、会社という組織だ。

会社というほどではないけれど、仲間の一人二人はほしいところ。

口寄せに頼ることも考えたが、火影宅の付近に見慣れないカブトムシがいたら誰だつて怪しむ。火影に疑われるのはまだ良い。

それをマダラ側に察知されるのは避けたい。

そう考えると同時にパツとタマモの顔が頭に浮かび上がったが、それを頭を振って飛ばす。

「……そもそも巻き込めない……」

巻き込めない。下手をすれば仲間までマダラに警戒されることとなってしまったのだ。

これが漫画の世界で、少年ジャンプであるならば助け合ってこそ仲間だろ！みたいな熱血展開もありかもしれないけれど、悲しいことにこれは現実。

一応この世界はジャンプの漫画元になっているわけだが、さすがに漫画のまま……というわけではない。

一人で抱え込みたいとは思わないし、この重荷を捨てることのできるならば即刻捨てたいけれど、抱え込むしもなく、捨てることもできない。

どの世界も、業界も、国も、社会も甘くないというのは変わらないらしい。

自嘲するような笑みを浮かべ、ヒビキはひとまず写輪眼と探知の忍術を併用しつつあたりをくまなく調べる。

もちろん買い物帰りを装ってだ。

買い物帰り、通りがかるふりをして見るため、短い時間の調査を日分けて繰り返し返す。

普段から写輪眼を使っているとやたらと目立つので、最近はずをカラーコンタクトで覆っている。



このカラーコンタクト。  
用意は至極簡単である。

別に専門の業者に依頼したとかではない。

まずは影分身の術を使い、分身がカラーコンタクトに変化。

ナルトが手裏剣に変化していたのをふと思いついて使うようにした手法である。

瞳の形にあわせるのも写輪眼の目のよさを持つてすれば形成の微調整は不可能ではない。

一見普通の目だ。

眠る際は外すのだが、外すのだって術を解けば一瞬だ。

ちなみに眠ってる最中も写輪眼でいられるようになったのは余談。

ありとあらゆる場所を調べた。

火影宅はもちろん、訓練場、アカデミー、うちはこの区画すべて、団子屋など。

一見関係ないところもくまなく調べ、とにかくマダラの痕跡を探す。

ずっと写輪眼を使っていたせいとか、写輪眼の扱いがうまくなっていく。と同時にとある異変を見つけることができた。

「……これって……？」

火影宅。

ミナトの実家という意味の火影宅ではなく、仕事場という意味での中央の忍集合所と  
いったような場所だ。

その周辺のぼんやりとした目を凝らさなくてはわからないほどの、小さな小さな粒  
粒の集合体を見つけた。

「……」

もちろん立ち止まって調べることはしない。

そのまま通り過ぎる。

「白ゼツの胞子……と考えて良いのか？」

要所要所にばら撒かれている。

おそらくは偵察。

完全な偵察用……と思われる。

が、とてもじゃないが弱々しく、ほんとうにそうなのか？

疑問が沸く。

かといって詳しく調べようにも、下手をすれば藪をつついてなんとやら。

ただの木の葉の防衛システムの一種かもしれないし、あれが白ゼツなのかもわからな  
い。

仮に白ゼツだとしてあんなところに胞子をつけることになんの意味があるのか？

どれもついてるのは人ではなく建物。

チャクラを吸い取って白ゼツ登場！とはならないはず。

あの状態でも探知は可能、盗聴は可能ということなのか？

どこまで可能なのかもよくわからない。

そしてあれがいつまであるのかも。

「ただこれで少しだけ希望が見えた気がする。」

そうぼやく。

あの胞子を警戒し、なおかつマダラが近くにいないのかを警戒する。

これで火影との会話が可能なのではないか？

そう考えるヒビキ。

「・・・あとはどうやって四代目と会うか・・・か。」

先も言ったように、今はいろいろと神経質になっている時期。出産という女性にとつての人生の踏ん張りどころであるという意味でも、九尾の封印が弱まるという意味でも。普通の出産でも母親が死ぬことがあるのだ。九尾が出ようとともがこうとする体の負担も合わせると非常に困難な作業であることが予想できる。

「・・・大丈夫、大丈夫だ。いくらでもやれる。やりようは・・・ある。僕のため、キョウカのため、母さんのため・・・タマモのため・・・大丈夫。きつとなんとかできる。」

暗示をかけるようにつぶやくヒビキ。  
その瞳に余裕は無かった。

イタチ、悔しがって・・・

「ヒビキ、どうしたの？」

「ん？」

「疲れた顔してる。」

「・・・ちよつとだけね。それよりもどう？進捗は。」

「うん!!ちよつと見て!ほらっ!!」

えへへ、すごいでしょっ!!」

ヒビキはタマモと修行中。

今日は木登り修行の次段階、水面歩行の行である。

「・・・うん。いいね。乱れがほとんど無い。」

「すごい練習したもんっ！」

内気なタマモにしては珍しく感情が表に強く出ている。

よっぼどうれしいということだろう。

「上出来。」

「・・・もつとほめてくれても・・・」

「ん?」

「別に。」

「いきなりどうしたのさ?」

「やつとできて喜んでたのに・・・」

「・・・うん、うれしいよ。うれしいけど・・・ヒビキ、あまり喜んでくれないんだね?」

「・・・僕が喜ぶのは変・・・でもないか。」

「先生役してるものね。・・・うん、嬉しいよ?」

「笑顔を浮かべようとして、うまく笑顔になれないことに気づくヒビキ。」

「ここにきて始めて笑顔を作る機会がないことにも気づいた。」

「だからだろう。ぎこちない笑顔になったヒビキを見てタマモは不満そうな声をあげる。」

「・・・うううう。」

「お、お祝いにお団子買って食べようか。」

「ほんとっ!?!」

「そういうば子供ってこういうところあるよね、とか思いつつヒビキは苦笑した。」

「子供じゃなくてもめでたいことはたとえ人事でも多少なりともリアクションしてほ」

しいと考えるのは普通のこと。

あわてて食べ物で釣ってみたのだが、うまく誤魔化せたようである。

やはりこのくらいの子供は花より団子なのかもしれない。

「それはそうとヒビキ。」

「何?」

「最近、怖い顔ばかりだよ?どうかしたの?悩み事?私、力になれる?助けられる?」

「大丈夫。たまたまだよ。・・・こういうたまの鋭さも子供特有のものか・・・」

「ん?」

「ありがと。でも大丈夫。」

「・・・そう?」

☆ ☆ ☆

じつくりと仮称「ゼツの胞子」の位置を確かめ、丹念に火影宅への侵入ルートを模索していたところ。

とある重大なミスに気づくヒビキ。

「久しぶりに付き合ってくれるのか。」

「・・・まあね。」

久方ぶりにイタチと組み手である。

今日も今日とて彼の力量チエツクだ。

「それはそうとヒビキ。お前は どうして本気を出さない？

俺の力が足りないからか？」

「・・・っ。」

なんとか驚きを飲み込むヒビキ。

タマモが相手の時は素が出ていても、イタチを相手するときには自然身構える状態になる。ゆえに無口無表情のクールな美少女然とした演技も自然と違和感が無いものになる。

表情に出なかったのは僥倖だ。

すつとぼけようと思ったが、ヒビキが力を隠していること。

これがばれていることがミス、というわけではない。

イタチがこちらの隠したがっているのを見たがっているならば見せてやればいいのだ。

むしろこれはチャンスだ。



「・・・別に。」

「すでにヒビキが写輪眼であることもわかってる。組み手だから使わないのか？」

「・・・深い意味は無いよ。」

「・・・だから、今日は本気でやろう。お互いに。」

そういつて写輪眼になるイタチ。

完全な写輪眼である。

ヒビキはいまだ、4歳のときに開眼しておきながらも中央の瞳の周りを囲む三つの小

瞳孔は二つまでしかない。

この時点でヒビキとイタチの絶対的な差を見せ付けられている気がした。

とはいえ、ヒビキの写輪眼が不完全なのは理由があるのだが。

「お互いもう少しで卒業だ。」

成績上、一緒の班になる可能性は低い。だからこそその前に本気でやってほしい。」

「・・・わかった。」

わかったという言葉は当然うそである。

この空気で嘘をつけるはずもなく、またつく理由もないだろうというイタチの思考の

裏をかいたつもりである。

イタチがそれを見破っているのかは定かではない。

ヒビキは写輪眼になって、イタチと相對する。

ここであえてヒビキの実力を誤認させることができれば儲け物だ。

そうすれば彼と戦う日が来た時に役立つってくれるかもしれないのだから。

「一本勝負だ。」

「・・・。」

ヒビキはうなづく。

☆ ☆ ☆

結果はヒビキの勝ちである。

とはいえギリギリと呼べるものだったが。

ヒビキとしてはもちろん勝つつもりは無かった。

イタチが殺す気か!?!と考えるほどの本気モードで攻めてこなければ加減もできたらうに。

逆に言えば“本気を出させ得るほどに差が小さい”ということに他ならない。

加減する余裕など微塵も存在していなかったのだった。

「……くそ。」

何を罵ったのか。

珍しくイタチの言葉が荒れていて、驚愕と悔しさで入り混じった表情を浮かべながら帰っていった。

くそはこつちの台詞である。

「……はあ。」

ため息をつく帰り。

当然、うちはこの区画にすんでいるため、イタチの偵察がてら家の前を通ることもある。

なんとなく様子が気になったのであえて遠つたのだ、そこでありえない光景を目にした。いや、十分ありえる光景ではあるのだが。

正確に言えばありえてほしくない光景を目にしまったのである。

「……っ!?!」

イタチがいた。

もちろんただイタチがいるだけというなら何も驚く必要は無い。

驚いたのはイタチが抱えているものに対してだ。

「サスケ・・・世界は広いんだな。」

抱えているもの、すなわち赤子にそう語りかけているのはイタチである。それともうひとつ。

サスケ？

サスケと聞いたか？

写輪眼による読唇であるからしてまず間違いない。

いつ？

いつたいつごろにサスケは生まれていた？

重大なミス。

それは修行にかまかけてサスケに注意がいつてなかったことである。

そう。ナルトとサスケはおそらく同年。

サスケは早生まれでナルトは多少遅い。

もし、サスケが生まれてだいぶ経っていたとしたら・・・

「っ!？」

それがフラグに。

それがきつかけになったかのように起こる悲鳴、ついで怒号。見たくない。

まだ準備は終わってない。

まだ猶予はあるはず。

あつて・・・ほしい!!

そう願って振り返るとそこには里をつぶす九尾の姿があった。

「くっつそおっ!!」

すぐに駆ける。

目指すはあたりをつけていた出産場所付近のいくつか。

なんのコネも持たないヒビキにとつて原作知識だけではさすがの限界があった。

マダラ事件の際の介入ポイントは大きく分けて4つある。

まずひとつはナルト出産直後。

これはもはや手遅れである。

ナルトを人質にとらせない。それだけでもずいぶん楽になるはずだったのだが。

二つ目は九尾を取り出す瞬間。

どんな人間も目的のものを手に入れた瞬間が一番の弛緩時。

マダラクラスともなればその一瞬はまさに瞬く間であろうが、それでも狙う価値は

あった。

しかしこれも九尾が出てきている以上いまさら何を言おうと仕方がない。

三つ目はミナトとマダラの戦闘時。

これもまたミナトと事前に打ち合わせができなかったことからむしろ気を散らす要因になりかねない。

ミナトクラスならばその動揺も押し込める、という可能性も無きにしも非ずだがもしものことを考えると行動に移せない。

四つ目は当然九尾の再封印である。

「間に合ってくれよ・・・」

もはやマダラをしとめることはあきらめる。

どの道いずれはミナトの意思を継いだナルトが倒してくれるだろう。

しかし、うちは一族の悲劇を避けること。

これはナルトではなく、ミナトにしかできないことだ。

ぴりぴりと肌に刺激を与える九尾の驚異的なチャクラを全身で感じ取りながらヒビキは向かう。

おそらくの最終決戦の場所へ。

## 九尾来襲

「いそげっ!! 医療班は下がってけが人の手当てを！」

「暗部はっ!? 暗部はまだかっ!!」

「こつちにきてっ!! 手が足りないのっ!!」

「おかあさあああああんっ!!」

「うわあああああっ!!」

阿鼻叫喚の絵を繰り広げる木の葉の里。

「くそっ!!くそっ!!くそくそくそっ!!」

ヒビキは風を切って走っていた。

『こつちだっ!!』

「!?!」

あらかじめ口寄せをしていたカブトムシを数体、各所に飛翔させてある。

その状態で逆口寄せを行えば・・・

「つつつ!?!」

煙が吹き出て目を開けるとそこはすでに移動した場所である。

隣にいる小型犬ほどの大きさのカブトムシにヒビキは目を向ける。

「コカブト、(カブト)はど(カブト)?」

『演習所のはずれの森ってところだ。・・・いるぞつ!?!』

ガガツ!何かを擦るような音が鳴り響く。

そして目の前には、マダラと四代目である。

「・・・好機・・・か?」

戦いを見る限り原作どおりマダラが押されているようである。

「・・・。」



二人の戦いを見ながらどうするかを手に汗を握りつつ、考える。考える時間は少ない。

「……よし。封印術の準備をする。手伝って。」

そう言ってヒビキは太ももにある手裏剣のホルスターの横にある小さな巻物を入れるためのホルスターから、巻物を取り出した。

その巻物を広げて、手を置くとボンと音が発ち煙が出る。

そこにはこれまた大きな巻物があった。

さらにそれを広げてチャクラを込めると赤い巻物が次々に出てくる。

これには封印術を刻みこんだ術式が書き込んであり、印を必要とせずにチャクラを込めるだけで対象を封印することができる。

『……？火影のピンチなんじゃないのか？』

「彼は僕を知らない。下手に気を散らすよりも次に備えたほうがいい。リスクが大きすぎるとは……わかるだろ？」

『九尾の封印……だな。』

「うん。あたりは？」

『つけてある。カブとカブタツクをはじめ、地形把握能力の高いカブトムシたちがお前に言われたことを念頭に探した場所。三箇所。死の森、死の森の外れ、里を覆う外周の森に約300メートル間隔で配置してる。』

「そう。ありがとう。」

これは原作知識だけではミナトが九尾を封じる場所が詳しくわからないためである。口寄せしたカブトムシを配置して、すぐに駆けつけられるようにとの配慮だ。

そして、各カブトムシ達には逆口寄せの要領でこの場にある赤い巻物自体を口寄せしてもらおうと、目の前の沢山の赤い巻物はボンボンと消えていった。

それぞれに配置してあるカブトムシ達が巻物を広げて封印式、もとい書き込まれた陣式の封印式を発動させる準備をする。

どれか一つでも九尾の近くに配置できれば連動するようにもできているため、配置はバラバラでも問題ない。

むしろどこに来るかが分からないがためにこのような手法を取った。

これは時間との勝負だ。

できれば念のための影分身も残しておきたいものの、あのクラス相手に影分身を残し

たところでチャクラの無駄遣いである。

かなりの数のカブトムシの口寄せに、封印式に込めるチャクラはカブトムシたちではなく自前だ。

下手にチャクラは使えない。

「急ぐーまずは演習場周りから・・・」

演習場外れの森に行くとな人はいなかった。

森でブービートラップや森林戦などの練習をする場合に使われるための場所で、さすがに九尾が来襲して里を破壊してる今は誰もいないようである。

いや、いないはずなのに。

「なんでここにいるのっ!？」

「ひうつ!?!えと・・・ヒビキが心配で・・・」

タマモが身をチヂこませながらきよるきよるとして姿を発見してヒビキは焦った様に声を荒げる。

普段から物静かで冷静に見える彼女のその姿に戸惑いながら理由を話すタマモ。

毎日欠かさず修行をしているヒビキのことを知っていた彼女はヒビキを心配して探し

に来たのだろう。

その気持ちは確かにうれしいが、今は都合が悪い。

「……くつ。とにかくここは危ないから早く非難を……」

幸い九尾は里中央にいる。

ここに被害が来ることはまずない。

今のうちに非難をすませて封印処理を、いや、それでは間に合わない。

「どうしてこううまくいかないんだ……とにかく、影分身を残していくからすぐに逃げて。いいね?」

「え、でも……」

「いいから。ほら、早く。ここはいつ巻き込まれるか……」

『こつちの作業は終わった。言われたとおりにセットしたぞ。』

「そう、ご苦労様。僕のチャクラを受け取って、封印式を起動しておいて。あとは……」

「ひ、ヒビキ?何を言ってるの?ヒビキは逃げないの?」

「僕は後で逃げるから大丈夫。だから……」

「だ、だめだよ。し、死んじやうよ！」

「大丈夫だからっ！聞き分けて!!」

「だ、だめ！一緒に逃げないと・・・」

『・・・ヒビキ、影分身に任せて早く行ったほうが良いんじゃないか？その暇はないんだろう？』

「・・・そうだね。とりあえず一番可能性の高い死の森の外れで待機しておこう。タマモ、影分身について行って・・・」

「やっ!!」

「・・・口寄せして。」

『わかった。』

「ほら、離して・・・」

「やだっばっ!!今のヒビキ、危ないもんっ!!」

「何が危ない？」

「・・・ずっと張り詰めたような表情をしてる。お母さんがそういう人は絶対大きなミスをするって言ってた・・・」

「・・・。もうしたんだけどね。」

「だから、だめ！」

「いいから離……」

『呼ぶぞ。』

「まつ!？」

ボンと音を発てて煙が晴れたところにはヒビキの目の前に、死の森の外れの光景が広がる。

『なんだ？その譲ちゃんは？助っ人か？』

「……はあ。これもミスに入るのかな……力づくで引き剥がせばよかった。」

「(こ、こ(こど(こ)?)」

「死の森って場所。すぐに離れないと……」

『手遅れ、みたいだな。結界が張られた。』

「……ああ、僕も見た。ほんと最悪だ。」

そして現れる九尾。

咆哮をあげて四代目を見据えている。

「……っ。」

あたふたとミナトとタマモの方を見比べた後、影分身を残してそのままヒビキはその場を離れる。

どっちを優先するかで言えばもちろん九尾である。

近づかなければタマモに危険は無いだろうと判断して。

☆ ☆ ☆

「君は……」

両手をあげながらミナトに近づく。

マダラと戦った直後の写輪眼ということは無意識にせよ意識的にせよ警戒しているようだが、クナイを構えるまでにはいたっていない。

「うちは一族、うちはヒビキといいます。」

「……そのヒビキ君がどうしてここに？偶然巻き込まれた……というわけじゃないん

「だろ？」

「はい。詳しくはいえませんが、今日この日をあらかじめ予測していたものです。」

「なるほど……どおりで……」

そういつてミナトが見るのは九尾の方だ。その九尾の体にはクシナが巻きつける鎖とは別に、呪印のようなものが浮き上がっている。それらが糸のように九尾に絡みつき、チャクラを吸収。

術者であるヒビキに還元している。

これはあわよくば九尾のチャクラを自前のチャクラとして取り込めないか？という試みだ。

とはいえ、ほとんどうまくいっておらず、九尾のチャクラの100分の1も満たない量を吸収した段階で体の節々が痛み、ろくに還元できなくなったので術式が刻まれている巻物自体に吸収させるといふ形式に切り替えた。

巻物の数はできれば千単位でそろえたのだが、テンテンが使うような道具の口寄せ用の巻物と違って、封印用の巻物は高価だった。

せいぜいが50に満たない程度しか用意できなかったのである。

なんとかミコトに小遣いを前借して手にいれた白紙の巻物に封印用の術式を加えた



ものが約50近く。

もちろんその程度で九尾が封印できるはずも無く、新たに現れた闖入者（ヒビキ）に対して九尾はただただ殺気をこめて睨んでいた。

「あなたの九尾再封印を手伝わせてほしい。」

「・・・分かった。」

「信用できるの？」

クシナが怪訝な顔でたずねる。

「ごもつともな疑問である。」

「目を見れば分かるさ。ここまで追い込まれた目をした人間が俺たちに危害を加えるとしてこんなにあけつびろげに会うわけが無い。それにうちはヒビキの名前は聞いたことがある。まんざらでたらめというわけでもないよ。」

「・・・。」

「この人もまた目がうんぬんと。そこまで分かりやすい目をしているのだろうか？」

もしくはガイ上忍と同類なのかも、と考えたところでそれはないなと判断する。まじめに考え込むヒビキ。が、そんな暇はないのですぐさま思考を戻す。

「聞いたことがある？」

「ギタンさんとは何度か任務を一緒にやって以来、ちよつとした仲でね。」

「・・・父が？」

「忍としても一個人としても尊敬できる人だったよ。話すことと言えば君のことばかりだからね。聞いていた通り可愛らしい女の子だ。ま、その話ともかくとして・・・手伝ってくれるというのにはありがたいけど、必要ないかな。九尾をナルトに封印する。」

「ど、どうしてっ!？」

「・・・。」

クシナは声を荒げ、ヒビキはただ黙している。

別にナルトに封印される分にはかまわない。

ただその方法が気になる。

「八卦封印だね。」

「そんなことをするくらいなら私が九尾を引きづりこんで死ぬわっ!!」

「いや、君の残り少ないチャクラはナルトに八卦封印と一緒に組み込む。」

その後の展開は同じである。

が、もちろんこれを是とできるわけがない。まずはヒビキが九尾を見る。

『貴様……その目……』

「……写輪眼っ。」

九尾に幻術をかけておとなしくさせようという魂胆である。

『……ぐ……ぐぬぬ……ぐおおおおっ!!』

叫びながら九尾は腕を振るおうとするが二重の鎖に阻まれ、体勢を崩すに終わった。

「……はあ……はあ……チャクラをだいぶ使ったのに……完全には無理か……やつ

ぱりね。」

『ぐぬお・・・小娘エ・・・』

目を押さえて片膝をつくヒビキ。

ただ、これであと数十秒は時間が稼げる。

九尾はガクガクと体を震わせている。動けないようだ。

「僕がこのまま九尾の相手をします・・・ので四代目は助けを呼んでください。」

できればヒビキが封印を肩代わりしたいのだが、そんな技術はない。

もちろん現在使ってるのもまたちよつとした足止めで精一杯である。あと1分2分もすればクシナの鎖以外の効果は消えてしまうだろう。

「・・・だめだ。」

「どうしてっ?」

「俺が火影だからだよ。里のみんなを犠牲にするわけにはいかない。当然、君もだ。」

「別に犠牲になるわけじゃない。ただの足止め。」

「ちよつと九尾を抑えるだけで肩で息をするような子供に頼らなくちやいけないほど俺は……いや、里をこんなにしてしまった以上、俺が頼りないってのは分かる。」

「そういうことを言いたいんじゃない！あなたが死ぬべきじゃないってことを言ってる！！……確かに九尾を抑えるのは難しい。それこそ頼りないだろう。」

……駄目だというなら……ほかの方法がある。」

「君が……屍鬼封尽を使おうって言うんだらう？」

「っ。……そうだよ。だから教えて。僕が使う。」

「それこそ犠牲だ。ここで犠牲になるのは俺の役目だ。」

「……そんな綺麗事を聞きたいんじゃないっ！！もつと合理的な話をしてるんだっ！！あなたが生きていれば、それだけで救われる人がいる！！人々がいるっ！！僕が生きてるよりもずっと多くの……」

ヒビキは別に死が怖くない。

そういうわけではない。

ただ合理的に。家族を、友人を。助けたいと願うならば自分よりも強く、人徳もある四代目火影が生き残ったほうがはるかに良い。

「確かに。それはれっきとした事実としてそこにあるだろう。だからこそ。だからこそ人は非合理的に生きるのだと思うよ。そしてそこが人が人たるゆえなんだ。ゆえに俺は君を犠牲にするという選択はとらない。なによりもこれは俺の責任だからね。自分のお尻ぐらい自分で拭かないと。・・・できればナルトのお尻は拭いてやりたかったけど。」

くすりと笑うミナト。

「責任をとるなら別の方法だってあるっ!!そんなおためごかしで責任から逃げるなよっ!!僕はもう嫌なんだっ!!どうして僕が戦わなくちゃいけないっ!!やりたくもない修行をしなくちゃいけないっ!!うちは一族なんて滅びてしまえばいいっ!!でも、母さんやキョウカ、タマモを殺されたくない!!だったらやるしかないじゃないかっ!!でも・・・でも!!僕じゃ駄目だっ!!あなたの・・・あなたがやってくれたらそれだけでみんな助かるはずなのにつ!」

ヒビキは慟哭を上げる。

その瞳はゆらいでいた。

そのゆらぎはギタンが死体となって帰ってきた日と似通っている。しゃべる内容もどこか自分のことを考えていない自虐的な部分もある。

「・・・確かに君の言うことも一理ある。君の話から察するに、なるほど。心当たりはある。うちは一族のクーデターのことだろう？ たしかに俺のほうがあまくやれる。その可能性はある。でも、君のほうがあまくやれる可能性だってある。俺だって失敗する可能性がある。失敗するかもしれないことを成功に導く秘訣。それはなんだと思う？」

だだをこねる子供に相対するようにやさしい声音で諭すようにつぶやく四代目。ヒビキの自分を柵に上げたセリフに対して嫌な顔ひとつせず。

まるで自分の子供に接するかのようによい瞳で語る。

「・・・わ、分からない。」

「成し遂げようとする、助けたいという意味。それが大切なんだ。」

「きれいごとは・・・」

いらない。

そう言おうとしたのだが。

目を見て悟る。

直感的に理解した。

目の前の彼は本当にそう信じているのだと。

「確かに俺も君たちの事は留意してた。でも、君の助けたいという意思にはかなうはずが無い。家族の愛というのはそれほど簡単に他人に理解できるようなものではないし、あつてはいけない。あつて欲しくない。そう俺は思うよ。今ナルトを思う俺の気持ちは誰にも分かりはしないだろうし、分かってもほしくない。

俺の気持ちは俺のものだ。そして俺が犠牲になることはナルトのためでもあるんだよ。」

「あらっ？」

私にもわかって欲しくないの？妻なのに。」

息も絶え絶えながらクシナがそんなことを言う。

「……き、君は例外かな。」

「そう。」



嬉しそうに笑うクシナ。対するミナトは少し頬が赤い。

「……。」

「俺はナルトが大きくなったときに、自分の責任を里の仲間押し付けた男だなんて思われたくないんだ。」

「それはあなた自身のためじゃない？」

「……それもそうだね。」

クシナは何を言っても無駄と悟ったのかもはやミナトの死を受け入れたようである。

「……そんなはずないじゃないか……そんなはず……」

「それにだ。君が死んだら悲しむ人がいるだろう？」

「そんなのあなただっけ同じ……っ!？」

「そう。同じだ。同じ里の同じ仲間だ。だからどちらが犠牲になった方がいい……なんてこと、絶対にありえない。」

「詭弁だ。」

「ああ。でも真実だ。それに……」

「ヒビキっ!!」

「タマモツ!?なんで・・・ここに・・・」

影分身は?と思えばどうやら写輪眼の幻術に集中しすぎたせいか、影分身は消えていたらしい。

「さつきから死ぬってどういうこと?」

「べつにどういうこともなにも・・・」

「し、死んじややだっ!!」

それを聞いてビクリと震えるヒビキ。

足が震え、手がかじかんでるかのようになまく動かない。その目には不思議と涙が沸く。

「君は言うほど覚悟ができていない。」

結局、ミナトは死んだ。

封印術の礎となって。

最後の一言がやけに耳に残った。

## 悔恨と苦し紛れの策

「……くそ。僕がしたことはなんだったんだ。」

あまりにありえない。

あまりにふがない。

あまりになさけない。

結局変わったのは、九尾のチャクラを多少でも取り込めたこと。

しかしこれは持久力が変わった程度の効果しかもたらさない。

ナルトのように九尾の衣を纏うことが出来なくもないが、うずまき一族や特別体が頑丈な忍ではないヒビキにとつては強い力を得るとともに体を傷めることになってしまふ諸刃の剣である。

さすがの九尾チャクラだけあって、ほんの一部にかかわらず、四本まで尾を出すことができそうであるが黒い九尾形態になればおそらく口クなことにはならないのが、感覚で分かった。一月くらいは余裕で寝込みそうだ。

なによりも一番の望みであつた火影を救うことができなかつたのだ。

最後の死の際にはナルトを頼むとか言われたくらいである。

どう考えても自分の息子のための思うならミナトは生きていくべきだったはずだ。ちなみにナルトは三代目に預けられた。

子供が子供の面倒を見るわけが無いのだ。

三代目には修行をしてたら急に九尾が出てきて巻き込まれたとかうんぬんと誤魔化しておいた。

「……」

サスケが生まれたことを見過ごす。

いくら修行で忙しかったからとはいえど、少なくとも数ヶ月の期間はあったはず。

それを見過ごすとはアホらしいにもほどがある。

さらにはイレギュラーな介入。

タマモの存在だ。

今思えば気絶させるなり、何も話を聞かずにとっとと行くというのも考えられた。

たとえそれで早くに行動したといっても大した変わりは無かったはずだが、次も無いとも限らない。

日本人の感覚がまだ抜け切っていないのだろう。

面倒だからといって相手を気絶させてやろう、なんていう発想になる日本人はなかなかいない。

そして自分の安否を気にして自身の危険も省みずに探しに着てくれる人間を放って無視なんてことはできなかつた。

これもまたミスだ。

どちらを優先するべきかはわかっていたはずなのに。

良心の呵責などその辺の虫にでも食わせればいいのだ。

なのにもかかわらず。

「・・・そろそろか。」

今日はアカデミーの卒業試験である。

一年。

アカデミーで一年の時間が過ぎた。

結構濃密な時間だった気がする。

すべて無駄に終わったのであるが。

☆ ☆ ☆

「次は・・・どうするべきか。」

僕は試験を行う前のアカデミーの控え室で考え事をしている。

いつそのことイタチを暗殺できれば、とも思うがイタチはむしろいたってまともな人間である。

木の葉の主権から遠ざかり、「あれ？俺らいつの間にかハブられてね？なら里をつぶすね！」みたいな馬鹿馬鹿しい子供の駄々のような理由でクーデターを起こすうちは。

その尻拭いを当時13、14頃。少なくとも10代後半には行かないくらいの子供にさせるのだ。

させるほうのダンゾウもダンゾウだが（それだけイタチはチートであるということを示唆している。暗部の長であるダンゾウの信頼を得られるほどに）、その原因であるうちはは恥ずかしさは感じないのだろうか？

仮に殺したところで比喩やネタではなく、第二の暗殺者が、第三の暗殺者がやってくる。なんていう展開になるのは当然わかる。

というよりうちはを生かしておいたらそれはそれでこちらもやばいのだ。

どう考えても巻き込まれるに決まってる。

というか巻き込まれ始めた。

イタチの父であるフガクがやってきてミコトと多少の口論になっているのを見かけたことがある。

おそらくクーデターのお誘いという各方面にはた迷惑をかける招待状を持ってきたのだろう。

血がどうの、血統がどうのといい始め、終わりには言うことを聞かなければ殺すよう

なことを回りくどい言い方でほのめかし。できれば乱暴は好まないとかなんとか。お前らの行動をもう一度よく省みてからそういうことは言つて欲しい。

省みた上で言つていた、という選択肢は考えないことにする。

そのあとも僕はどうなるだの、キョウウカがうんぬん。

原作を読んだときに思つていた疑問が氷解した気がする。

当然中にはクーデターに反対する穏健派だつていたはずなのだ。

そもそもそういつたことに興味の無いうちはだつて少なくとも無いはず。

なのにもかかわらず参加した。

うちははの一族のしがらみの強さがわかる。

うちははその血統と昔ながらに続く一族ということでは数はそれなり。

そして一族間の結束もなかなか強い。

一族すべてが大体顔見知りだし、そうでなくても知り合いの知り合い。それくらいのつながりには最低でもなつてしまう。

ゆえに。

クーデター肯定派が多いと、自然その人たちにかかわる家族も多くなる。

そしてうちははは一族間の愛情が強い。

これは兄を殺されたからといって木の葉を、日本で言うならば国というひとつの塊を



潰そうとすることに他ならない。

いくらなんでも愛情が強すぎだろうと。

何が良いかと言えば「旦那が言うなら・・・」、「恋人が言うなら・・・」という人間に加え、クーデターを起こされた後のことを考えると下手に抵抗してそれでクーデターが中途半端に終わってみる。

そうなれば生き残った、たとえ穏健派のうちはいえど里の仲間から追い出されるなり監視されるなり。

下手をすればその場で嘘をついてると言われ殺される可能性だつてある。

結果、「自分の先のために・・・」、「失敗させれば俺たちが死ぬ」などという保守派も加わり、クーデター肯定派に吸収される。

この大きな流れはともじやないが一人間にどうこうできる気がしない。

少なくとも今はそれに対する対策などひとつも浮かばない。

そう考えるとダンゾウの力量がわかるといふものだ。

保守派でもなく。

ただ現状維持の穏健派でもなく。

かといってクーデター肯定派でもなく。

ただ一人。

おそらくただ一人、感情を殺してでも里の平和を取れる人間でなかつうちはを殺する力量を持つ、里内の批判をすべて受け入れることに納得できる男。

うちはイタチ。

それを見つけ、うちはのクーデターを阻止する。

なんとすごい男か。

ダンゾウも大概チートだろうと思いつつ。

内政チートというものか？

いや、ちよつと違うかもしれない。

「いっそのことうちはがいなくなれば万事解決・・・そ、それだあつ!!つとやば。」

あたりを見渡す。

どうやら今の危ない発言は聞かれていなかったようである。

簡単な話である。

イタチではなく。

僕がイタチポジション。

もというちはを皆殺しにすればいいのだ!!

もちろん困難であることは確かだ。

まだ人を殺したことがないという壁もあるし、力量的な意味でも。

また暗部に、ダンゾウに近づけるかという問題もある。勝手にやればそれはまさしく反逆の使徒だ。

しかし。

しかしである。

うちは一族というひとつの集団よりも強いイタチ。

数の暴力は質に勝る。

その数の暴力すら退けるイタチは、一対一で戦えばうちは一族をひとつ相手にするよ  
うなもの。

もちろんいろいろと勝手が違うし、厳密には違うが多少大雑把でもそう考えて問題な  
いはず。

イタチを相手にするより一族を相手にする。

そう。

イタチが強すぎるのか、うちはが弱いのか。  
どっちでもあるのか。

とりあえずの方針を決めた僕だった。

## 中忍試験編

### 蓋を開ければ

「うし、そんじゃ準備はいいな、三人とも。」

掲げた手から二つのぬいぐるみを垂らすのはうちはシスイ。

彼はにこりと笑ってそういった。

☆ ☆ ☆

ヒビキは当然のごとく下忍となり、下忍となって初の活動。

それがサバイバル演習。カカシもやっていたソレである。

ちなみにこのサバイバル演習。もといアカデミーの卒業生をさらに振り分ける二次

試験。

メンバーはイタチ、ヒビキ、タマモである。

当然、偶然ではなく作物的な物であるし、しかし止むを得ない事でもある。

写輪眼の扱いを教え、鍛えるのは同じうちはの班長をあてがうしかない。

しかし、戦争後であることと、さらには九尾来襲によってさらに減った忍の穴を埋めるために優秀なうちは特に頼られ、殆どが任務の消化に当たっている。

そうなれば当然うちはを分けてそれぞれうちはのいる班にうちはの上忍をーというのはいささか以上に非効率的である。結果。

一つにまとめて、優秀どころのうちはを当てるといふ方針になった。

「さて。今回はこのぬいぐるみを二つ。とつてもらおう。」

「……。」

「……ぬいぐるみ?」

「……かわいい。」

イタチはただ黙して、ヒビキはぬいぐるみに怪訝な表情を浮かべて、タマモは単純に紐につながれた小さな猫と犬のぬいぐるみの感想を述べていた。

「ちなみに取れなかったやつはアカデミーに戻りつてことで。」

「……。」

「……む。」

「……ど、どうしよう……。」

「ど、なるはずなんだが、まあ時期が時期。上からその辺は融通を利かせろとの命でね。」

というわけではじめからこの試験の目的を言っちゃまおうか。この試験の目的、それはチームワークの重要性の再確認だ。」

それを聞いて言われるまでもないという顔をする二人と、なるほど、と納得するタマモ。

「だからわざと仲間割れするように2つに・・・」

「そういうこと。そしてそれを自身で気づかせるのが試験官の役割・・・なわけだけど・・・」

「言つてよかつたのですか？」

イタチが口を開く。

「ああ、問題ない。今は可及的すみやかに戦力の補充が重要とされてるからな。その辺は知っていれば、再確認すればそれだけで済む話。」

とはいえ、いくらなんでもそのまま合格させる、というわけにはいかない。

お前らも知っているな？

戦争後しばらく経過したとはいえ、まだあぶれた忍がある種の盗賊としてはびこつてるのを。」

「はい。」

「そういったやからから最低限、逃げるだけの力は持つてもらわないと里の外の任務な

んてこなせない。てなわけで、その力試しもかねてるのがこの試験だ。

お前らの目的は俺の持つわんこのぬいぐるみをとること。それも無傷で、だ。」

「……。」

「……厄介な。」

「……大丈夫かな？」

うちはシスイ。

瞬身のシスイとも称えられるその彼からぬいぐるみを奪うこと。

それがヒビキたちの目的となるらしい。

「準備をしたらすぐに開始だ。」

特に必要ないならこのまま続けるが……」

「大丈夫です。」

「僕も大丈夫。」

「わ、私も大丈夫です。」

「よし、なら……開始だ。殺す気で来てくれてかまわないからな。ただし絶対にぬいぐるみには傷をつけないように。」

☆ ☆ ☆

とりあえず僕とイタチで攻めることにする。

少なからず一緒に組み手をしてきた相手である。  
動きをかわせるのはたやすい。

まずはにつくきイタチが手裏剣を投げ、そこに追従する形で僕も攻める。

体術でシスイの身のこなしを見てどれだけの忍術をどんな風に避けるかの検討をつけるためだ。

これによつてぬいぐるみに傷を着けない、かつシスイに通用する忍術というバランスを取る。

イタチも瞬身でシスイの背後に回りこんでパンチを繰り出した。

僕は・・・

「木の葉烈風っ!!」

木の葉旋風の上位版とも言うべき蹴りだが、とどのつまり全身で滑り込むように繰り出す物凄い回転ローキックのことだ。

それがシスイに当たるといふ瞬間、シスイが消える。

さすがといふべき身のこなし。

イタチも僕も写輪眼を使っているからこそ見失うとまでは行かない物の、瞬時に距離を取ったシスイに驚かざるを得ない。

イタチも驚いているかまでは分からないけど、多分驚いているだろう。



写輪眼だから気づけるくらいに小さな表情筋の動きが見て取れたし。

そんなことを考えてると、タマモが火遁を使う。

木の葉烈風を避けるためにジャンプし、空中にいるシスイには身動きが取れない。

「火遁 龍炎弾！」

サスケがイタチに対して使った豪龍火の術の下位に値する忍術で、ファンタジーゲームに有りがちな炎の弾を飛ばすファイアーボールをそのまま龍の頭に変えたような忍術である。

威力は低く、炎の勢いも弱いのが、出が早く弾速自体も早いために当てやすい。頭にも当てない限り大したダメージにはならないが、牽制や、目くらましには最適な忍術だ。

何だかんだでタマモも豪火球くらいは使えるはずなんだけれど、ぬいぐるみを気遣って使う術を変えたと言ったところか。

なかなか良いアシストだ。

僕は僕でクナイや手裏剣を龍炎弾の影に潜ませるように投げる。

イタチはイタチでお得意の当て投げ手裏剣で多角的に攻めていた。

当然、それらはどれもがシスイの腰にぶら下がってるチワワのぬいぐるみに当たらないような角度だ。

相変わらずすごい器用具合。

「ん、ん、ん、いつらマジで下忍か!? てか、本当に遠慮が無いなー」

とかいいつつも余裕そうに弾くこの人もこの人だと思いが。

龍炎弾を同じく龍炎弾を使って弾き、その余波で僕の投げた手裏剣も弾かれる。

結構たみかけているつもりでもこれ位だと普通に対応される。

ならば。

写輪眼の幻術を使うまで。

いまだ不完全な写輪眼でうちらでも優秀なシスイをどれだけ止められるかは分からないが、なにはともあれ試して見る価値はある。

九尾の動きを止める、までは行かなくても緩慢にすることが出来た僕ならやってやれないことはない。

「っ!」

シスイの動きが止まり、そこにイタチが接近していく。

これで決まり、か?

「イタチならともかく、未だ未発達の写真眼に数秒とはいえ幻術をかけられるとはな。」

「がっ!」

止まった状態から回復したシスイがイタチを蹴り飛ばす。

そのままこちらに向かってくるシスイ。

これは中々、難航しそうだ。

「お返した。」

「っ!?!」

シスイの手にはいつの間にか無骨な槍が握られている。

それを飛ばしてくるシスイ。

当然、写輪眼を使える僕に避けられないはずが無い。

どこから槍を取り出したのかは後で考えるところとして、普通に避ける。

が、それは直角に曲がって僕に突き刺さる。

あまりにあり得ない軌道に不意を取られ、血しぶきと同時に激痛が腕に走る。

「づあああつ!?!くつ!?!」

痛みに絶えかね、膝を突きそうになるがクナイで切りかかってくるシスイがそれを許してくれない。

すぐさまクナイを抜いて、受け止めたとき、ようやく気づいた。

僕のクナイをすり抜けて僕を切り裂くシスイのクナイ。

幻術にかけられているのだ。

今のあり得ない槍の軌道も不意を打たれて気づけなかったが、気づいておかしくない

一撃だ。

「この・・・っ!!」

クナイできられた胸が熱をもち、じわじわと痛みが増していく。涙を出しそうになるも、それをぐつとこらえる。

これは幻術だ。

これは幻術。

痛みは錯覚。

飛び散る鮮血も幻に過ぎない。

気のせいだ。

幻術だ。

目を凝らす。

じつくりと目を凝らす。

現実を見切るように写輪眼をフル稼働させる。

が。

そう思い込みつつも、チャクラを乱しても幻術から出られる気配が無い。

これは本当に幻術なのか？

感じてゐる痛みは錯覚で、飛び散る血しぶきはただの幻。

本当にそうなのか？

もしかしたら自分の知らない忍術でただ穿たれただけなんじゃないか？

そんな不安がさらに僕のチャクラを乱し、より幻術への耐性を弱めていく。

どんどんと深みにはまっていくのを頭では理解していても、それを受け止めてくれずパニックを起こす感情。

そう思考してる間にも体は切り刻まれ、痛みが増えていく。

あまりの連続した痛みに脂汗をかきつつ、涙がにじみ出る。

「うちは一族を殺しきるなんてこの程度でよく言えたものだな。」

「・・・っ!？」

なんでそれを彼が・・・いや、違う。

これは幻術だ。

幻術というのは基本的に相手に働きかけるもの。

相手の想像（イメージ）を利用して使う忍術である。

よく考えれば分かるが、どういう幻術をかけるかをリアルタイムで考えていたら幻術を使う術者はそれ以外、何もできない。

ゆえに目の前のシスイは僕の想像が作り出した幻影。

うちはを、抹殺するのを目的としていることを知っていても不思議はない。

本体は当然イタチとタマモとやりあっているはずなのだから。

「殺しきるためにも下忍になるんだ。だからこんな幻術……すぐに出て……」  
「出てどうする？」

死に行くのか？」

「……あんたと話す暇は無い。」

結局のところ幻術など夢同然。

夢の中の会話なんてのは自分の世界で語っているに過ぎないのだから。誰かと接しているわけではない。ゆえに意味が無く不毛なものだ。

「第一、これは試験で死ぬわけじゃ……」

「結果的な話をしてるのさ。」

「ここでシスイ一人にてこずる用じゃ、勝てないといってるんだ。」

「……だまれ。」

「結局四代目火影も死んだ。」

グダグダだったよな。漫画や小説のように何もかもうまくいくと思っただら大間違いだ。

あれでお前はわかったはずだろ？

諦めが肝心だつて。」

「だまれ。」

「幻術というのは相手にある程度の指向性を持たせて夢の中に閉じ込める術のことを言う。」

今回の術は……この感じからして心を折りにきてるな。それも割と本気だ。

さっきの幻術でつい本気になってしまったのか……それとも性格が悪いのか、何かほかの意図があるのか。単純に厳しい人だっただけの話なのか。何はともあれ幻術というのは大まかな方向性のみを術者が決め、対象がそれに対して過敏に反応するってだけ。」

「……だ、だまれ。」

「今回のことを例にとるなら、『心を折るように』とかけた幻術ならばそれを無意識に受け取ったお前は自分が心を折られるならどういうことをされたら折れるだろう?と考え——いや、考えさせられる。」

そしてその結果が今の幻術だ。元日本人であり、いまだ実戦経験の乏しい自分のこと。」

強い痛みで心が折れるだろう。

そしてそこに漬けこむように言葉責めをしまえばいいだろう。

そう考えた。結果が俺のセリフだ。」





# うちはシスイとは

「・・・幻術を抜いたか・・・なるほどな。

さらには土壇場で写輪眼の完全覚醒。

まったく、眼の才能で言えば俺以上だ。」

「・・・・・・・・。」

涙を流しながらもシスイをにらむヒビキ。

「これで全員・・・合格だ。」

「え？」

これから先ほどの続きだろう、ということとで身構えたヒビキだったが、シスイが肩をすくめて合格の話をした。

シスイの隣には珍しく疲れた様子のイタチと、写輪眼を開眼したタマモがいる。

中心の瞳孔の周りには一つの瞳孔が開いていた。

「今回の試験の目的はお前たちの強さを見ることじゃない。いや、確かにそれもあつたんだが・・・」

一番はお前たちの『覚悟』を見せてもらうことだったんだよ。」

「かく……い？」

「ああ。……まあ覚悟とつて言い方はちと大げさかな。

やる気を見せてもらおう、と言った方が良いか。

実を言えば俺は一人も合格者を出すつもりは無かった。」

三人がそろつたのを見て今回の目的を話し出すシスイ。

「っ!？」

「この演習前にも言つたよな？」

今は里の外は危ない、つて。

命の危険と隣りあわせだ。特に下忍の頃はな。」

「……それは……」

「戦争が終わつた。これ自体はいいことだ。

でもな戦争つてのは終わった後の後始末が一番厄介なんだよ。

木の葉は戦争に勝つた。が、それでも死んでいった人間は戻らないし、壊れた物や木

の葉の管理する村々の復興作業だつてある。

勝つた里でさえそうなんだ。

敗戦国はもつとひどい。

早い話、資源が、お金が足りないんだよ。

復興のためのお金でさえ痛いのに、勝利した里に多額の賠償金も払ってるんだ。

おそらく敗戦した里の国は大量の飢餓者が続出してるだろうな。

中には戦争を終えて、必要なくなった血継限界を持つ一族を隔離なり、駆逐なりして里まである。戦争が終われば過剰な力は無用な混乱を招くだけだからな。

その点、木の葉は恵まれている。

当然、戦争直後よりは緩和してるが、未だに安全とは言い難い。」

「……。」

「そしてだ。金が無ければ当然、雇っていた傭兵や、里にいる忍を解雇せざるを得ない。

かといって彼らの新たな雇用先は滅多に見つからない。そうなると彼らは食いつ持を求めて道行く人を襲うようになる。今言った一族の生き残りや、事前に察知してというのものもあるだろう。

そして俺たちはうちだ。

忍の世界では死体でもお宝となる。特に写輪眼を持つうちはは積極的に狙われる立場なんだよ。」

そこで一息おいてからシスイは語る。

「常時の下忍の任務であれば猫探しや、屋根の雨漏りの修理なんていう簡単で雑用じみたものも多くあったんだけどな。」

今はとにかく人が少ない。

そうなれば里の外に出て・・・という任務も多く出てくる。もちろん基本的に断ることなんてできない。

お金を稼がないと復興資金が稼げないからな。」

「なるほど・・・つまり・・・」

「ああ、別に死ぬ覚悟をしろというわけじゃない。

ただあの程度の逆境が今でも十分にあるということへの覚悟を示して、そして打ち破ってもらいたかった・・・のが今回の目的で、合格条件だ。

さっきも言ったように合格させる気は無かったからそこそこキツめのを・・・ギリギリで不可能じゃないってくらいのをやったんだがな。これで尻尾巻いて逃げ帰れば命の危険が無かっただろうに。」

「イタチやタマモも・・・?」

「俺のこの幻術を乗り越えるには強い意志が必要だ。それがどんな思いにせよ・・・な。家に帰ったらもう一度よく考えることだ。

本当に忍になるべきなのかどうか。忍となって戦いつづけることができるのか。先は合格と言ったがもう一度良く考えろ。

明日正午。自分の意思でここに来た者を文句なしの合格者とする。

もしも考え直したというのなら別に止めないし、笑わない。  
とにかくきつちりと覚悟を済ませてくることだ。」

「……。」

「質問が無ければこれで解散だ。」

俺としては明日、ここに誰もいないことを願いたいね。」

そういうとシスイはどこかへ行つてしまった。

ちよつとくらい話しても良いと思うのだが、忙しいのだろう。たぶん。

☆☆☆☆

「……ん。」

次の日。

「ヒビキ、ご飯よ〜。」

「うん。」

「……今日から下忍ね。」

……ヒビキなら大丈夫だと思ふけど、気をつけてね。」

「分かつてる。」

ぼんやりとミコトから出されたご飯を喰んでいく。

ヒビキはシスイの言葉を受けて、四代目の言葉を思い出していた。

『君は言うほど覚悟ができていない』

あの言葉は今もどこか胸に引っかかっていた。

「覚悟・・・できてるに決まってる。

やるしかないんだから。」

「ん？」

「なんでもないよ。

ごちそうさま。行ってくる。」

「・・・うん、本当に気をつけるのよ？」

「大丈夫、心配しないで。」

「・・・ええ、いつてらっしゃい。」

演習場に向かうと当然ながらイタチはいた。

タマモもいた。

「・・・フツ。やはりきたか。」

イタチがポツリとつぶやく。

そのわかったような感じ好きじゃないな。

一応理由は聞いておこう。

なぜそう思ったのか。

「やはり？」

「お前の目だけはほかの誰とも違っていたからな。

優れている、劣っているということを覗いたとしても俺はお前を注視していただろう。」

「・・・また目か。」

これでガイに四代目に続いて三人目である。

目で感情が読まれるとか、無表情の意味が全くないじゃないか。

なんのために小さい時から感情が出ないようになってきたと思っている。

今度からサングラスでもかけようかと本気で検討をしていたところ、うちはシスイが演習場にやってきた。

「おうおう、三人とも良い目をしてるなあ・・・まあ俺の幻術を破つたんだから来るだろうとは思ってたけど・・・まったく。」

もちつと子供らしく行こうとは思わないのかねえ・・・俺がガキの頃は・・・そんなもんだったかもしれんな。

「まあいい。」

シスイもまた目がどうのと言い始めた際に、げんなりとするヒビキ。

「うちはイタチ、うちはヒビキ、うちはタマモ。三人とも文句なしの合格だ。ちつとは誇つてもいいぜ。」

と言つてウインクをするシスイ。

イタチはノーリアクション。

僕もノーリアクション。

タマモはなんで今ウインクしたんだろう？という不思議そうな顔をしていた。

「……少しはリアクションしろよ。」

一応婦女の方々からはキヤーとか言われたかった。」

「……すいません。」

イタチがとりあえず謝った。

あまり悪いとは思つてなさそうな平坦な謝罪である。

僕も謝つておこう。

「ごめんなさい。」

「無表情のまんま言われても……むしろ逆にこつちが悪く思えてくるんだが。」

謝らない方がマシだったのかもしれない。

「どうしてウインクしたんですか？」



「ど、どうして……ってそりや、掴みをだな……えつとほら、ウインクの仕草ってカッ  
コイだろう？」

女の子がやってれば可愛く見えて……あれだよ。

……うん、なんかすまん。これ以上突っ込まないでくれ。」

「女の子が……」

とつぶやいたタママモは僕を見て、確かにと頷いた。

僕がウインクした姿でも想像したのだろうか？

なんでそこで僕を対象にしたんだ。

「……あれえ？おっかしいな。」

うちはシスイはこういう人だった。

## Cランク任務

「うしっ！」

三人とも、揃ってるな。

早速だが、任務と行こう。」

と、シスイはにこやかな顔で三人に言った。

時刻は昼。

場所は訓練場である。

それを聞いて緊張の面持ちで畏まるタマモ。

ヒビキはいつものように無表情だが、内心、ビクついている。

それは当然だ。

元日本人である彼には実践という響きだけでビビるには十分。

が、彼はなんだかんだで修行によってある程度の自信をつけていること。

九尾と相對した経験から、無表情を繕える程度には余裕があった。

イタチは言うまでもなく、内心、外見どちらともに動揺は見られない。

さすである。

「ん？」

緊張してんのか？

ふふん。安心して、用心しろ。

俺がいるんだからまず死ぬことはないぞ。」

「任務の内容はなんなのですか？」

シスイの決め顔をして言った決め台詞をスルーしてイタチが先を促した。

シスイは少し気落ちとしつつも、胸ポケットの一つから巻物を取り出す。

巻物というよりは巻いた紙、というべきものだがそれを広げるとそこには捕獲依頼と書かれており、その下に詳しい内容が書かれていた。

「ブラッティタイガーの捕獲だ。」

「ブラッティタイガー？」

「無乱茶大河と書いて、ブラッティタイガーか。」

大仰な名前というか、当て字が適当というか。漢字の意味からはどんな生物なのか良くわからない。」

ヒビキが首をかしげる。

「あ。……Cランクって書いてあるね？」

タマモが依頼書の左下を見て、言う。

Cランク任務は一般人の護衛依頼などがある。

それ手間暇ないしは驚異があるということだ。

「手慣らしとしてはちょうどいいな。」

「…。」

無然として言うイタチにジト目を向けるヒビキ。

ヒビキとしてはもう少し簡単でもよかった。

「ま、初の依頼だしな。」

それぞれ色々と思うところもあるだろうが、今さつきも言ったように俺もいる。

あまり気負わず、お前らの力をちゃんと出すことができれば難しくもない依頼だ。

「気楽にいけ。」

「はい。」

「了解です。」

「うん！」

それぞれがシスイの掛け声に応える。

「ところで……この無乱茶大河ってのは何ですか？」

ヒビキがもつともな疑問を問うた。

「猫だ。」

「は？」

「ただの三毛猫らしい。」

「…へえ…あの、…えと…それが？」

「それがなぜこんな難易度が高いかってことだろうか？」

「はい。」

「この猫の行方不明になった場所が問題らしくてな。」

「この猫の飼い主は戦場の付近の集落で住んでいたらしくて、避難する際に飼い猫とはぐれてしまったとき。」

「それでその猫を探してきてくれないかってことだ。」

「つまりそれって…」

「当然ながら戦場跡を歩き回る必要が出てくるんだが、そういった場所は往々にして回収し損ねた忍の死体、ないしは死体の一部を探しにそれ専門の賊や忍がいる可能性がある。」

「死体を…売り物にするってことですか？」

「…ま、そうなる。」

「とは言えども当然ながらどここの里も出来る限り忍の死体は回収してるから…って言い方はちとあれだな。ちゃんと遺族のもとに返してるから、あまりこういった賊がいる

わけじゃない。が、危険が無いと言い切れるほど少ないわけでもない。

それとそういった場所でただの飼い猫が生きていられるとも思わないし、生きていたとしても探すのは苦労するだろう。そういった手間暇もあって、BランクよりのCランクってところになるな。」

「なるほど。」

こうしてシスイ班は木の葉の里を出ることとなる。

初の任務、初の外出、初の実戦。

それがヒビキたちを迎えた。

☆ ☆ ☆

木の葉の里を出て、三日が経ち、いよいよ目的地についた。

ナルトたちのように上忍に出くわすなんてこともなく。

つつがなく到着したのだが。

「ふう、ようやく到着したな。ここが戦場跡の一つ。

戦場ヶ原だ。」

「・・・ぐちゃぐちゃする。」

「足を取られるなよ。」

「ここは昔からある湿地の一つで、シカやらウサギやらがいる…いや、いたんだが今

じゃあまり見かけないな。」

と、シスイは広がる湿原を見て、憂いのおびた眼差しを向ける。のも一瞬。すぐに首を巡らせて視線を固定する。

「さて、早速だが、この先に依頼者のいた住居跡がある。

そこで一休みしたあと、そこを拠点にしつつ三日ほど周辺を探索。

いてもいなくてもそれが期限だ。」

「猫さん、見つかるといいな。」

ぼつりとつぶやくタマモ。

「…そうだね。」

生きてる可能性はかなり低いと思いつつも、ヒビキはタマモに便乗する。

本当に、生きていたらしい。

戦争が奪ったものは多い。

ヒビキはふと父親を思い出す。

「ヒビキちゃん?」

「なんでもない。」

「シスイ隊長。」

「ん、なんだ、イタチ。つか、俺のことはシスイ兄貴と親しみを込めて呼べと言っただろ

うに。」

「殺しても大丈夫ですか？」

「……たく、いろいろな意味で可愛げのない。」

ああ、構わない。

里に搬送したところで死ぬしかない。

それに情報源としての捕縛は俺がやるから。

ただ、無理をするな。少しでも危ないと思ったら俺に連絡するか、逃げろ。いいな。」

「はい、わかっています。」

二人の会話を聞いて首をかしげるタマモ。

その姿を見て、ちよつと荒れていた内心が少しだけ癒されつつもヒビキはシスイに言う。

「分散して探すのですか？」

「……心配するのは分かるが、過保護すぎても成長はないぞ？」

「……なんのことかわかりません。」

「タマモだつて十分にデキるだろうに。気づいてないみたいだが。」

「……何の話をしてるの？」

「ん、いや……ううむ、俺が見ていられる内に厳しくやっておきたかったが……まあ初



「回だしいいか。」

「つけてきてる人間がいるんだよ。視線を感じないか？」

「……………え？」

「えと、動物さんじゃないの？」

「タマモはほかの三人が何を問題にしてるかがわからないようだ。」

「ちなみに三人の会話は彼らの後を尾行してる何者かの対処について話しているのだ。」

「当然動物ではない。」

「しばらく前からずっと追ってきているのだから。」

「しかしタマモはこちらを警戒する動物のものだと判断したようである。」

「……………気づいてたんだな。」

「シスイがなんだか納得いかない顔でタマモを見る。」

「天然さんかもしれないと判断しつつ、指示する。」

「分散することもないだろう。」

「何か仕掛けてくるようなら三人で一気に潰せ。」

「…イタチにはああ言ったが、無理に殺す必要はないからな？」

「相手から襲ってきたりしてもですか？」

「ヒビキが言う。」

「違う。」

お前たちの歳でまだ人の死に触れるのは早すぎる。そういう意味だ。仮に殺すにしても俺がやるさ。」

「……本当にね……」

「どうしたヒビキ？」

「いえ、別に。」

……分かりました。極力生きたままを心がけます。」

「分かってもらえてなによりだ。」

こうして猫探しが始まった。

まず一日目。

特に問題は起きず、猫は見つからないまま終わった。

二日目。

謎の視線は消えていた。

そしてこの日も特に問題はなく、いや、問題があるとすれば猫が見つからないことだけだった。

三日目。

動きがある。

どうもこの二日かけてヒビキたちの戦力を見て取り、援軍を呼んだ賊たちが目の前に立ちふさがる。

「へへへへ。いやいや、こんなところで木の葉のエリートであるうちはが四人たア儲けものだな。」

とあからさまな盗賊っぽいセリフを吐くハイエナ達。

場所はヒビキ達が野宿する戦争跡東。

シスイの使う土遁で簡易キャンプを作っており、その目の前にぞろぞろと集まった死体漁り専門の忍たちである。

時間は深夜。

月の光も心もとないくらいの時間帯である。

彼らは死体漁りをしていた最中、シスイ達を発見。

うちのは家紋から、うちのは死体が高値で売れるという見積もりを立てて襲撃するこ  
とにしたのである。

コピー忍者のカカシをはじめ、ほかの忍の体の一部を移植して使えるため移植できる  
タイプ  
の血継限界を持つ死体は非常に高値で売れる。

それこそ一つの死体で数十年は遊び暮らせるレベルである。

このご時世において見逃す手立てはない。

戦力が十分であったことも手伝い、彼らが襲うと決めたのも無理はないというものでしょう。

しかも彼らは誰もが戦争経験者。

あの戦争をまがりなりにも生き残ったベテランである。

注意すべきは引率であろう大人のうちが一人。

ほかはいまだ未熟な下忍と思わしき忍が3人。

一人二人は死ぬかもしれないが、それ以上のリターンが得られる。

それを期待して彼らはシスイ班を襲った。

しかしその期待は悪い意味で裏切られることとなる。

## それぞれの戦い ヒビキ

「・・・警戒しておけ。」

男たちはヒビキ達が眠る、石で出来たキャンプに接近していく。

キャンプはカマクラのように半円形で、出口には虫除け用のゴザが立てかけられている。

その周りには二十数人の忍たち。

二十数人という大所帯はこの付近で潜伏していた盗賊じみた忍のほぼすべてであった。

それらの18数人がキャンプを等間隔で囲い込み、残り2、3人で直接侵入する。その手筈で、男たちは配置についていく。

「・・・。」

「大丈夫だ。」

手によるサインで周りへの確認を取り、リーダーらしき男がこくりとうなずく。

それと同時に2、3人が同時に入り込む。

「まずいつ!? これはっ・・・。」

キャンプが爆発した。

中にいた二人が爆発四散。

死亡した。

と同時に、キャンプの石に仕込まれていた手裏剣が爆発の勢いで石礫いしつぶてと共に周りに飛び散っていく。

「なっ!？」

くそっ!!

起爆札かつ!!ぐっ・・・手裏剣がうつとうしい!!」

「ばかなっ!？」

気付かれていただとっ!？」

「ぐあっ!?!石が・・・いてえっ!」

「ばか、気を抜いていやがったからだっ!」

「やつらはどこに・・・あっちだっ!？」

男たちは半ば動揺しながらもすぐに周辺を見渡し、感知タイプによる忍が指を指した方向には二つの赤い光がほんのりと見える。

それは月明かりに照らされて、ほんのり暗闇に浮き上がる写輪眼であった。

「写輪眼を直接見るなっ!」

幻術にかけられあれ．．．？」

「ぐっ．．．幻術に．．．」

「見るなど言つたらうがつ!!」

「見てねえよつ!!見てねえけど．．．あぐ。」

その後、数人がバタバタと倒れ伏していく。

「これはただの幻術だぞつ!」

「ちっ!写輪眼に注意を持っていかれ過ぎだつ!!」

おまえらあつ!!いったん落ち着．．．ぐああああああつ!!」

土遁、心中斬首の術によって土の中に首だけを残してすべて埋まるリーダー。

「なっ!？」

リーダーつ!!」

「助けねえとつ!!」

「それは後だつ!!」

まずは散開しろつ!!」

まとめてやられるぞつ!!」

その言葉によつて散開する男たち、だが、それこそが狙いである。

「こ、こ、こまでくれば．．．あんなにやれるなんて．．．聞いてねえぞ。」

「……ん？」

「貴方には俺の糧になつてもらう。」

そこには完全な写輪眼を手に入れたヒビキがいた。

緊張と、人を殺すという覚悟をしたことによる高揚のせいだろう。

顔はひきつっており、口調、特に一人称が前世のものに戻っていた。

それだけで彼の、いや、彼女の心中の振れ幅がすごいのであることはわかる。

「……あん？」

どけ、クソガキ。

今回は見逃してやる。」

男は冷静であった。

一見舐めた言葉であったが、その程度の安い挑発に乗るほど馬鹿でもないし経験が浅いわけでもない。

何か命がけの任務を受けているわけでもない彼としては、すぐさまここから逃げ出して、また別の場所で金のネタを探すほうがいいのだ。

戦争は激しくも長かった。死体回収の場は別にここだけではない。

うちはあるものの、子供の、おそらく下忍でしかない目の前の少女とやりあつても勝てると思ふ。



しかし、今さっきの手腕を見るに何がしかの手立てがあるのかもしれない以上、極力リスクは避けておきたいところである。

それにほかの奴がくるかもしれない。

ここで勝てば確かに一人のうちにはの遺体を手に入れることはできるが、命あつての金だ。

男は慎重に逃げることを考えた。

「……見逃してもよかつたんだけど……あなたの持つているそれに用がある。

それはなんだ？」

「ん？」

「これか？」

男は手に荷物を持っていた。

それは誰かの体の一部であり、土が付着していることから埋められていたことが分かった。

「それを置いていくなら見逃す。」

「……ちつ。うぜえな。」

「ここは戦争跡である。

原型をとどめない遺体や、誰のものか特定できない遺体、巻き込まれた人たちを埋め

た慰霊碑がここにはある。

男はそこから遺体をひっくり返して回収したのだ。

はずれが多いものの、時にはあたりを引くこともある。

ダメもとで状態の良い死体を回収しておくのだ。

大部分は土に還ってしまっているため、骨のみだがそれでもそれなりの価値にはなる。

逃げる際に落としたものを拾ったために、そのまま手に持っていたのがヒビキの目に留まったというわけである。

「てめえになんか関係あるのか？」

「ない。」

ないけれど・・・見過ごせるほど平和な時代には生きていない。」

父であるギタンの墓が荒らされていたら？と思うとヒビキにとっては許せないことだった。

それは人の気持ちを踏みにじる行為だ。

実際に戦争の一端を垣間見つつも、身内を殺され、墓を参ったことのあるヒビキとしては強い不快感を抱いていた。

「・・・くくく、なんだ？」

身内の誰かが死んだのか？

まあ、あの戦争は確かにひどかったからなあ。

忍としてここにいるってことは、父親も忍で、先の戦争で死んだってことかね？

なら、気持ちはわからないでもない。が・・・」

「・・・っ!?!」

「甘めえよ。」

背後に瞬身の術で回り込む男。

ヒビキは瞬時にクナイを背後に打ち付けるが、男の手刀の方が早い。

「ぐっ!?!」

「甘すぎる。」

ほんとに戦争経験者ですかあ？

んな感傷持つてる暇があつたら、忍術使え忍術っ!」

手刀でよろめかせた後、男はクナイを取り出して首から上を刈り取ろうとする。

体ごと運ぶよりも写輪眼がある頭ごと回収したほうが手荷物が少ない。

冷静であるがゆえに、これはいけると判断した男のそれは悪手だった。

「せよならだ。」

そもそもこうして話し合うこと自体が甘い。

忍たるもの、問答無用で殺せばいいものを。

バカなガキだ。とほくそえんでいた時である。

「なっ!」

クナイはヒビキの体を切り裂いた。

切り裂いたのだが、それは煙を立てて消えてしまった。

「それなら忍術を使おう。」

「ばかなっ!」

こんなガキが影分身を・・・がはっ!」

背後から現れたヒビキによる螺旋丸を直接受けて吹き飛び、木々にぶち当たり、吹き

飛ばしながら男は沈黙した。

内臓はズタズタ。骨も至る所がへし折れており、打ち身がほぼ全身に。

即死と言っていい体だ。

なんとか息をしているものの、死ぬのは時間の問題である。

「・・・次。」

男が持っていた骨を回収して、ヒビキはその場を消えた。

☆☆☆

「ちっ、ただのガキかよ。」

よくもやってくれたな・・・このクソガキが。」

そしてある男が逃げた先にはタマモが立ちはだかる。

「あなた方を見逃すわけにはいけません。」

「ほう？」

そいつはどうして？」

俺たちは別に誰かに迷惑をかけたわけじゃないぜ？」

と、男は飄々と語りながらも自身にとつてのベストな距離を取ろうとする。

男は感知が可能である。

専門の感知タイプには劣っていても、周辺数百メートルは分かる程度には心得ていた。

ゆえに一人待ち受けるタマモの前に姿を現したのである。

おそらくこいつらは散り散りに逃げていく自分たちを各個撃破していくのだろうと見抜きつつも、やはり手ぶらで帰るのはいかんせん、認められなかった。

ゆえにヒビキ達の中でも一番チャクラの小さかったタマモを狙って、逃げようとしたところをたまたま出くわした、という状況を演技しつつ、男は虎視眈々と狙っていた。

致命的な隙を。

「……死体を遊ぶのはだめです。」

それに私たちに襲い掛かってきました。」

「ではなにか？」

飢え死にしろと？

俺たち抜け忍にまともな金稼ぎができないことくらいわかるだろう？

同じ忍なんだ。」

「……う、でも……」

ここらで男は確信した。

男たちの共通の認識として、身のこなしから大人のうちはあるシスイ以外はただの下忍かと思っていた。

しかし、その下忍らしきやつらの中に二人、ヒビキとイタチの身のこなしが上忍相当だったのもあり、もしかしたら油断させるために変化の術を使っているのではないかという疑いがあつたのだ。

タマモとてその二人には劣るものの、一人前レベルではあつた。

そしてこのご時世である。

戦力として徴兵されていたという可能性も考え、警戒した故の先の襲撃だ。

さらにはそれを見事、察知されいまやどれだけの人数がこの近辺にいるのかも詳しく

はわからない。

そのような状況を作り出したのだからきつとできる忍だと考え、逃げるための罠も作りつつタマモの前に姿を現したのだが、ちよつと殺気を向けるだけ、いやそれどころかただ敵意を示して相對するだけで萎縮する始末。

だからこそそのガキ発言である。

変化ではなく、特に一端の経験があるわけでもなく。

本当にただのガキ。

実戦のじの字も知らないような青臭いガキである。

こんなガキにやられたとなると、はらわたが煮える思いだが、それでもこのガキに当たった自分はラッキーだとも考えた。

多少できようとも、こちらとて戦争経験者。

写輪眼の分のハンデは十分にカバーできる。

生け捕りだって可能だろう。

殺すつもりで行けば仲間が駆けつけてくる前に目の前の彼女から写輪眼を抜き取る  
ことだって可能はず。

リスクとリターン。

それを計算して、比較的低いリスクに十分なりターン。

男は本腰を入れてタマモを殺すことにする。

さらには精神性も未熟。

こちらの生活に同情しているようだが

実にバカな話である。

確かに同情に値するのだろうが、それはそれこれはこれだ。

彼らを殺す気で向かった以上殺されても文句は言えない。

確かに元をただせば、戦争が悪い。

しかしそれによつて貧乏になった彼らが選んだのはてつとり早く儲けるためのこう  
した仕事である。

彼ら自身で選んだのだ。

そこに同情されるいわれはない。

そもそも仮に同情する事情があれども、助ける情も義理もない。

この場における“それ”はただの甘さだ。

それも非常に愚かしい、唾棄すべきくだらない甘さ。

忍失格である。

恨むなら、自分の里の教育方針を恨めと思いつつ、男は罫を作動させる。

手からは細い細いピアノ線。



光を透過するため、たとえ写輪眼でも目であるがゆえの物理的な理由で見えない。

これにチャクラや、わずかな附着物でもあれば気付いていたのかもしれないが・・・

隙のできたタマモに対してクナイが飛んでいく。

## それぞれの戦い タマモ

クナイはタマモに対して思いつきり飛んで行った。

男とタマモは直線状に並んでいたため、男は自分の体を影にしつつタイミングを見て避けた。

ぎりぎりまでひきつけたために、男の背後からいきなりクナイが飛んできたように見えるタマモ。

驚きつつもクナイを取り出して、弾きつつ、避けた。

「やはりな。」

「ど、ど、どっ!?」

男はすぐに森の茂みに隠れる。

写輪眼とは言ってもしよせん、せいぜいが瞳術だ。

結局のところ、視界に入らなければいいのである。

戦争中にやりあった、うちは達はそれを理解してなかなか逃がしてくれないのがほとんどであったが、この体たらくと言い、せいぜいが中忍レベル。

写輪眼や単純な身体能力的なものも含めての話なので、精神面だけに限って言えば下忍

と言つてしまつてもいいかもしれない。

さらに言えばクナイを弾いたのも悪手。

弾くよりも避ける方が、もちろん隙は少ない。

やむを得ない時、ないしは何かの理由が無い時以外は避けるのが基本。

今の状況で弾く必要性はなかつたはずだし、何かの理由があつたとも思えない。

この体たらくで俺を仕留めようとするとは、舐められたものである。

戦闘者としても素人、忍としても素人。

こんなカモがいてくれたとは思ひもよらなかつた。

好きに料理できることが分かり、つい舌なめずりをする男。

タマモを殺して手に入る金を思い浮かべてつい笑みを浮かべてしまう。

「まったくもつて間抜けな獲物だ。

慎重に、間違いなく仕留めたいところだが・・・そう時間もないしな。」

感知をすると他三人はいまだ健在。

こちらにくるのも時間の問題だ。

目を抉るか頭を持っていくかにせよ、それらの時間をあわせてると余裕はあまりな

い。

すぐに殺す必要がある。

「……よし。」

詰めていくか。」

男は早速行動を起こす。

まずは煙玉を投げつけて、視界をつぶす。

念のためである。

「……っ!?!」

身構えるタマモだが、それに一瞥もくれず男は感知しながらクナイを投げつける。

風切り音だけでも弾いたり避けることから、経験はなくとも身体能力だけはいいと考  
え、手早く、しかし慎重に弱らせていく。

タマモは不利と感じ、すぐさま煙から出る。

が、感知で場所のわかる男は出たところでもちようど当たるように起爆札付きクナイを  
投げた。

起爆札で回収するべき頭が吹き飛んでは惨事なので、直撃を避けるような角度でだ。

ないしは避けてくれることを祈って。

「きばくぶだっ!?!」

「……くっ!」

背後に飛び退くタマモ。

これこそが男の狙いである。

起爆札の場合は爆発するために、横に飛び退けても、前に飛び込んでも爆風に撫でられることになる。

結果、背後に飛び退くしかないわけだ。

もとい飛び込む先が分かっているのであれば男の行動はおおむね決まる。

「えっ!？」

背後に当たる硬い感触に驚くタマモ。

まさか木にぶつかったのかと思えば、そこには男がいた。

「はい、つかまええええた。

ごくろうさん。」

「っ！」

いや、はなしてっ!!

うぐっ!!」

じたばたするが羽交い絞めとなったタマモには印も結べない。

クナイを振り回すことしかできない。が、当然あたるわけもない。

「はっはっはっ、むだむだあ。

もがいてもどうにもならんだろ。

捕まえている以上、変わり身は使えない。

そして印も結べない今はただの子供だ。

出来ればもつとじつくりイタブってやりたかったが・・・」

と言って男はタマモに背後から膝蹴りを繰り出す。

「あぐっ!!」

「印を結べないくらいに蹴り飛ばしてから、首を刈ることにしよう。」

羽交い絞めにしてるために刃物は使えない。

離れた瞬間に何をされるか分からないため、このまま弱らせてから離し、クナイで切り殺すつもりである。

「がっ!」

「あうっ!」

「ほらほらっ!」

いつまで持つかなっ!?

って、これじゃ結局いたぶってることになるな。

「ごめんねえ、・・・やめないけどさあつ!!」

「ぐっ!!」

「なんなら泣き叫んでもいいんだよ!」

「……そんなことしない。」  
「……へえ。」

タマモは思い出していた。

ガイから言われたことを。

自身の忍道を守るときのみ使っていいと言われた力を。

「私の……忍道は友達ヒレキを助ける。ずっと一緒にいる人を……」

そのために……私はこんなところで負けてられない……」

「……っがっ!?!」

ばちんと腕が弾かれる男。

男は驚愕する。

どこにそんな力が、と思うと同時にタマモは離れていた。

舌打ちをしながらもかなりのダメージが入ってるはずと冷静に考え、再度殺す手立てを考える。

大丈夫、経験はある、能力も差が大きいというほどでもない。

タマモは足をいじり、ルーズソックスのようなものを脱ぎ捨てた。

そこには根性と書かれた得体の知れないベルトがある。

それを外すタマモ。

タマモには確かにうちはとしての才能はない。

忍術は並、どころか悪い方だし、写輪眼の扱いだつてヒビキやイタチには劣る。

おそらくは普通のうちにも劣るだろう。

これは純血でない彼女ならではのマイナスだ。

そして幻術だつて得意ではないし、写輪眼を使つてもせいぜいが初級レベル。

しかし体術。

いや。

体術もそれほどセンスの才能はなかった。

せいぜいが並。

だが、唯一と言つていい才能はあつた。

八門遁甲の開きやすさと相性である。

うちとは通常の人の血が混ざつたことによる何かの突然変異なのか、普通の人よりもはるかに八門遁甲への干渉がやりやすかつた。

なおかつ彼女の筋肉はしなやかで強韌性が高く、筋肉量が少ない割に八門遁甲の発動



後の負担が少なかった。

さてはて、そんな彼女の開けられる門の数はいくつか？

正解は……

「八門遁甲……第六景門……開っ!!」

「んなっ!?!」

体から青くにじみ出るオーラ。

そして立ち昇るチャクラによって彼女の足元周辺の地面がえぐり吹き飛ぶ。

青くにじみ出るのは一時的に活性化されて全身のチャクラ穴から噴き出るチャクラだ。

それを見て男は瞬時に逃げ出すことを考える。

とうかすぐに逃げだした。

勝てるとは思わなかったのである。

だが、もちろん逃げ切れるわけではない。

「ひいっ!?!」

「裏蓮華。」

まずは一。

三、四と次々に打ち込まれる蹴り。

タマモは才能が無い。

それは体術においてもそうである。

ゆえにこそ彼女は考えた。

才能が無いのだから何かほかに向けてもしょうがない。

忍として完成されたイタチでも、オールマイティーになんでもこなそうとするヒビキでもない彼女は一つだけを鍛え上げることにした。

体術の、それも蹴り技のみを。

空中でなすすべもなく蹴りまくられる男。

写輪眼による洞察力によって、超高速移動中にもかかわらず弱点を蹴りぬいていく。

「はああああああっ！」

最後に地面にたたきつけるかのような強烈な蹴りによって男は地面にめり込んで沈黙した。

死なないように加減はしたのだろう。

辛うじて生きていたが虫の息である。

「……つつ……はああ……はあ……はあ……はあ。」

戦いが終わり、座り込むタマモ。

そのしなやかな筋肉により、負担は軽減されているために立っていられるが、通常の間人が使えば一月は寝込んでいただくろう。

ちなみにガイの場合は一週間で済む。

日々のたゆまぬ鍛練と、根性ゆえに。

ついと座り込むタマモに、しかし襲い掛かる人影があった。

そう、まだ敵はいるのだ。

ちようど弱っているのをこれ幸いと見かけたために今なら殺せるとクナイを振りかぶったが、そのクナイが振りかぶられることはなかった。

ヒビキが螺旋丸で仕留めたのである。

「ヒビキちゃん?」

「使ったんだね・・・八門を。」

「そこまで無理するくらいなら一緒にやるべき・・・」

「そっちは大丈夫だった!」

「うわっ。」

もう寝込んでしまいたいはずの疲労の中でヒビキの顔を見た瞬間に駆け寄り、体をぺたぺたと触って怪我をしてないかを確認するタマモ。

それに対して心配されることに対するテレによって少し顔を赤らめつつ、タマモに医

療忍術をかける。

「あ、ありがと。」

「べつに。」

笑顔でお礼を言うタマモである。

「イタチ君は大丈夫かな？」

「それをこれから見に行くんだ。」

「もう倒したの？」

「ここに来るまでも1人仕留めたから今のもあわせて全部で3人。」

タマモが一人で、リーダーはシスイさんが倒した。

周辺に残ってた三人もまとめて片づけられてるはず、となると、起爆札で死んだ二人に・・・残りは10人くらい。

たぶん4、5人はそのまま逃げていくだろうから・・・残り5人前後はイタチが仕留めてるはず。」

「多くないかな？」

「大丈夫でしょう。イタチだから。」

「・・・むう。」

少し不満げな顔を見せるタマモ。

イタチを認めているような発言に嫉妬しているのだ。

もちろん恋愛的な意味は含まれてはいない。

ヒビキの立ち振る舞いなどに男らしさを感じることがあっても性別の壁を越えての恋心はない。

どこか男として見てることがあるので、これから先はわからないが。

「どうしたの？」

「なんでもない。」

ヒビキは首をかしげるだけであつた。

## それぞれの戦い イタチ

「くそっ……」

「どうする?」

「どこにいるか全く分からねエ。でも……いる!」

4人が円陣を組み、周りの木々の合間に目を巡らせる。

が、彼らは自分たちを襲う敵の姿を視認することはおろか、気配すらつかめなかった。ここは湿地だ。

腰の高い草と、ぬかるんだ地面、そして森というほどではない密度の木々。

隠れる場所は少なく、ここでしばらく死体漁りをしていた自分たちは地の利があるにもかかわらず。

相手の潜伏先が分からなかったのだ。

だが、いる。

確実にいる。

相手は潜伏しているだけではない。

気配を殺し、こちらを狩るべく虎視眈々と“その時”を待っている。

事実、先ほどまでは5人だったはずなのに一人が思い切りで逃げ出そうとした瞬間にクナイや手裏剣でハチの巣にされてしまった。

死んではないだろうが、沈黙し、倒れ伏している。

おそらくは神経毒が塗られていたのだろう。

そこまではわかるが、手裏剣を打ち込まれてなお相手の居場所も姿も気配もわからなかった。

これすなわち自分たちよりもはるかな高みにいる忍を相手にしているということだ。

男たちはそれを理解しつつもただただ動けずにいる。

男たちとて、無能ではないのにもかかわらずである。

先も言ったように彼らは戦争経験者で今の今まで生きてきた経験がある。

その彼らをもつてしてもこの体たらく。

男たちにとってはあまり信じたくない事態だった。

「このままここにいても罅が明かない。」

一斉に別方向に逃げるってのはどうだ？」

「……いや、それはダメだ。」

さきほどの手腕を見るに各個撃破される可能性が低くはない。手裏剣術だけであれだ。忍術や体術も含めると……想像はしたくないね。

博打要素が大きいだろう。」

「だとしたら固まって逃げるか？」

「それも一網打尽にされる可能性があるが……」

「だが生き残れる可能性は高い……とりたいところだ。」

「感知タイプをやつが真つ先に逃げたのが痛い。」

あの野郎……すぐさま逃げやがって。」

「今更それを言ってもどうにもならん……それよりどっちにする？」

男たちは作戦会議を始める。

当然、声は潜めたままである。

「……俺は固まって逃げるのを提案する。」

不測の事態でも対応手段に幅を持たせられる。」

「しかし……拡散して逃げれば一人二人は助かる可能性がそれなりにはあるんじゃないか？」

「二分の一以上の確率で死ぬということだな。」

最悪全滅だが。相手の数すらわからないこの状況では……悪手だな。」

「……ふう、それもそうか。俺は反対しない。」

「俺も賛成だ。」



こうして四人は一致団結して逃げることにする。  
だが、ここで狩人は動いた。

「っ!?!」

「火遁、豪火球の術っ!!」

大きな炎の塊が四人を襲う。

攻撃の瞬間まで全く気配を感じなかったものの、さすがに炎の塊ともなれば気付く。

四人は瞬時に散開回避。

だが、同時に四人へクナイが複数、飛ぶ。

「くっ!」

別方向に逃げた俺達一人一人をとらえて投げるとはっ!」

しかもクナイには起爆札が見て取れた。

避けるだけでは爆発に巻き込まれると、遠くへ弾く。

だが起爆札は爆発しない。

むやみに爆発させても、写輪眼を持つ人間にとつては視界がふさがれて逆にマイナスとなるためである。

ただのプラフだ。

「がっ!?!」

・・・しゃ、りん・・・がんか・・・」

「目を合わせないというならば、こちらから合わせに行けばいいだけだ。」

だが、その弾くというわずかな隙に瞬身の術によって一人の男の目の前に躍り出る影はその赤い眼球を相手と合わせ、幻術にかけた。

男は痙攣しながらうずくまり、やがて動かなくなる。

これで残りは三人。

残りの三人はアイコンタクトで瞬時に拡散して逃げるといふ作戦に変更。

それぞれの方向へ逃げる。

「くそっ！」

ふざけやがってっ!!」

一人の男は逃げながらも悪態をつく。

それもそのはずだ。

自分たちが全く手も足も出なかった相手がまさか子供だったなんて。

10かそこらの子供。

今こうしていることが信じがたい事実であった。

重ねていうが男たちは決して弱くはない。

戦争経験があり、いまだ生き残っているということはそれだけの死線を潜り抜けたと

いうこと。

それだけの実力があつたということ。

一言でいえば歴戦の兵士と言つてもいいレベルなのである。

たしかに才能は劣るだろう。

相手は忍の世界でも有名なあのエリート一族、うちはだ。

しかしそれを補い、有り余るほどの経験と熟練があつたはずなのに、それらがたかだか毛も生えそろつていないであろう幼いガキ一人に手も足も出ない。

これで悪態をつくなどという方がどうかしている。

変化の術を使つていると思いたいが、その理由はないはずだ。

殺し合いの最中に、わざわざ必要ないことへ意識を割く必要が無い。

おそらくあれが素の姿。

すでに幻術にかかつているのではないかと思わせるほどの異常事態だつた。

悪夢を見ていると言われた方がまだ納得出来る。

そんな異常事態にあつても、今までの手腕から自分たちよりもすぐれていたと判断し、なんの硬直も無く、すぐにそれぞれで逃げ出すという柔軟な対応をした。

こうした一連の行動からも男たちの力量が窺える。

だが。

「なるほど、盗賊にはもったいない習熟レベルだ。

俺の力量を測るにはもってこいだな。」

「ちっ!!」

空中で火花が咲く。

イタチのクナイと男のクナイが交差した故に。

「他二人は？」

「影分身が拘束しているころだろう。」

「なるほど。どおりで目の前からてめえが出てきたわけだ。」

男が逃げている進行方向からの不意打ち。

おそらくは火遁を使ったあれ自体も分身だろう。

「一応言っておく。」

武装を解除して降伏する気はないか。」

「聞くと思ってるのか？」

「いや・・・そうだな。」

男たちはわかっている。

自分たちが追われている理由。

自分たち死体漁りが持つ情報は時にも毒にも薬にもなる。

大半の死体は回収され、それぞれの里で埋葬される。

しかしそれも確実ではない。

戦争で失った体の一部や回収しそこなつたしたいというのはどこにでも、少なからずある。

それらの遺体の遺伝子からはさまざまな情報が抜き取れる。

もちろん完璧ではないが、不可能というわけではない。

大蛇丸のように他者の遺伝子や能力を研究し、利用するという探究者の類はどの里にも少なからずいるのだ。

そうした人間に男たちは死体を提供する。

当然その死体は自分達の里のものだったらほかの里への情報秘匿につながるし、ほかの里のものであれば大なり小なりの得となる。

ゆえに男たちはどの里の忍からも狙われ、拷問され、挙句には殺される。

しかしそうしなければ日銭を稼げない。

それほどに困窮しているのが今の世の中なのだ。

ゆえにそんな男に対する降伏勧告というのは自殺しろと言っているようなものである。

イタチもそれはわかっていた。

さすがに今の年齢ではそうしたことは教えられていないが、聡明ゆえにわかっているのだ。

状況や彼らの目的を考えれば難しくはない問いである。

彼らの末路がどうなるかは。

それを思い立ち、何も言わなくなるイタチ。

「があっ!？」

「せめて今ここで殺してやるのが優しきというものだろう。」

男はいつの間にか血反吐を吐き、地面に伏せている。

一体何が起こったのかわからなかったが、自身の体の痛む場所から推察するにただの幻術にはめられて、その間にブスリといったところだろう。

いつの間にかと思うと同時に、ここまでくるともはや笑いしか出なかった。

死に間際の瞳に映りこむのは震える子供であるのは気のせいかと思いつつも男はゆっくりと息を引き取ったのである。

## 痛みに甘えはない

☆ ☆ ☆

「っ!？」

ベッドから跳ね起きた体には脂汗がべつとりとしみついていた。

「………まったく。

先が思いやられる。」

ヒビキは頭を抱えて、ぐったりとする。

結局、目的の猫は見つからず、任務は可もなく不可もなくいうところで終わった。

木の葉の里に帰ってきて、数日が経ったのだがヒビキは良く眠れない日が続いていたのだ。

原因は分かりきっていた。

「人殺しが……まであとを引くとはね……」

日本人としての価値観。

前世の記憶を持つものとしての価値観がヒビキの夢見を著しく悪くしていたのだ。殺した瞬間は特にどうと思わなかった。

螺旋丸で吹き飛ばしたり、忍術で殺したためか、直接の手ごたえを感じなかったためかもしれない。

人殺しの経験が無かったり、平和ボケした日本人である、ということだとえ殺しても実感が湧かなかつたのだろう。

しかし、それも少しの間だけだった。

もしかしたら初めての任務による緊張という部分もあつたかもしれない。

木の葉に戻った日の晩。

いきなり自分の手で今回殺した人間を夢の中でひたすら殺す夢を見た。

当然ながら殺人鬼というわけでもない彼女にとつて、それは不快な夢だった。

「……ふふ、フィクションじゃ、よくよく吐き気を催す描写があるけども……まったく、そっちの方が全然よかつたかもね。」

苦笑しながら服を着替えるヒビキ。

しばらくたてば時が癒してくれるはず。

そう考えて一週間。

いまだ夢見が悪くていい加減、うんざりを通り越し、笑うしかない。

イタチやタマモはどうなのだろうと少し考えながらも今日は任務の日である。

初めての任務ということで一週間ほどの休みを言い渡されたのだ。



これは当然、シスイの気遣いである。  
初の人殺し。

いろいろと休む必要があるだろうということだ。

「そいやっさっ！」

元気にしてたかつ！皆の者っ!!」

待ち合わせ場所はラーメン屋、一樂の真ん前。

そこにいくとイタチとタマモはすでにいた。

シスイはヒビキがついてちようど到着したという感じである。

あまりのタイミングに出待ちしていたんじゃないか？とちらつと思ったが気にしないことにしたヒビキである。

「なんです？」

その掛け声。」

「ヒビキちゃんはノリが悪いなあ、今日も頑張ろうぜっ！っていう心を込めた挨拶に決まってるだろ？」

「すごく・・・寒い挨拶ですね。」

「・・・い、言ってくれるね、おい。」

「それでシスイさん、今日の任務は・・・」

「せかすなせかすな。」

せつかちな男はモテないぞ、イタチ君。」

「・・・そうですか。」

特に気にしない様子のイタチ。

性格はもちろん、そもそもいまだ毛も生えそろっていない年齢であるイタチに色恋沙汰はいささか早いだろう。

シスイは張り合いがないと内心、嘆息しつつ、この子ならばっ！と話を振る。

「タマちゃんもそう思うだろう？」

「・・・別に私、イタチ君のこと嫌いじゃないよ？」

「・・・いや、そういうことじゃなくてだな・・・」

「じゃあ、やっぱりタマモも好きなの？」

「・・・？」

タマモがイタチに惚れているというのなら、難儀な恋になるだろうなと思いつつヒビキは聞いてみたのだが・・・

「好きでもないよ？」

「・・・んん・・・そういうことじゃないんだけど、まあそれならいいや。」

とのヒビキの言葉にきよんとするタマモ。

・・・あれである。

まだ恋バナは早いということだ。

それを聞いてもいまだノーリアクションのイタチ。

嫌われていようと好かれていようと関係ないという感じだ。

任務に影響しない程度ならば勝手にしてくれというスタンスである。

相も変わらず実に子供らしくない考えを持っていた。

「さて、回りくどくいくのもあれだからな。

結論から言ってしまうと、人殺しした感想はどうだ？」

「・・・む」

「・・・」

「・・・えと・・・」

三者三様。

イタチですらピクリと眉根を動かすレベルである。

シスイの質問に真っ先に答えたのはイタチだった。

「問題ありません。」

「・・・無理しなくていいっつもの。」

イタチの頭に手を置いて荒々しくナデリコナデリコするシスイ。

イタチはされるがまま、ただその瞳は何事かを考えてるかのよう  
に焦点があいまいだった。

「お前ら全員、俺レベルにならないと分からない位に微妙なものだが、それでもわずかばかりに動きが鈍い。」

おおかた・・・眠れてないんだろう？」

その言葉に三人とも肯定も否定もしなかった。

沈黙である。

しかしこの場においての沈黙は、十二分に雄弁だった。

ちなみに彼でなくても上忍ならば誰でも気付く程度ではある。

「別に恥じ入ることはない。」

人を殺す。

忍として生きる以上は避けて通れない道だ。

そのことで悩み、眠れない。

つてのは忍にとつての登竜門。誰しもが必ずと  
いっていいほどに悩み、受け入れ、時には  
割り切つて乗り越えていく。

俺だつて初めて人を殺した晩は・・・良く眠れたが。」

眠れたんかいっ!?

「ま、俺の場合は特殊だな。」

まだ戦争中だったから、そんなことを考える余裕がなかった。

ただひたすら毎日、生き残るために！つてな感じのことばつか考えてたし・・・むしろ悩めるだけ贅沢だと思え。

・・・とまあ何が言いたいかと言えば、焼き肉いこうぜっ!!」

「なぜですか？」

イタチがあっけにとられていた。

珍しいことである。

「割り切れてないんだろ？」

今日はとりあえず焼き肉を食うことを任務にしよう。

お腹いっぱいになれば良く寝れるだろ。たぶん。」

「適当ですね。」

といいつつもイタチは格別反対しようという意思は見せていなかった。

「それで、寝て、食って、寝て、食ってってやってればなんとかなるさ・・・たぶんな。」

「・・・お肉苦手。」

とタマモが言い、あまりの適当さに何も言えないヒビキはただため息を吐くだけだった。

でもって焼き肉店。

「……もぐもぐ。」

「……うまい。」

「……むう、やっぱり苦手。」

サラダ一つお願いします。」

「お、おごりがいのない奴らだな……」

ヒビキはただ自分で食べる分を一つづつ焼いて、ごはんと一緒に食べるが、ご飯がなくなったらそれで終了。

おかわりはせず。というかすでにおなかいっぱい、イタチは育ちざかりの男の子の割には小食であったため、ヒビキよりも少ない程度で満足してしまった。

タマモにいたってはお肉は一口食べて、あとはデザートやサラダでお腹をいっぱいにしてしまった。

「もちつと食ってけよ、せつかくの俺のおごりなんだぜ？」

それこそお隣のような……は、ちと困るな。」

となりでは秋道一族が複数で囲んでいるテーブルだ。

すさまじい勢いでお肉が消え、皿が増えていつている。

店員が大変そうだ。

網の交換も10分と経過しないうちに交換である。

待ちきれないのかほぼ生肉のまま食っているような気がしなくてもない。

余談であるがその食欲から、秋道一族同士による食事は上司も部下も無く、割り勘と決まっている。

言わずもがな、一人で払うということになると破産しかねないからだ。

こうして今日は焼き肉を食べるだけに終わった。

「んじゃ、今日はこれにて解散。」

その言葉にそれぞれがうなづく。

食休みをしたら修行をしようと思いつつ、ヒビキはタマモと一緒に演習場へ。

が、変える間にシスイが引き留めた。

「最後に一つ。」

「・・・背負わなくていい。」

「・・・え？」

シスイの言葉について声が出たヒビキ。

「子供らしく責任感なんざ持たないで、適当にすればいいのさ。」

俺に背負わせておけばいい。

俺に預けとけばいい。

上司の指示が、判断が悪いんだってな。

で、それで納得できないようになる年ごろになった時に、初めてもう一度背負ってみればいい。

・・・だからな、今日は安心して眠れ。」

と、につこりとしながら言うシスイ。

「ふつう、そこは自分で背負わせるように言うところじゃ？」

ヒビキがたまらずに言い返す。

「おうとも。

きつとほかの奴らが聞いたら甘いつていうんだろな。

優しさじゃないって。

でも。

本来ならお前くらいの子にそこまで厳しくせざるを得ないのは俺たち大人が  
だらしなからだ。

そんな俺たちがお前たちに背負え、だなんて言えるわけないし、そもそもそんなこと  
がまかり通るような世の中じゃいけねえと思うんだよ、俺はな。」



「……見くびらないでください。

すでに私は覚悟（……）しています。」

「……まあいいけども。」

確かにそうだ。

シスイの言うことにも一理はあるし、そうであるべきなんだろう。

しかしヒビキの中身は違う。

子供じゃない。

子供じゃないのだ。

早いなんてことがあるはずがない。

「そんな甘ったれた真似をしてこれから先を乗り切れるわけがないじゃないか。」

ぼそりといったヒビキの言葉は誰にも聞こえなかった。

## うちの現状

それから三か月が経過した。

ヒビキ達は着々と任務をこなしていき、今ではCランクからBランク任務を行うのが常となっていた。

そんなある日、シスイのもとにとある男が訪ねてきた。

「順調なようだな、シスイ。」

「フガクさん、こんにちわ。」

うちはフガク。

イタチとサスケの父親であり、現うちは頭領かつクーデターにおける首謀者でもある。

「わざわざ家にまでご足労いただくとは申し訳ない。

仰つていただければ此方からお伺いしたのですが。」

「前置きは良い。

申し訳ないが、いろいろと忙しくてな。

手短に済ませたい。」

「そうですか、それで、ご用件は？」

呆けるシスイに若干の苛立ちを込めてフガクは写輪眼状態で睨む。  
「飄々としているお前の態度にも些か飽きた。」

いい加減に真面目に聞け。

分かっているだろう？

クーデターの件だ。」

「それは再三にわたってお断りしたはずです。」

俺はクーデターに加担するつもりは微塵もない。」

「なぜわからないっ!？」

このままではうちはは蔑ろにされたままなのだぞっ!？」

薄々ではあるが年々、里のものが我らに対し壁を作り始めているのは分かっているだろうか？

いずれ・・・より肩身が狭くなっていく可能性も低くはない。」

フガクがクーデターを行うのは当然ながら一族のためだ。

昨今、警備に関する部分を担う、うちにはに対し反感が出てきた。

当然ながら警備をするうえで犯罪者を取り締まる彼らの仕事は逆恨みを受けやすい立場にあり、なおかつうちには『エリート』とされる一族であり、嫉妬や妬みの対象に

なりやすく、少ないながらもうちは一族の子供が逆恨みで殺されるといふ事件が年々増えつつある。

それに対してうちはとて黙っていられるわけがない。

元々、愛情が深い彼らは子供を殺されて黙っていられる性質ではないのだ。

なぜそんなことをするやつらを守るために恨み役を買って出なくてはならないのだらう？という疑問視の声も当然、上がっていた。

警備に関することを丸々任されている、もとい権力が強めという部分からそこに増長も加わって、今ではフガクですら抑えきれないレベルに膨れ上がっている。

それでもなんとかクーデターが起きてないのはそれすなわりフガクの手腕に他ならない。

が、それも爆発するのを引き延ばすのがせいぜいである。

そしてさらにはうちは一族の減少もまたそれに拍車をかけた。

うちははなまじ能力が高いだけに戦争でも矢面に立たされる機会が多く、それによって死んだうちはもバカにはならない。

里に対する影響力や、立場が弱くなっているのを危惧しているのだ。

こういった様々な理由から彼はクーデターを起こさなくては、いや、起こさざるを得ない状況になってきているのである。

当然、フガクとしてそんなことをすれば様々な部分で良くないことが起こるのは分かっているのだ。

分かっているが。

なまじ愛情深いだけに家族を、身内を殺された部下たちに対して『そこをこらえてこそ恐だろう』などという声をかけることはおろか、励ますことすらできなかつた。

もしも自身の息子が殺されたら、妻が殺されたら？

そんなことを言われて止まれるはずがない。

何よりも、何よりもだ。

うちはであれば、クーデターの成功率が低くはないということが一番の理由だった。

なまじ可能性があるから夢を見たがる。

見てしまう。

ここでクーデターの成功確率が低ければただただ涙を呑んで、必死に堪えていただろう。

さしものうちはとて、さすがにそこまでの阿呆ばかりが集まっているわけではない。

しかし現実として成功できるビジョンが見える。

ビジョンが簡単に思い浮かべることができる。

実に困った話だった。

フガク個人としても許せなかったのだ。

戦争で、そして逆恨みで殺された同胞たちのためにもこのままうちはが衰退していく経過を見ていくなど耐えられなかった。

一族としての誇り、情や義理。

様々なしながらみゆえに彼はクーデターを起こすことを決めた。

「俺は今でも反対です。

そんなことをしてどうなるんですか？

里全体に身内を失ったという悲しみを広げるだけです。

そんなの・・・ダメなことだってことぐらい・・・」

「分かるとも。

だが、止まれんのだ。

・・・俺はな。

子を失った部下にかける言葉が分からない。

恋人を失い、自暴自棄になった女にどうすればいいのか分からない。

師を亡くした同朋に何を報いてやればいいのか分からない。

それらすべてが里に、里が強したことだと里のせいにする仲間たちに対する説得の言葉にどう反論すればいいのかわからないのだ。

いや・・・まだ、な。

まだ、うちには対して里が真摯に努めてくれるならば良かったさ。が、現実が違う。

疎ましく思われている。

結果死人も出ている。

命を懸けてまでも報われなかった同朋に俺はなんといえがいい？

拳句の果てにはうちの衰退だ。」

「・・・。」

「バカな真似をしているという自覚はある。

あるさ。

けどな、これだけは言っておくぞ、シスイ。」

「・・・。」

「どうせなら殺してくれ。

・・・ほとんどの遺族が言った言葉だ。

こんな辛い思いをするくらいなら死んだ方がマシだつてことだ。

むしろ死にたいからこそこんなことをしでかすのかもしれないな。」

「間違ってる・・・そんなの間違ってるでしょう？」

本気でそんなのを認める気なんですかっ!？」

「じゃあ、お前がどうにかして見せろ。」

「・・・っ!」

フガクのセリフにびっくりとするシスイ。

「情けない限りだがな、俺には同朋の意を汲んでやるのが精一杯なんだ。

本当に、情けない限りだが。

まさか俺が何もしてないとも？

当然、したさ。

考えうるだけのことはした。

恋人を失った女には新しい男を紹介してやったし、子を失った部下には長い休みを与えた。

師を亡くした奴には俺自身が師になってやった。

里のせいにする奴らにも、それは違うって真摯に、丁寧な、熱心に、これでもかつてくらいに、しつこくねちっこく何時間もかけて、何度も何度も説得した。



でもな。」

フガクは今にも泣きそうな顔で淡々と言った。

「ダメだったよ」

「・・・っ。」

最後にフガクは言ったのだ。

「同朋の一人も救えないこんな俺でも・・・俺はうちの頭領なんだ。

火影じゃない。

里かうちかはかを選べといわれれば、うちはを取る。

当然の帰結だな。

あいつらを見捨てられるものか。

切り捨てれるものか。

・・・ゆえにどうにかしたいというのなら、無力でお飾りな俺に言うのはお門違いだ。

お前が一人ひとり説得しろ。

チャレンジするだけならタダだ。」

その言葉を聞いて、シスイの頭にはタダよりも高いものはないという言葉がふと浮かんだ。

確かにその通りだ。

お金で解決できるなら何年かかっても、それこそ死に物狂いで里の予算並みに稼いできてやるつもりだった。

が、これはどうにもそれよりも簡単だとは思えなかった。

「二応、できる限り爆発するその時は引き延ばしておく。

とはいってもそれは長くない。

あと4、5年だ。

せいぜいがそのくらい。

それを頭に入れて動け。

話は終わりだ。

邪魔したな。」

と言って去るフガクが消えた後には無力感に苛まれるシスイが残るだけであった。

## ある休日の悩み事

シスイとフガクの邂逅から2カ月半あまりが経過したころ。

このころになると響たちはすっかり任務に慣れ、そしてそれぞれが高い能力を持つがゆえにシスイ以外は下忍であるにもかかわらず、請け負う任務ランクの平均はBランクであった。

「おい、あれ・・・」

「ああ、将来有望株の三人だろ？」

とじろりと見られたり。

「下忍でありながら依頼達成率はパーフェクトらしい。」

「いや、上忍がついているんだから当たり前だろ。」

「違うって。すべてパーフェクトって言ったろ？」

達成自体よりもその丁寧な仕事も評価されてるとかって聞いたぞ。依頼の難易度じゃなねえ、依頼の完遂度がSランクだとか。」

「・・・いや、さすがにそれは信じらんねえよ。Bランク以降は上忍でも厳しいのに・・・」  
「だよな。今のご時世、昔よりもランクのハードルが上がってるからなおさらだ・・・やつ

ぱり噂は噂だな。はははっ！」

その目線には驚嘆や

「たく、血統が良いとイイヨな。いい忍術を教えられてさ。」

「だよな。俺だつてうちの血が流れてたらあれくらいは余裕だったね！」

「ばっか、おめえ、そしたら俺なんて伝説の三忍を超えてたわ！」

「そしたら俺は初代火影すら越えることができたな！」

「それはふきすぎだろ!？」

せいぜいあんなクソガキどもには負けないう程度にしておけよ。」

という嫉妬が入り混じっていた。

そうした噂の張本人である三人は今どうしているかというと、

「…もちやもちや」

「おいしい?」

「とつても、もいすちやあー」

「もいすちやあ?」

「美味しいってこと。」

タマモとヒビキは団子屋で舌鼓を打っていた。

ヒビキはされるがままにタマモに食べさせられ、タマモは自分が頼んだ分も含めてヒ

ビキに直接手づから、ともしれば雛に餌を与える親鳥かのように団子を食べさせていた。

すなわちビビキはアーンをされていたのだ。

この姿を見れば分かるように、二人は日々仲良くなりつつあり端的に言ってしまうえばイタチが孤独感を感じるほど。

とはいえイタチはシスイと仲良くなっており、一見至極まじめなイタチとどこか抜けているシスイとは合わないように思えたが、むしろそれがうまい具合にはまったらしく、一緒の任務の際に手分けする必要がある場合、シスイとイタチ、ビビキとタマモという組み分けが自然とされるようになっていた。

という話はさておき。

ビビキは絶望していた。

いや、脱帽していた。

もちろんイタチの成長速度にである。

ビビキの才能、そして中身が大人であるといういわば意志力のアドバンテージ。イタチよりも二年先に産まれていること、そして写輪眼による修行の効率化。

とさまざまな事柄において先に進んでいたにも関わらず、イタチは実戦においてめきめきと力を付けていき今ではビビキに勝るとも劣らないほどとなっていた。

わけがわからない。

たかだか9歳児に何ができるのか。

とどこかで思っていたのかもしれない。

悔りがあったかもしれない。

油断や慢心があったかもしれない。

しかしこの成長速度は異常である。

今のヒビキにとつて生き残るための道は可能性を度外視すれば、いくつもある。

まず一つがうちのクーデターを未然に阻止すること。

これは頭領のフガクを説得、だけでは済まない。

たかだか一人の人間にクーデターを起こす力があるはずがない。

クーデターとは腹に据えかねるほどの不平不満を持つ人間が『複数』いて初めて起こ

せるものだ。

いくらカリスマがあろうとも、そこには限界があるはず。

つまり里の：少なくとも過半数に近いうちの人間を一人一人説得しなくてはいい

ないのだ。

クーデターとはいわば犯罪である。

成功してもしなくても人が死ぬ。

生半可な気持ちで起こそうとするバカはいないだろう。

それだけの思いを秘めた人間を片っ端から説得していく。なんと非現実的な話だろうか。

ヒビキが伝説の三忍レベルの実績ないしは人望を持つていればともかく、ただ優秀なだけの子供の言うことを聞いてもらえない段階はすでに超えてしまっている。

ナルトならば、と思わないでもないが今の彼は幼児である。

いや、稚児である。そんな生まれて数年という赤子に何かできるはずもなく、期待しようがない。

三代目火影も無理だろう。

立場が邪魔をする。

そればかりにかまかけてはいられないし、そも一番トップの人間に頭ごなしに注意されようと言葉通りに受け取ってくれるかという問題がある。

第二に。

イタチを殺してしまうこと。

しかしこれまた現実的ではない。

そもそもクーデターがあるからイタチが動いたのであって、イタチを殺してもそのままクーデターに突入。勝っても負けても良いことはない。

下手をすれば弱った木の葉に向けて他里の忍が攻め入ってくるだろう。ろくな目には合わない。

そもそも暗殺任務をほかの人間に頼まれるだけである。

第三は上に続く形となるが、イタチの代わりに自分が暗部となり、うちは抹殺の任を請け負うこと。

交換条件に家族の無事を祈ればなんとかなる。と思いきや、そこで立ちふさがるのがイタチである。

おそらくはサスケだけは生かそうとして必ず敵対するはず。もしくは協力するふりをしてサスケを逃がすかもしれない。

なんにせよイタチを敵に回した場合、おそらくはただではすまない。直接戦えばなるほど確かに。

勝てる可能性もある。幸いなことに手の内は分かっているのだ。今から準備をしていけばまず負けない位にはなるだろう。

が、イタチはなにも忍術などの戦闘能力がすごいわけではない。

いや、戦闘能力もかなりのもののだが、それを超える忍や同格は少なからずいるし、同じ写輪眼を持ち、幸いなことに才能あふれるヒビキにとってみれば倒すのは決して極端に難しいというわけではない。



だが、彼のすごいところはそこではないのだ。忍としての完成度。

それがもつとも恐ろしい部分である。

原作において自身の心すらも忍ばせ、その結果サスケ以外を殺し尽くしたイタチ。当然情が無いわけではない。

彼にとってはそれよりも優先すべきことがあっただけのことである。

『オビトと接触をし、うちはを殺す代わりに木の葉に手を出さないように約束する。』  
『ダンゾウからのうちは皆殺しの任を請け負う。』

この二つのどちらが先か、もしくは同時だったのかは分からないが、彼はどうせやるならとその二つをまとめて最善の選択をとったのだ。

うちはを、自身の肉親を、決して愛していないわけではない同胞を殺さなくてはならない、選択肢が無い状況において、冷静に、平常に、その状況に置いてなおイタチはオビトの存在を察知し、その目的すらも明らかにしたうえで、彼は計算しどうせやるならば最善と言わんばかりの選択を取った。

その強靱と言うのも生ぬるい、忍に向いた頑健な精神性。才能ではない。

資質が彼の最大の武器なのである。

端的に言ってしまうと謀（はかりごと）によってヒビキが身動きできなくなる、ないしは行動を起こした段階で何もできなくなるような手段を講じてくる可能性があるのだ。

そんな彼を敵に回す。

極力避けたい話である。

ゆえに今まではこの任務に、もといダンゾウに自身を売り込んでイタチと一緒に抜け忍になる、もというちはを、家族やタマモとサスケ以外を殺しつくして抜け忍になるという条件を付けるつもりだったのだ。

だが、それにはまず力量以前にヒビキが平和な国、日本で培った『甘さ』をダンゾウに察知されないようにしなくてはならない。

が、おそらくは厳しいと考える。

なにせ相手は暗部の長だ。

そういつた機微にはかなり敏感であると考えるべきである。

第四に。

これは最近考えだし、かつこれからの指針として一番確率が高いと思われる手段である。

ここ2か月半に新たに考え出した手段として、『普通に守りきる』という今更なものだ。

ダンゾウの、木の葉の裏の話として『実はクーデター阻止のためにイタチを仕向けた』という話は一般の忍には伝わらない。

『イタチが急に里を裏切った』という形なのだ。

ならば、何も知らないふりをして単にイタチを退けることができるのであればそれ以降、ヒビキとその家族は『天才ヒビキが鬼才イタチを退けたがためになんとかこうにかイタチの裏切りから、あの悲劇から幸いにも生き残った家族』という目線になる。

女子供問わずにうちはを殺し切る命令をしたということからダンゾウは良く言えば慎重、悪く言えば過激な彼とはいえず、そういった目線で見られるようになった家族をも「念のため」程度の理由で躍起になって殺すほどの馬鹿ではない。

おそらくは大丈夫である。

閑話休題。

ここで冒頭に戻るわけである。

第一に考えるのはイタチを退けることなのだが、いかんせん、最近のイタチの成長具

合に恐れすら感じるヒビキとしては重ねていうが、脱帽ものなのだ。

本当にこいつを退けられるのかという不安に駆られ、最近は団子もあまり喉に通らないほど。

今日などまだ…

「もういい…ありがとう。」

「ヒビキちゃん…なんか今日は食欲ないね？」

どうかしたの？

まだ16個しか食べてない。」

ちなみに団子屋の団子は一つ一つが小ぶりのおにぎり大である。

普通の人であれば10も食べればおなか一杯になる量だ。

「お会計。」

「う、うん。」

お金を払おうとタマモが財布を開けるが、それを手で制すヒビキ。

「私が…」

「結局、全部食べたのは私だから。」

最近、どんどんと口調が平たんになっていくことに、若干の悩みを覚えながらもヒビキがお金を出した。

そもそも、自分で頼んでいたのを最初の一個以外すべてヒビキに食べさせておきながらお金を払おうとするなんて、どういいうつもりなのだろうか。

そう聞いてみると

「えへへ…幸せだったから…」

とはにかむ笑いを見せるタマモ。

良く分からず首をかしげながらも、そう、としか答えられなかったヒビキである。

そんなある休日が過ぎた次の日。

シスイからとある言葉を言い渡された。

「お前ら。

中忍試験に出てみていいんじゃないか？」  
と。

## 中忍試験その壺

シスイのその言葉によってところ変わり。

ヒビキ達は中忍試験会場にいた。

場所は木の葉ではなく、同盟を組んだ砂隠れでやるとのことだ。

確かいつぞやに風影が大蛇丸に成り代わっていたはずだが、今はまだ大丈夫なはず。

特に何か起こるわけでも、現地の人間に絡まれたわけでもなく、とどこおりなく会場についた一行は、始まりの合図を待っていた。

そこへやってくる砂隠れの忍達。

「さて、諸君。

大変長らくお待たせして申し訳ない。

此度の中忍試験監督役をさせてもらう砂隠れ上忍、スシマルという。

よろしく頼む。」

といって頭を下げて挨拶をするスキンヘッドのおっさん。

それを皮切りにほかのメンバーも挨拶と、木の葉側のそれぞれの班の監督役たる上忍たちもまた挨拶をした。

「俺はうちはシスイ。好きな食べ物は卵焼きだ。よろしく頼む。」  
とにこやかにスマイルをするシスイ。

その言葉にあれが……とか瞬身と名高い彼が来たのかとか砂隠れ側のボヤキが聞こえた。

若干、無礼にも思えたがそれだけのネームバリユーがあるということだろう。

そして卵焼きが好物だというのもしまさしながらに知ったことである。

あと、なぜそれを言ったのか意味不明だ。

親しみを持たせようとしたのだろうか？

「さて、簡単な挨拶も済ませたところで早速試験を開始したいと思う。

トイレを済ませておきたい子たちはいるかな？

遠慮することはない。

トイレに行きたい人間は今のうちに済ませておくに限るぞ？」

と少しの威圧も込めてスシマルが言う。

それを聞いて数人の下忍がトイレへ向かったとき、スシマルは言う。

「あいつらは失格だ。それとあいつらのいた班の下忍も失格だ。」

えーっ！とトイレに行った子たちの同じ仲間が言った。

愕然である。畏である。しかし、やむを得ない部分もあった。

「貴様らは命がけの戦いのときにトイレで集中できなくて負けた。とても言うつもりか？」

トイレ位済ませておくのが普通だ。そもそも今回の試験には命がけであるという上官からの忠告もあつたはず。

その試験にトイレすら済ませずにやってきた馬鹿を、心構えのない人間を中忍にしても任務で死ぬだけだ。

むしろ感謝してもらいたい。今回の失敗を活かせる機会がもらえたのだから。

実際の任務で失敗したら二度と名誉挽回する機会が訪れない、すなわち命を落とすことなどざらにある。」

それでも納得いかない子供たちがぶーたれるも、にべもなく無視するスシマル。

「いささか厳しいとも思うかもしれないが、今のご時世は少し前よりも総じて任務の難易度、命を落とす確率が上がっている。

だました？ 罠だ？ 横暴だ？ 卑怯だ？

たわけどもが。

そんなことこれから生きていくうえで多々ある。

今からそれが体験できてラッキーだと思え。中忍試験はまた来年受けなければいけないで、失うものなど何も無いのだからな。」



と締めくくり、そのまま本当の試験を行うと宣言した。  
それよりも私に気になるのはほかにある。

「命がけとか聞いてませんが。」

「そ、そうだっけ?」

とシスイが目をそらした。

いや、私は前世の記憶から事前に知っていた。

知っていたが、知らない人間もいる。

タマモや…イタチは知っているとかじゃなくて自分でそうだろうと気付いていそうではあるが、こうした重要なことを報告しない上官というのは些か以上に、注意してしかるべきだろう。

「えへへ、ごめーん!」

とキモイ笑いときやびきやびな言葉でごまかすシスイ。

「キシヨいです。」

「そ、そこまで言うことはないだろ!?

ちよつとしたおちやめさんじゃないか!」

「…さいですか。タマモだつて文句はあるよね?」

と話しかけたところ、タマモはえっ?と答えた。

「何か考え事？」

「い、いや…ちよつとおトイレ行きたくなっちゃつて…今からすぐいきたい。」

「えー。」

どないしよう？

「今回の説明が終わつたら行けばいいんじゃないかな？」

「えつと…でも。」

「心構えの話だし、種明かしした今、いまさらどうのこうのは言わないと思うけれど…」

「う、ううん…いい。我慢する。」

「いや、でも…」

女の子は我慢しづらいと聞く。

男よりも尿道が短く、尿道を締める筋肉が弱いためだ。

聞く、と言ったものの私もやってしまったことがある。

男であつた感覚があつたため、予想以上に我慢がきかずに…いや、あのことはもう思

い出すまい。

そこで私たちの会話を聞いていたイタチが言う。

「行つてきたらどうだ？」

俺もヒビキと同意見だ。

仮に失格にされたとして、特に思い入れがあるわけでもない。修行なら別に中忍でなくてもいいしな。

また来年受けければ良い。

その時はサスケへのお土産でも買って帰るさ。」  
と少し顔を緩めていうイタチ。

あら、紳士。

確かにイタチの言うとおりだ。

任務のレベルが上がれば、それだけ実戦経験が豊富になるということではあるが、今でも能力を認められたが故の高ランク任務を受けることはある。

正直中忍になる魅力はあまりない。

少なくともすぐにどうこうということはないのだ。

「…うう…でも…」

まだ渋るタマモ。それなら考えがある。

「…そう。なら…すいません。」

トイレに行きたいんですが…」

「なんだと？」

…ふむ。なるほどな。

いいだろう。」

とスシマルは勝手に納得した様子でうなずき、許可する。

「とはいえ、ここに居る人間を待たせるのは逆に気を使ってしまうだろう。」

第一次試験の説明はしてしまふから残った上忍、もしくはチームメイトにでも聞くんだな。」

そのまま第一次試験の話をするスシマル。

こう言うということは失格にはならないということだ。

それにしても中々気遣える男だ。説明が終わってからと思っていたが、せつかくの厚意に甘えることにしよう。

「えと……」

「ほら、この際だから一緒に済ませちゃおう？」

「う、うん。ありがとう。」

気遣いに関してだろう。

礼を言うタマモ。

タマモが言いづらいなら私が言ってしまうえばいいのだ。

そのまま二人でトイレを済ます私たちだった。

「さて、では早速だが試験の説明をしよう。」

結論から言えば試験内容は二つある。その一つが“なぞなぞ”だ。」  
ヒビキ達がトイレに行っている間にもスシマルは話を続けていた。

「なぞなぞ、というただの言葉遊びに思われるかもしれないが、忍をやつていくにあたり必要不可欠な技能でもある。」

『暗号化』という作業があることはすでにアカデミーで習ったな？

重要な機密情報、仲間との交信、ほかいろいろとそれをする機会はあるが、それを奪われた時に必要な処置として行われるもので、その手法にはさまざまな形式があるとされているが、結局のところその基本構造は“なぞなぞ”なのだ。

もちろんこれに限った話ではないし、こうした暗号化はそれぞれの里のやり方もあり一概に統一化されていない。」

とここで一呼吸置く。

「…いや、統一化するべきではないと言うところだが、そのあたりはさておき。」

その暗号化の基本である“なぞなぞ”を解く柔軟な頭を持っているかどうか。それを試験の目的とする。」

「あの…二つの内つてことはもう一つはなぞなぞではないんですか？」

とどこかの誰かが言った。

「急くな急くな。」

慌てんでも今からそれを説明するのだ。

さて、二つ目の試験だが“なぞなぞ”と言ってもそれが苦手な子もいるだろう。いわゆる脳筋だが、べつにそれを悪いとは言わない。

事実、頭の運動が不得意でも体の運動が得意であるがゆえに上忍になった、ということも少なからずいる。

その分、要求される力も大きいが人間、誰しもが万能タイプというわけではないし、特化型がいて悪いことも無い。」

「ということとは二つ目は……」  
「うむ、察しているようだが二つ目は体術についての試験。」

“組手”を行ってもらう。

この“組手”には忍術の使用は許可する。

そうなると組手の相手次第で合格不合格が決まると考えるかもしれないが、そこは安心してもらって構わない。

組手を行うと言ってもこちらが用意した試験官との組手だ。

勝利してもいいし、負けてもいい。

判断基準はそこにはなく、ある程度の動きが、中忍レベルの動きができてくるかを見る。

一つ目と二つ目、このどちらかを持って判断するということだ。」  
そこで一人が挙手をした。

「どうした？」

「どちらかというと、どちらか一方で合格した場合しか次に進めないということでしょうか？」

その場合、一つ目と二つ目をクリアした人間がこれから先の試験で明らかな能力格差に見舞われるかと思えます。」

「ふむ、良い質問だ。」

一言で言えばその心配はない。

二つとも受けてもらい、その合算で合格不合格を判断する。

また、二次試験も頭と体力を使う試験を考えている。

これに合格した人間が中忍とする。

さらに二次試験を落ちた人間のみで三次試験を行うことも考えている。

簡単に言えば専門技能確認試験だな。

頭が良いのか、体術がいいのか。

とはいえ普通よりも少しすぐれている、という程度では合格できない。

ここでも落ちた場合、中忍にはなれないと思ってくれ。

ほかに質問は…ないようだな。  
では早速開始する。試験会場へ移動してくれ。」  
こうして中忍試験は始まった。



なぞなぞがでるよ！

問・壺

以下の問題を応えよ

二人の男からプロポーズされた一人の女がいた。

二人の男からどちらかのプロポーズしか受け取れず、どちらのプロポーズを受けるべきか迷った女は占い師に頼ることにした。

有名な占い師を呼び寄せたところ、二人やってきた。

占い師Aはこう言った。

『私の占いは60パーセントの確率であたります』と。

占い師Bはこう言った。

『私の占いは30パーセントの確率であたります』と。

彼らの言う言葉は本当であると仮定する。

さあ、女はどちらの言葉を当てにするべきか。

問・貳

以下の問題を応えよ

人としての能力を有したからくり人形を七体用意した。

『は』のからくり人形は膝から下を。

『に』のからくり人形は腰から足までを。

『ほ』のからくり人形は右腕を。

『へ』のからくり人形は両腕を。

『と』のからくり人形は左腕と右足を。

『い』のからくり人形は右腕と左足を。

『ろ』のからくり人形は頭を丸ごとを。

それぞれ切り離した。

これらの七体のからくり人形に前に進めと言った。

前に進まなかったからくり人形が一体だけある。

それはどのからくり人形か？

チャクラを使用せずに動くからくり人形だと仮定する。

問題文に嘘はないと仮定する。

といったなぞなぞのような問題が並んでいた。

頭の体操になる。

解けないこともあるまい。

どれもこれも簡単ななぞなぞだ。

あくまで基礎であるというだけで、ある程度の柔軟さを見ればそれでいいというところか。

なぞなぞ自体をしつかり解かせるといつつもりではないらしい。

こつそりほかの二人を見てみると、イタチは一切顔色を変えていない。

タマモも悩みながらも筆は動いているようだ。

心配はする必要が無いな。

まずは問・壺。

占い師Aが60パーセントの確率で当たるということは40パーセントの確率で外れるということ。

占い師Bが30パーセントの確率で当たるということは70パーセントの確率で外れるということ。

そして彼女が占ってもらったのはどちらの男が良いのかという二択である。

となればもうわかるだろう。

正解は占い師B。

占い師Bが選んだ男と違う男を選べば、70パーセントの確率で女にふさわしいということがわかるのだから。

そして問・式。

これは意味ありげにカツコを使ってハニホヘトイ口を強調しているが、それは関係ないように思える。ただのひっかけだ。

そして最後に添えられたチャクラを使用せずに動く人形だと仮定するという文章。ではどうやって動くのか。

その前の文に『前に進めと言った』と書いており、それで動かなかった人形が一体しかないということは音声認識で動くということがわかる。

人形は答えを除いてすべて“前に進むことはできる”。足が無ければ両腕を。腕が無ければそのまま足を使ってという具合にどの人形もとりあえず前にはいける。

足を使って、とはどこにも書いていない。

ではいけなかったとするのは何か？

それは音を聞くための耳が無かった『首を切り離れた“ろ”の人形が正解』となるわけだ。

人形であるなら耳が無くても、とか、実は耳が胸についていたなどと考えることができるが“言った”として以上何かの手段で音声認識する必要はあり、また胴体についていた場合はどの人形も“前に進む”ことはできてしまう。

そうなる则一体だけ進めなかったという問題文に矛盾が生じる。

そもそも冒頭に「人としての能力を有した」と書いてあるのだ。人は耳以外で音を聞くことはできない。

ゆえに間違いはないはず。

こうして次々と問題を解いていき、10問の間をどうにか埋め終わった。

何個か間違っているかもしれないが、後半に行くにつれて難しくなっていたためにしようがないという思いもある。

その分、2つ目の試験で稼がせてもらうつもりである。

☆ ☆ ☆

「では一次試験、第二を始める。

各々の班は用意した複数の試験官から誰でもいいから自由に選べ。

試験官の力は極力平均化させたつもりだが、中には相性などもある。

試験後にAの試験官よりもBの試験官の方が高得点を叩き出せた、などという言い訳は聞かないし、通用しない。

君たちの持つ忍術によって探ることができればそれは許可するが、あくまで“探るのみ”だ。

相手に作用する忍術は一切禁じる。

そういった忍術を持たない場合は試験官の振る舞いなどを見るか、運も実力の内とい

うように適当に選んでみるのもまた一興だ。

事実、運のいい奴と一緒に任務をすると不思議とうまくいく、という実体験も少なからず話に上がる。

これから先生きていくうえで、運も君たちの命運を左右する要素と言えるだろう。」  
その言葉を聞きながらもざわざわと、時にはワイワイと子供たちは思い思いに試験官を選択していく。

「どうする?」

「おすきに。」

「私は誰でもいいよ!」

イタチの言葉に私とタマモが適当に答える。

本当に適当だが、その言葉にふつと鼻で笑いながらもイタチは何気なく一人の試験官を選んだ。

「選んだ基準は何?」

「単に一番強そうだったからだ。」

とはいえ、実力をそろえているらしいからあまり意味はないだろうが。」

と答えるイタチ。

あえて強そうなのを選ぶとはなんだろうね、この子。

選んだ試験官は一番筋肉質な男の試験官である。

とはいえども平均化させたということでの筋肉も見比べれば、という程度にすぎない。

イタチの意味はないという言葉通り、特に見切ろうともせず写輪眼を使っている様子も見られないからパツと見強そうだからという理由で決めたようだ。

ちなみに木の葉では私たちは優秀であるということでの有名なため、その有名なやつらを選んだならば間違いないとばかりに私たちの後ろには特に木の葉の奴らが並んだ。

あまりあてにしない方がいいんじゃないかな？と思うも、言つてやる義理はない。「さて、それでは諸君。

あとから試験官を変えることは出来ないが、今選んだ選択で間違いはないな？

……よし、それまで。

早速戦つてもらおうべく、諸君はそれぞれの試験官へついていきそこで試験を受けてくれ。

その後、1〜2時間の採点を経て、君たちが二次試験に進めるかの可否を判断する。合格していることを祈っているよ。それでは移動してくれ。」

という言葉で急にざわめきだす下忍たち。

テスト後の移動ということで緊張が少し緩んだのだろう。

気持ちちは分かる。

私たちは私たちが選んだ試験官についていくと殺風景な石畳の部屋につく。

「さて、さっそくだが試験を行う。

俺の名は砂隠れ上忍のゼンドウ。

よろしく頼む。」

とゼンドウが挨拶すると、その背後に瞬身の術で新しくもう一人の忍がやってきた。

「そして私が同じく砂隠れ上忍のヨシミチ。

私も試験を監督する試験官で、早速ルール説明をしますと：

試験は基本的にスリーマンセル、ツーマンセル、もしくは一対一の状態で戦ってもら

います。

つまり複数で戦うか、一人対一人で純粹に力を見てもらうかの選択です。

まずは私かゼンドウからどちらかを選び、そのあとにどういう形式で戦うかを決めていただきます。

当然人数が多いほど採点は厳しくなり、一対一の方が採点は高い傾向になります。というよりシンプルであると言った方がいいですね。

すなわち、採点基準が班の場合と一対一の場合では異なります。

とはいえどう異なるかは答えられません。



どう違うのかを自分たちで考えて、それを意識して動けばどちらであれ高得点を取れるかもしれませんがね。」

なるほどね。

一対一が得意だったり、もしくは連携を前提とした忍術を使う忍の場合などのことを考えての形式かもしれない。

班でやるか個人かで選べるのはありがたいだろう。

そして採点基準が異なるのは当然だ。

一人であれば純粹な戦闘力だろうが、班で挑戦する場合は仲間と協力できるかの連携力を見ると思われる。

そして…

「質問です。」

「えっと…君は木の葉のケンジ君…だったかな？」

発言を許可します。」

「ツーマンセルと言いましたけど、それだと一人余ってしまうのでは？」

「はい、その場合は残った一人だけで試験を受けてもらうことになりますね。」

残った一人とすでに試験を受けた人間とは組めないとします。

これはすでに戦った結果、私たちの手の内がわかり、公平性が損失されるからですな。

とはいえここにいる君たちはすでに中忍試験を受けるに当たり、監督上忍から中忍になる見込みがあるとされているはずです。

スリーマンセルとして、班としての経験をしてきた君たちであればツーマンセルでやるよりスリーマンセルの方が、結果が良いでしょう。

ツーマンセルもありとしたのは、念のためというだけの話です。あまり気にしなくてよろしいかと思われれます。」

「…なるほど。ありがとうございます。」

「ほかの質問はありませんか？」

ここで少し待っていてください。試験自体はこの隣の奥で…あそこの扉の先にある会場で行います。

では…アイウエオ順にやっけていきます。

まずは青葉ー」

いろいろ考えてるなあと思いつつ。

イタチがなぜかこつちをじつと見ていたので、首をかしげて見返すとイタチはわずかばかりの申し訳なさを出して僕とタマモだけで出てくれないかと頼んだ。

「普段からツーマンセルでやることも少なくともいいわけではないからいいけど…?」

「多里の忍と戦ってみたいだけだ。」

「…一対一で本気を出させてみたいってこと?」

「そうなる。」

「…だめか?」

とこちらに聞くイタチ。

イタチがわがままを言うなんて珍しい。…というほどでもないな。

戦闘や、各地に任務に行った際に遺跡など発見した際は普通にわがままを言うのがイタチである。

わがままとすると意外なことに思えるかもしれない。

戦闘狂とか趣味だとかそういう意味だと最初は思っていた。

だが違った。

いや、正確にはそれもあるとは思うのだがそれを自制できないイタチではない。

その言葉の大前提として必要だからやっておきたいという意味を感じさせてくれるわけだが…

全く恐ろしい話である。

「私は構わない。」

「ヒビキちゃんがいいなら私も大丈夫。」

「恩に着る。」

そういつてイタチが前に出た。

「まだ呼ばれてないよ?」

というタマモに珍しく逸つたイタチはわずかな間を開けた後。

「…分かつてる。」

と一見普通に答えた。

うん、名前順だもんね。今から前に出ても受けることができるわけじゃないよね。

焦つてつい試験を受けようとしてしまうとは。

超久しぶりに年相応のところを見られて少しだけ安堵したりなんかして。

顔にはなんとか出していないようだが、前にも言ったように私は常に目の上から影分身を黒いカラーコンタクト状に変化させてそれを付けた下で、写輪眼状態を保っている。

もとい写輪眼で見ればチャクラの流れが割と乱れていることから、恥ずかしくていふことが分かった。

ふふ。

無表情を保つ私自身、その珍しい姿に少し表情が崩れてしまった。

さらにそれを見てイタチが目をわずかながらに見開いて驚きつつ、一拍おいてそっぽを向いてしまった。

背いたその顔はどんな表情なのやら。

「ヒビキちゃんが笑った…」

「ん？」

と、タマモが驚いていた。

なんのこつちや。私とて人間。笑うことの一つや二つ…稀に良くあるわ。

「それでは次。

うちはー」

そしてしばらく待っていると私たちの出番になる。

私たち以外にうちは一族はいないため、必然的にー

「…」

黙って前に出るイタチだがー

「うちはタマモ。俺かヨシミチを選んで試験を受けてくれ。

どちらにする？」

という言葉にイタチは別に逸つたわけじゃないよアピールとばかりに

「俺は少し…トイレに行つてくる。」

逸つてしまったんですね。

…今日のことは覚えておこう。

戦闘中にこの話をすればうちは一族滅亡の日に彼の動揺を誘える黒歴史になるかも  
しれない。

## 試験と暗躍と

「うちはタマモ。

君は班でやるか一人で行るか？」

「私はツーマンセルをしたいと思います。」

「…ふむ？」

先ほどの話は聞いていたね？」

「はい。」

「分かった。では組む人間はー」

「うちはヒビキです。」

とタマモが言う。それに追隨する形でうなずくだけのヒビキ。

「了解。うちはヒビキ…よし。」

それでは二人で奥の部屋に。それと私とゼンドウでどちらと戦うかを選択してくれ。」

「どうする?..」

と聞くタマモに。

「…ヨシミチさんでお願いします。」

ヒビキは答える。

「分かった。」

それでは私が相手になろう。ついてきてくれ。」

と言って案内される途中すれ違った男に声をかけられる。

かけた相手は同じ木の葉の里の…瞳孔が存在しない特徴的な白目。

日向一族である。

「調子に乗るなよ、うちは一族ども。」

木の葉下忍最強は日向のこの俺だ。」

と彼は言った。

この試験会場に入ってからずっとヒビキたちを睨んでいた日向一族の少年である。

その言葉にヒビキは端的に返すだけだった。

「下忍だけ？」

…木の葉の里で最強、くらいは言ってみれば？男でしょう？」

「…っ…きさまっ!!」

ヒビキには悪気はなく、嫌味というよりは男ならばそれくらい大きな夢を持った方がカッコいいだろうという意見だったつもりなのだが、最低限の事しか言わないようにし



た口癖が悪く受け取られる原因となってしまうた。

ますます睨まれて、ちよつとたじろぐヒビキである。

すれ違いざまだったのでこの程度の話で終わった。

いずれまた絡まれそうな予感を覚えつつ、会場へと向かうとヨシミチはだらりと自然体。

いつでも初めて良いという。

「時間制限は10分。

その間にできる限りの力を見せてほしい。

その身のこなしで点数をつけていくよ。

ちなみに君たちの目標は私の腰についている鈴。

これを取れた段階で満点とし、その時点で試験を終了する。

また、使用する忍術などの制限はこの会場を大破させるレベルの術以外なら大丈夫だ。」

「倒してしまっても？」

「……ふふ。あまり舐めないでほしいけど、その場合も文句なしで満点。

あとは……そうだな。

殺す気で来ても大丈夫だと言うくらいか。

自分でいうのもあれだけど上忍の中でも指折りの実力者だからその辺の気遣いは無用。

ついでに言うところそこに医療班も待機してるから仮に大けがを負っても大丈夫。

さて、質問は？」

「大丈夫。」

「よし、それじゃ開始しようか。重ねていうけど、好きなタイミングで始めてくれて構わない。」

と言って特に構えないヨシミチ。

油断か。これが構えなのか。

タマモと目配せして、この2か月ちよつとで良く使う連携を試すことにする。

タマモが写輪眼を発動しながらダツシユでヨシミチに接近。

初めから八門遁甲の体内門、第一の開門、第二の休門までを開けていた。

かなり速い、が…それに少しの虚を突かれながらも冷静にただ自然体を維持し続ける

ヨシミチ。

ヨシミチの付近まで接近した後。

「むっ!?!」

瞬身の術と体術の合わせにより、本当に消えたかのようにヨシミチの前から移動して

背後に回るタマモ。

「えいつ!!」

可愛い掛け声に似合わぬ豪速の蹴りが繰り出される。

基本足払いの技である木の葉旋風からの派生技。おなじみ木の葉烈風だ。

あまりの速度に空気との摩擦から脚から火花が散るほどの蹴り技が当たるも少しのけぞらせるだけで終わった。

「……っ！」

クリーンヒットしたはずなのに、あまりの動きの少なさ。

あの一撃を受ければ少なくとも吹き飛ばされるくらいではあるはず。それが少しのけぞるだけということは何がしかの忍術で威力を軽減したということだ。

印を結んでいる様子はうかがえたが、印は相手が見て取れないようにするのが基本。

特に写輪眼相手ではどんなに早く印を結んでも意味が無い。

ゆえにだろう。途中で隠されて良く分からない。

ならば彼の表情はどうだろうか？

ヨシミチの表情は大きな驚きはあれどあくまでも今のタマモの動きに、という感じで自身が攻撃を受けてという風には見えない。

そして手ごたえ、いや、足ごたえに違和感を感じながらもタマモは背後へ飛び退く。

そこで間髪入れずにヒビキによる豪火球の術。

タマモが注意を引きつつ、ひるませてから退避した瞬間にデカイのを一発。

単純な連携であるが、二人の息はぴったりで上忍と言えども避けられないほどのベストタイミングである。

爆炎があたりを埋め尽くした。

「やったかな?」

「…まさか。」

しかし爆炎は消え、依然変わらぬ立ち姿であるヨシミチ。

「なるほど。」

「むう、厄介だよお。」

まさか無傷とは思わなかったが、それはすぐに理解できた。

ずっと写輪眼で見ていたヒビキとタマモも今の攻撃でハッキリとタネが分かった。

「風遁…か。」

風は目に見えない。

しかしチャクラで作った風遁は疑似的なものであり、忍であるならチャクラのゆらぎから見える。

しかし彼が使うのはそれよりもはるかに薄く、隠密性の高い、しかし鋭い風遁である。

それによつてタマモの蹴りをいなし、豪火球をそらしたのだ。

タマモの蹴りの時に気付かなかつたのはほんの一瞬のみ逸らすだけの少量のチャクラをまとつたから。

彼が本気ならタマモの足はズタズタになつていたかもしれないが、逆にタマモの蹴りの威力に押されてあれが限界であつたという可能性もある。

なんにせよ豪火球の場合は一瞬では防げなかつたということだろう。

「あつはつはつ。ばれてしまつたか。」

まったく普段ならまだまだ持つんだが、タネがばれるのがすごい早いな。

なかなか強力な火遁を使う。

それにそつちの子の体術も素晴らしい。

とはいえだ。まだ一分も経つてないが……終わりかな？」

と言いながらもヨシミチの視線とヒビキたちの視線はずれている。

意図的に視線をずらして瞳術にかからないようにしているのだ。

自然体で警戒してないように見せながらもその実、格下と侮らずに構えている。

それを気取らせない雰囲気づくりも上々。

なかなかやり手である。それがヒビキのヨシミチに対する評価であつた。

さて、これからどうするか。

あまり手の内をさらすつもりもないので、適当に流すつもりだったヒビキとしては今の流れで十分だと考えている。

先の連携とタマモの体術、ヒビキの術のチャクラの練りこみ具合などもろもろを加味しておそらくは合格ラインには届いているはず。

この試験の主軸はあくまで中忍に値する技量を持っているかである。

上忍ともなればもう分かった筈であるが…念のためもう少し戦っておくべきだろうか？

まあとはいえ、これくらいは良いだろう。

「むっ…動けない…っ。」

「降参？」

と問うヒビキ。

ヒビキの写輪眼による瞳術だ。

幻術にハメられ、ヨシミチは体を動かせない。

「写輪眼か…？しかし、写輪眼ではないはず…どういうことだ？」

「手の内を明かす忍はいないし、降参しないなら追撃をするけれど…」

「くっ…どうやったのかは分からないが、幻術にも様々な手段があるしな…降参だ。」

全く持つて動けそうにない。」  
種明かしは簡単だ。

ヒビキは常に写輪眼の上に影分身で出来たカラーコンタクト、もとい黒い瞳に見せかけていた。ゆえに彼が視線を外していたのはタマモのみ。

そしてヒビキは先ほどから印を顔のあたりまで上げてから結んでいた。

これは視線が目に行きやすいようにだ。

そうすれば目が合わずとも視界に入り、ヒビキが写輪眼ではないということがわかるはず。

しかしその実、そのフェイクにまんまと引っかかり、幻術にかけられてしまったということだ。

これは写輪眼や白眼などのチャクラを見る目か、よほどの感知タイプでなければ気付けない。

もちろん普通の忍にもある程度のチャクラ感知能力は備わっているが、それは感知タイプに比べるに及ばないほどのもので、どこに人がいるかというのが分かる程度だ。

もしくは強力な忍術の余波などを感じたりなどがせいぜい。

人体はチャクラの塊であるがゆえにその塊の中の細かい流れまでは分からないのである。

たとえて言うならお風呂の中の水に少しの水流を立てた後、その流れを把握するのと同義である。

それが激流のような流れならばすぐに感じ取れるだろうが、少しの流れの場合は分かりづらい。

仮にわかるとしてもしつかりと流れを感じるように集中する必要がある。

ゆえにこそヨシミチはヒビキの写輪眼に気付けなかったのだ。

「つと…動けるようになったな。」

まったく、シヨックだよ。

「ここまで完封されるとむしろ清々しいくらいだ。」

「ありがとうございます?」

「…ちよつと違う気もするが、まあその受け答えでも構わんよ。」

これにて試験は終了だ。退室してくれていい。」

その言葉に下がるヒビキとタマモ。

そして。

「どうですか?」

ヨシミチさん。」

部屋に残ったヨシミチの背後に突然仮面をつけた男が出現した。



特に何かをするのでもなく、ヨシミチは淡々としゃべる。

「優先ターゲットとして狙え。」

くれぐれも木の葉に気取られるようなことはするな。

雇い入れた抜け忍を使って目を回収。だが、一番重要なのは砂が手引きしたことを悟られないことだ。いや、悟られるくらいならいいが確信を持たせるようなヘマはするな。重ねて言うしておく。」

「はい。」

「二次試験の前に、休憩がてら一晩おいて二次試験を行う。」

内容はサバイバル実習だ。

殺しもありという厳しいもの。ゆえに：一晩のうちにできる限り準備を済ませておけ。」

「死んだとしても不幸な事故で片付けることができるというわけですね。」

「そのとおりだ。貴様らは当初の予定通り中忍試験を受ける下忍として潜入。」

写輪眼と白眼を回収し次第、死体は処分。

動物に食われたように見せかけろ。」

「死体を丸ごと確保しておきたいところですけどね。」

「物的証拠は少ないほうがいい。」

特に今は同盟を締結した直後だ。出来る限り不確定要素は省け。」

「重々承知しております。それにしてもよろしいので？」

「チヨバア様方や風影様には……」

「という男の言葉にヨシミチはうなずく。」

「風影様からの直接の依頼だ。」

「はあ……それはまた。」

「それにしてもなぜこんなことを戦争直後でやる必要があるんですかね？」

「……やむをえないだろう。」

「砂の里を維持するために大名のご機嫌取りは必要だ。」

「まあそのあたりの事情は察してはいますが。」

「ならば黙って従っている。それよりもあの幻術の種は見破ったか？」

「感知タイプの話によると瞳術のようです。」

「……ふむ。」

「おそらくは分身や変化の術を目にだけかけていたのではないかという。」

「そんな器用なことができるものか？」

「戦闘中でなければ私でも可能です。それを戦闘中でありながら維持するのは骨が折れますが……あくまで曲芸に近いものです。」

タネが割れていれどとうことはありませんよ。」

「…そうか。なんにせよ失敗は許さん。大丈夫か？」

「はい、大丈夫です。準備も含めて万全ですとも。」

と言いなからもくつくつと笑う暗部の男。

そしてその一言を最後に男は瞬身の術でいずこかへ消え去った。

「さて、次は…うちはイタチか。さきほどの二人と同じ班。この子もターゲットに…そのためにはできる限り手の内を見せてもらわないとな。」

ヨシミチは暗い笑みを浮かべて試験会場からイタチを呼びに行くのであった。

## イタチの力

「よろしくお願いします。」

「ああ、こちらこそよろしく頼むよ。」

と言って二人、向かい合うイタチとヨシミチ。

イタチは些か以上にワクワクしていた。

自身の修行の成果がどれだけ通用するかを試してみたいのと、他の里の技を見れるということに対する知的好奇心もまたあり、端的に言うところも落ち着きのない状態であった。

そんな心境でありながらも、そこはかたない違和感に気付いたのはイタチゆえだろうか。

これがほかの忍であれば、というより子供であれば気付かなかったであろうがイタチはその持前の繊細さで違和感を敏感に感じ取っていた。

それは手裏剣術を返され、ヨシミチの隠密性の高い風遁にタマモらと同じく気付いてすぐのことである。

イタチは自然にあることを考えていた。

『わがままを言わせてもらおう』と。

この試験は重ねていうが中忍の力量を持っているかの試験である。

それを示せた段階で試験を終了するべきであり、ほかの生徒たちの試験も残っているのだからしてきつと試験官は『これで十分だ。もう下がってもいい』という、ないしはそれらしい言葉を吐いて終わると思っていた。

それをわかりながらも自分の欲を、自分のしたいことを言うだけ言わせてもらおう。ダメもとで修行の相手：試験ではない。

自信の経験として、糧として修行を付けてもらおうという意識ですらあったのだ。

そも自分も、ヒビキやタマモも能力的にはすでに問題が無い。

合格するのは決定事項とまでは言わなくてもほぼ100パーセントに近いところとをイタチは客観的に自分たちの力量を見て、うぬぼれではなく自覚していた。

ゆえにどうせやるならただ流すだけでなく、時間を無駄にしないよう他里の技術というのを見て学ぶつもりで少しばかり楽しみですらあったのだ。

いや、彼の逸り具合からして少し、というのは語弊があるかもしれないが、ところがある。

目の前のヨシミチは戦闘態勢を解いていなかったのだ。

「…。」

都合のいいことは確かだし、大人げないワガママをあまり言いたくないと言う思いも確かにある。

わがままを言わないで済み、戦うことができる。

好都合だ。

だがおかしい。

てつきりここで十分だと判断し、切り上げると思っていただけに意表をつかれた。

試験官としての立場としてここにいる以上は彼の行動は悪手である。

少なくともその程度の判断ができない人間が上忍になれるわけがないし、間違っていると忘れているとか、そういう可能性は限りなく低いだろう。

「試験の結果はどうでしょうか？」

「なかなかのものだ。」

「これならば実技はほぼ満点だろう。安心するといい。」

「ありがとうございます。」

「それで？」

「この程度かな？」

「……っ。」

失言である。

彼の失言で気付く。

イタチは気取られないように、感知を行うことにする。

まずは煙玉を括り付けたクナイを投げつけ、煙玉を展開。

当然ながら風遁使いに通じるはずもなく、煙はすぐさま払われるが、煙玉で出来たわ

ずかな隙に写輪眼をめぐらせる。

さて、唐突だが写輪眼とはチャクラを目にすることができる目である。

チャクラにはいくつの特徴が存在し、その一つがある一定の電波を発生させるということだ。

というよりもチャクラそのものが電波の特徴を持つエネルギー体であり、ゆえに基本的にはただ垂れ流したチャクラが視覚化されることはない。

簡単に言ってしまうえばわずかなこの電波すらも写輪眼は見取れるということだ。

そしてこの電波は物をひどく貫通しやすいという高貫通性を備えている。

もとい、チャクラのコモったものはすべからく透けて見えるということだ。

原作において人の体のチャクラの流れを見て取ったり、サスケが地面に埋まったチャクラで作られた地雷などを見切っていた描写があつたが、それらの出来事は写輪眼がチャクラの放つ電波を見ていたのであつて、決して透けて見えていたわけではない。

写輪眼と似た系列にある瞳術である白眼は透視を可能とし、経絡系の細やかな形や内臓など、地雷であればそれそのものを見切れたはずである。

閑話休題。

つまり何が言いたいかと言えば写輪眼とは簡易的な感知忍術代わりになるといふことである。

もちろん写輪眼のこの能力にも限界や個人差はある。

電波は確かに高貫通性を誇るのだが、その発生距離はそこまででもない。

有効距離は約数十メートルがせいぜい。

その有効距離を超えて見切れることも写輪眼によつては可能だが、それでもほんのわずかに見えればいいという程度。

だが、この『試験に使う部屋』をぐるりと見渡す分にはほぼ問題なかった。

「…いるな。」

周りには点々とチャクラが存在していた。

明らかに不自然なチャクラである。

隠れるタイプの忍術を使っているのかその姿は視認しづらかったが、隠れるための忍術そのもののわずかなチャクラでさえもイタチの目には見えていた。そして、それで十



分である。

「どうした？」

逃げてばかりでは勝てないぞ？」

イタチは手裏剣術によつて四方八方からひたすら攻撃を加えていくが、体にまとう風遁によつて切り阻まれるだけだ。

イタチは数瞬考えた後、ここは「あえて」力を見せることにした。

「水遁、水龍弾の術。」

「質量で押しつぶす気かっ!？」

イタチはあえて水遁を使うことにした。

使つた術は水龍弾の術。

チャクラの消費量の割には威力が高く、発動しながらも操作し続けて相手に当てることのできる上に範囲も広い使い勝手が良い水遁である。

この術は風で切り抜けるほど軟な術ではないし、仮に斬り飛ばされても全ての水が消えうせるわけではない。

うねる龍をかたどる水塊がヨシミチに襲い掛かり、ヒットすると思われた瞬間、ヨシミチは一気に風遁を解放をする。

「風遁、真空放破っ!」

円周状に広がる風が龍を退けるが、そのまま龍は周りを囲み、とぐろも巻く。

この間もすさまじい水流と風速のつばぜり合いが起こるがどちらもいい勝負である。

「真つ向からの忍術勝負かつ!!」

面白い。」

「…。」

ヨシミチの周りには円形に噴き出す風と、そしてそれを押しつぶそうと巻きついて押しつぶそうとする激流の龍水。

数十秒の忍術によるつばぜり合いの勝者はヨシミチだった。

が。

「これはっ!?!」

術が切れる数瞬前に水の流れに任せて起爆札を混ぜ込みヨシミチの周りを囲んだらうというタイミングで術を解いたイタチ。

結果、いくつか混ぜた起爆札はヨシミチの周りで連鎖爆発を起こす。

凄まじい轟音にヨシミチの悲鳴は掻き消え、そこに残ったのは水陣壁で身を守ったイタチだけ。

ヨシミチはとほどころ、服が焼け焦げていた。

これですんだのは瞬時に風遁の効果が残っていたからだ。

もしもなければ大けがを負っていたかもしれない。

「あはは……見事だ。」

合格だよ、イタチ君。」

「ありがとうございます。」

「さて……これは興味本位の質問だから答えなくてもいいのだが……すごい練度の水遁だった。」

うちはは火遁がすごいと聞いたのだが……」

「俺は……いえ、私は火遁があまり得意ではないもので。」

「なるほど。」

ありがとうございます。それでは下がっていいよ。」

「失礼します。」

そして残ったヨシミチの背後に現れる男。

「どうでした？」

「素晴らしいと言うほかない。」

起爆札をただ混ぜただけなら気付いた。

しかし、彼は一部分だけ水の屈折を操っていた。」

「屈折を？」

「そうだ。」

光の屈折を利用して見づらくしていたようだ。

水に流れる起爆札に合わせて同じ位置を。」

「なるほど…：すばらしいチャクラコントロールをお持ちのようで。」

「データは？」

「大丈夫。万全ですよ。」

「そうか。ところで彼の言ったことは本当だと思うか？」

「火遁が得意でない？」

「ああ。」

「…おそらくは本当でしょうね。」

これほどの水遁の練度を9才でありながら持っているだけで素晴らしいを通り越しているのに…：こればかりやっていったというのなら辛うじて納得できるレベルです。

火遁は…：使えないということはないでしょうが、弱いでしょうね。」

「…そうだな、同じ見解だ。」

が…：」

「なにか？」

「いや…まさか、な。」

ふと感じた違和感をヨシミチはただの気のせいと断じて、切り捨てる。

「とりあえず、あとの連中もやって次の試験の準備に入るぞ。」

こうして秘密の密談は終わる。

☆ ☆ ☆

「どうだった？」

帰ってきたイタチに聞くヒビキに。

「加減した。」

とイタチは答える。

「…そう。」

「気付いたか？」

「…まあわかる。」

「だろうな。」

「で、なにしてきたの？」

「気になるのか？」

「…どうせイタチのことなんだから、なにかしらの“芽”は植えたんでしょ？」

「…ふっ、どうだかな。」

「あーっ！」

なんかイタチ君とヒビキちゃんがすっごく悪い顔して仲良く話してるっ!!

私も混ぜてよおっ!!」

「ついでに俺も混ぜてよおっ!!」

「タマモはおいで。」

シスイ上忍は来ないで。きもいです。」

「お、おまつ!!」

そのやり取りをみて軽く笑うイタチ。

「イタチも笑ってないで、俺を弁護しろよっ!？」

「ここはおちやめなシスイさんの茶目っ気を楽しむところだよっ!!」

「…シスイさん…俺も…アレだと思いました。」

「…えっ?」

まさかという顔のシスイ。

「イタチ君も思うって、そうとーだよね?」

「…え?」

とどめを刺されたかのように目を見開くシスイ。

タマモは天然にシスイの息の根を仕留めに行く。

「シスイ上忍のそれはサムいってことです。」

「…ぐすん。」

## 宿泊場までのお話

さてはて時計の針は進み、すべての下忍が試験を終えたころ。

早速の結果発表である。

「諸君、まずはご苦労様と言わせてもらおうか。

じらすようで申し訳ないが、あらかじめこれだけは言っておこう。

今回の試験の結果で悲嘆することはない。

合格した者は言うまでもないが、不合格でもそれは今の段階での話だ。

諦めずに修行を積みめば大半のものはいずれ合格できる。

君たちはまだまだ若く、可能性の塊なのだから。」

とそれっぽいことを言いつつ、締めくくられた試験はようやくと終わりを迎える。

それによって弛緩する空気と、浮つき、ざわつく会場。

無理もないという風に少しの間を置き、自然と収まるのを待つて試験官は言う。

「第二試験は砂漠における実地演習とする。

かなり実戦に近づけたものであり、死ぬかもしれないことを念頭に置いてくれ。

実戦に近づけるといふことで道具類は各自、自由に持ち込み可とする。」



その言葉によって一転。

会場は別の意味でざわついた。

それもそのはずだ。

今ここにいるのはピリピリとした戦後の空気を味わってはいいても、直接戦争に参加したもののや死体を見たものは少数派である。

下忍かつようやくも生えそろってきたというばかりのおぼこい彼らはその経験が無いのだ。

いずれ覚悟は必要だろうが、それは中忍になってからと思っていたものだった。が、それは遅い。

中忍になってからではなく、中忍になるうえで必要な覚悟なのである。

中忍ともなればそれなりに仕事を任せられるポジションにつくことが多くなる。

その中には当然人死にをしなくてはならないもの、犠牲が出ると分かかって受け入れなくてはならないものも少なからずある。

班の隊長となることもある。

ある、のだ。

ゆえに必要なこと。

「もちろん、棄権したいというのであれば承ろう。

また来年、最低でも死なない程度の力量を付けたと思つてからでも遅くはない。

一晚、時間を与える。

受けないならばそのまま帰つてもらつて結構。

受ける気があるのであれば当初の予定通り、試験会場に来ると言い。

重ねて言う。死んだとしても自己責任だ。ゆつくりと考えてみるがいい。

では、解散。

…ああ、それと木の葉からの忍たちには宿泊場を用意している。

すでに君たちの担当上忍に場所は知らせてあるから宿泊場で療養するのもいいだろう。」

そのあとは合格したものの名前が張り出されて、各々が一喜一憂し、そして時間は過ぎて行つた。

もちろんヒビキ達は合格である。

「ええとこのあたりですよね。シスイさん。」

「いや、ここはこうじゃないですか？」

「ああ、確かに。」

などと若干迷っている上忍の背を眺めながら木の葉の合格者はみな、同じ宿らしくみんなで修学旅行よろしく仲良く歩いていった。

総勢16名。

合格した班が四つ。

班はスリーマンセルが基本なので、12人の合格者にそれぞれ担当をする上忍が四人と言ふことである。

「なんかうきうきするね。」

「…気を抜きすぎないようにね。」

「うん！」

皆仲良く歩いていることに、ピクニック気分でも味わっているのかタマモは明日に生死がかかった戦いがあるにもかかわらず、のんきなことを言っている。

彼女は意外と大物なのかもしれない。

「…面白い街並みだな。砂が入ってこないように風の流れを堰き止めるように建物が計算されて建てられている。」

それでいて景観を損ねていない。恐れ入る。」

それはこつちのセリフである。

10歳前後の子供の視点ではない。全く持つて末恐ろしい。言わずもがな、この言葉の主はイタチである。

「ふん、のんきなものだな。」

少し血統に恵まれただけで、それほどの余裕とは。慢心は死を招くぞ。」

と、ぼそりと嫌味に言ったのは一次試験の体術の試験に行く前に軽く突つかかってきた日向の男である。

年齢は約13、4歳ほどに見える。

長髪が多い日向にしては短く切りそろえられた短髪が特徴的である。

若干、女顔に見えることから、女の子の間違われないように、嫌って長髪を切っているのかもしれないと邪推しつつ。

「日向も恵まれた血統じゃない。何を言ってるの？ばかなの？ばかでしょ？このバカナグ。」

「…俺の名前はカナグだ。」

じゃなくて、ウンテンっ！お前はどっちの味方だっ!？」

「立場的にはカナグの味方だけどさあ…心情的にはあっちについてあげたいかなあ。」

「うらぎるのかっ!？」

「…つまらない挑発をするちんまい男と、あんたの安っぽい挑発を受けない子供ながらに立派な彼ら。どっちに味方したいかなんて、決まってるでしょう?」

「…ぐっ…」

「自覚あるなら直しなよ。かつこわるいから。」

「…ふんっ！」

といつてカナグは列の先頭へと早歩きで行ってしまった。

「ごめんねえ、あいつ馬鹿でさ。」

ちよつと意地っ張りなだけで根は悪くないんだ。できれば大目に見てほしいななんて…」

と言うのはウンテンと呼ばれた少女。

右の方に長い髪を団子にして纏め、中華風の服を着る少女だった。

やはり歳はカナグと同じく13、4歳ほどの女の子である。

その笑顔には彼女の生来の明るさが見て取れた気がした。

「…あんまり気にしてないので。」

「…ヒビキちゃんが言うなら私も！」

「いざれ手合せしたいものだな。」

と、それぞれ好き勝手なことを言う。

誰一人相手にしてなかった様子を見て、ウンテンはあららと苦笑する。

「こうなつてくるとさすがにカナグが可哀そうかも。」

…まあ、気にしてなかったようでは何より。

それにしても君たちはあれだよな？

アカデミーを卒業間もない班としては過去最高の班として名高いシスイ班でしょ？  
やっぱりシスイ先生の指導がいいから？」

と雑談に入る。

「…いえ、私の師匠はガイ上忍です。」

「私も！」

「俺は父上から教わっている。」

「え？」

彼女の質問の答えとしてはシスイが、というよりは事前に積んできた修行の下地故、と答えるのが自然な気がした。

もちろんシスイから学ぶことも多々ある。

しかしそれよりもシスイは班を管理する上忍と言うより、あのちゃらんぼらんな感じから班のお兄ちゃん、ならぬお忍ちゃん（？）のような感覚と言った方が良い。

面倒見のいい親戚のお兄ちゃんと言う感じだろうか。

出来てないこと、失敗したことをその都度フォローを入れる程度である。

その失敗などの頻度が少ないこともあり、本人はこの程度じゃ役に立っていないと嘆いているようだが、それでも彼ら三人にとってそのフォローは的確で、また学ぶところ

も多い。

もちろん三人とも本人にそのことを伝えたことはないが。

伝えたら最後、調子に乗りまくってうざいに決まっているからである。

「ガイ上忍つてあの変態じみた格好の？」

と、ウンテンの驚くところはマイト・ガイに教わっているということだったらしい。

そして仮にも他の忍者の師匠を悪くいったということですぐさま頭を下げるあたり、礼儀正しい子なのだろう。

「あ、ごめんね。」

悪くいうつもりは無くって……えつと、その……ほら、見た目が個性的だから。」

確かに個性的である。

ちなみにガイはその見た目から忍者学校における卒業後の担当上忍にしたくない忍者ベストナンバーワンとされている。

そのことからシスイと言う見た目だけならばイケメンで、他里にも知られている優秀な忍者の教えを蹴つてまでガイに教わろうとすることに驚いたのだ。

だが、これは何ら不思議なことではない。

ハツキリ言ってしまうとイタチとヒビキにおいては教師やその個人の資質と修行に對する意思の強さから今の時点で十分に一人前のうちは並みの技量は持っており、忍術

も幻術もそのやり方を示した書物さえ読めば、あとは自前の理解力とセンスでほとんどマスターできるもの。

心構えなどもイタチは言わずもがな、しかも父親からも仕込まれているということでも問題なし。

ヒビキも前世の記憶があるがゆえの成熟した精神で周りの人間を見て学び取っている。

そもそもが相手のチャクラの流れや動きなどを見切れる写輪眼を持っているがために見ればだいたいのことは分かるし、身体能力が許す限りの模倣も可能と来ている。

ハッキリ言つてわざわざ教わることがないのだ。

もちろんさきほどから言っている通り皆無と言うわけではないが、注意される前に自ら欠点を洗い直し改善するだけの器量すらある二人に教えられることはごくごく限られている。

その限られた指摘…すなわちこの二人ですら気づかぬ欠点を見つけ、指摘するシスイの技量もまたすごいということになるが。

そしてタマモに至っては忍術においては並みのうちはどころか、下手をすれば忍者学校にいたる生徒に負けるほどに不得手である。

その程度の才能しかないのであれば、苦手分野を克服するよりも別のーたとえばチャ



クラによる木登りなどの忍者における基本技術はもちろんのこと、自分の取り柄である八門遁甲のコントロール、そしてそれによる恩恵を十二分に発揮できるための体作りや体術の修行。

自らの長所を短所を補うレベルで特化させるとというのが今のタマモである。

そしてそれらはシスイよりもガイの方が教師として優れているという単純な理屈だ。

「…ガイ上忍は教師としても優秀だよ。」

なんだかんだで世話になつてるガイのフォロー位はすべきだろうとヒビキは口を開いた。

そしてそれにタマモも笑顔で追随する。

「うん。確かに。」

今では私、超強いもん。ヒビキちゃんやイタチ君に勝てるくらいに。」

「へえ、そうなんだ…え？」

にこにことして言うタマモにウンテンもまたつられてにこにこ、流れに任せてうなずくところであつと振り向き、タマモの顔を見る。

この中では一番ぼわぼわとして弱そうに見える彼女が最強だという情報を聞いて少し驚いたのだ。

「…まあ確かに。」

「そうだな。だが、タマモ。彼女たちも一応はライバルだ。

あまり手の内を明かすのは感心しないな。」

ヒビキはただ認め、イタチは彼女がこれから先もう少し警戒心を持つように、たとえ同じ里の仲間であろうと競う以上は油断はしないようにと彼女のことを思つて諫めた。それに対してヒビキも付け加える。

「タマモ、油断はダメだよ。

最近強くなつて浮かれて来てる気がする。一度気を引き締めて。」

「……う……ごめんささい。」

「…分かればいいよ。」

と言つてヒビキはタマモの頭をなでる。

それに嬉しそうにはにかむタマモ。

彼女の発言を聞いて分かった。

どうやら最近力がついてきて、少々油断が過ぎていたようだ。

先ほどからの樂觀的な雰囲気も大物だからとか馬鹿だからとかではなく、力がついて安心や自信もまた付随してきたからに他ならない。

自信や安心は過ぎれば慢心となる。

ちなみに強いというのはもちろん八門遁甲を使った場合である。

もとい自身の体を顧みずに本気を出した場合の話だ。

どうもヒビキの後をついていくばかりの彼女に一度、自信をつけさせてやりたいと考えた結果、ガイ上忍立会いの下、本気の組手をした事があった。

イタチも交えて。

それが先のタママモが言った結果である。

「おーいっ、ついたぞ、お前ら。」

そんな話をしていると宿泊場についたようである。

## カナグという忍

「それでは試験を始める。」

集まった参加者は54名。

サバイバル試験に合格した人間はほとんど参加することとなった。

ただ木の葉の忍は半分に減っている。おそらくは“気付かなかつた”下忍達はそれぞれの担当上忍に行くことを許可されなかつたのだらうと考え、その現状を見ながらも視線はめぐり、日向の少年、カナグは見つめる。

その視線の先にはヒビキ達が出た。

「なに？」

まだ根に持つてるの？

むしろ気付けて良かったじゃない。」

「そうだよ、カナグ。逆恨みはみつともないよ。」

「…分かっているさ。単に悔しいだけだ。」

あいつらよりは絶対に先にこの試験を終わらせる。いいな？」

「分かっているって。皆さんさん聞いたし。」

「つたく、君はいいだろうけど僕まで付き合わされるのは勘弁だよ。」

「キノ、お前はいつもテンションが低いと…」

「分かつてる分かつてる。」

あ、でも、僕の女神に何かしたら殺すから。具体的にはチンピラみたいに絡んだり。」

「チ、チンピラとはなんだっ!!」

そして女神だどっ?!?さらに言えば殺すってなんだよっ!?!」

「最初の出会いがしらに、吹っかけてたじゃない。」

「ウンテンっ!」

お前はどっちの味方だっ!?!」

「キノよ。」

「ぐっ!」

カナグは忍具を扱うウンテンと、そしてヒビキ達と絡んではたまたまいない状態で、宿泊場に行こうとしていた時はスイと一緒に地図とにらめっこしていたカナグの班で再度の一人、男の子であるキノといた。

害虫をかみつぶしたような表情のカナグがまたもヒビキ達を敵視しているのには理由がある。

それは昨日の宿泊場にて、夕方のことである。

試験が終わって少ししてカナグの班は外に出て少しだけ砂の里の様子を見たいとなり、もとい観光をしたいがために担当上忍に許可を得て、そして帰ってくるよきの廊下での出来事。

カナグたちの目の前にはちようど外出をしようとするヒビキ達がいた。

もちろんカナグはウンテンにも言われたことだし、かといつて仲良くしようとも思えず無視して通り過ぎようと思つたのだが、やはりどこか彼は絡まずにはいられない性分だつたのだろう。

相手にされてないがために年ごろの男の子特有のかっこつけたい欲求、すなわちプライドのためか。

呑気に笑いながらヒビキと話すタマモと、それに無表情ながらもどこもどく柔らかない雰囲気で聞いている二人に老婆心というか、単に絡むきつけかけが欲しかつたのか。

彼は彼女たちに今更観光か？

と聞く。

時刻は夕方である。

観光をするにも時間はなく、それなら良いところを教えてやろうと、内心上から目線で声をかけたところ違うと言われたのだ。

ではどこへいくとの問いかけに。

「砂漠での必需品の買い出し。」

「何？」

「必要でしょ？」

何を当たり前のことを？と言う風な顔でヒビキに言われるカナグ。そのためか答えもまた簡潔である。

そこで頭は悪くない彼の脳裏に閃光が走る。

一晩。

そう、カナグにはどこか違和感があった。

一晩と言う時間に。

あの試験官はトイレに行くかと聞いておいて、行くと言った生徒を失格にするという嫌な奴である。良く言えば厳しい試験官だ。

それが一晩？

一晩もの休みを与えるだろうか？

忍たる者、日をまたぐ任務なんてざらにあるし休憩が取れずに動き続けなくてはならないことだって多々あるはず。

さらには死ぬ覚悟、ないしは殺す覚悟に対する問いもまた必要なかったはずである。

迷った奴は失格だとかそれくらい言ってもいい、というかそれはカナグ自身も思った

ところで今更そんなことを聞く必要があるとも思えなかった。

中忍ともなれば小隊を率いることもできる立場だ。命を背負う立場だ。それくらいは下忍ですら知っている。

そんな覚悟も無しに来る下忍がいるのだろうか？

逆にそんな最低限の覚悟すらない人間が中忍試験に来るなと言う話で…。

だがそれでは、かの試験官が与えた一晚と言う時間が意味のない、そして意味のないことをするような人間には…と考えたところで彼は気付いたのだった。

一晚の意味が。

どうりで担当上忍が感心した様子で送り出したわけだ。

きつと砂漠用の装備を買いに行ったのだと思ったのだ。

「…行つていい？」

という言葉に彼は答えられず、代わりにキノが答えた。

「大丈夫大丈夫。」

それよりも君、可愛いよね。名前は何かな？

その、僕とお手紙のやり取りから…」

「…キノ…あんだ…」

ウンテンが日ごろのんびりとしたキノに驚いた表情をする。



キノはヒビキから目を離さない。

「ごめん、ユンテン。僕は本気なんだ。邪魔しないでくれ…で、まずはお友達から…」  
「…悪いけど、興味ない。」

と言つてそのままヒビキは翻えり、歩き去つていく。

それにあわててついていくタマモに、きれいな会釈をしてからこれまた翻るイタチ。それらを見ることなくカナグはうつむいていた。

内心は『負けた』である。

自分の率いる班は彼らに負けた。

ヒビキは中身の精神年齢上、準備をして向かうというのは当然のことです。そこまで深く見通したわけではない、それを踏まえていたのはイタチだけであり正確にはイタチに負けたとすべきなのだが、カナグにはそれが分からない。

ゆえにちよつとむかつくことを言われたヒビキだけではなく班全体を改めて見るカナグ。

その胸中ではもはや見下しなど欠片もなかった。

「ユンテン。買いに行くぞ。」

「…っはいはい。」

まったく、どうしてこの班って面倒くさい男ばかりなの？」

ぼやくユンテン。

目をキラキラさせながらも後姿も可憐だとつぶやくキノ。  
そして今度こそはと熱き血潮をたぎらせるカナグ。

そう、彼はそのクールな雰囲気にして激情家であった。

☆ ☆ ☆

「そう、願っていた俺がまさかこんな早くに脱落するとはな。」

場所は砂漠。

試験会場。

サバイバルが始まって初日の夜のことである。

準備しただけあって防寒具の準備は万全だった。

しかし、その防寒具も戦いによる余波でボロボロとなっており、今や寒風の一つも防いでくれなかった。

カナグの白眼には2人の男。

そしてカナグの背後には倒れる二人の仲間。

「ぐっ……」

「こんなところで……僕は……女神に告白もしてないのに……」

その傷の見た目に反してまだ余裕はありそうだが、それでも放っておけるほど浅くはない。

なによりも砂漠は朝と昼の寒暖差が激しく、今は氷点下まで落ち込んでおり、なおさら放ってはおけなかった。

「さて、貴様らは誰だ？」

下忍ではないな？

いくらなんでも強すぎる。」

「自己紹介かあ……どうしよう？」

甚八、君からする？」

「なんで俺からなんだ？」

……まあ構わないが……俺の名は」

「あ、僕の名前は鬼灯満月って言うんだ。よろしくね。」

「……おい。」

「あははははっ、ごめんごめん。怒るなよ……あつ」

おちよくつた態度に少しばかり腹を立てた甚八と呼ばれた男が振るつた大きな剣。それに触れた鬼灯満月が爆発してはじけ飛ぶ。

「……っ……っ!!？」

それに瞠目し、ただ困惑することしかできないカナグ。それもそうだ。

一見ただのじゃれ合いにしか見えないのに、まさかこうまで簡単に、そして仮にも敵である自分を前にして仲間を殺すとは、誰も予想は出来ない。

しかし、カナグの驚きはそれだけではない。

「…なにが…?!」

目の前で飛び散った体液のようなものがチャクラを放ったかと思うとそのまま集合し、合体して人型となり、鬼灯満月と名乗る男が現れる。

カナグにはもう訳が分からなかった。

「おっと、ごめんね、驚かせちゃったか。」

とりあえずさ。僕たちには目的があつて、それが君の目。そして写輪眼なんだよね。」

「…何?」

「任務つてことさ。大人にはいろいろあるんだぜ、少年。覚えておきな。」

とウインクしておちやらける満月。

「それはそれとして、河豚鬼（フグキ）はまだなの?」

「肉まんを買つてから来るだよ。」

「いくらヒョっこ相手だからって舐めすぎでしょ。仮にもこれ、お仕事だぜ?」

来たらとりあえず何も言わずに斬りかかってやろう。

ぶーぶー鳴くだろうぜ、あのデブ。」

「あれは筋肉だと思うが。よってデブじゃないと思う。」

「甚八、前から言ってるでしょ。」

まじめ過ぎ。もつと適当に生きて、適当に殺して、適当に死んで、そして適当に生き返る。

これが忍の本懐ってやつだと思うよ、ほんと。いや、正確には死んでないし、生き返ってるように見えるだけだけだ。」

「そんなのはお前だけだ、異常者が。」

「ハッキリ言うなよお、シヨックで殺しちやいそうだ。あの少年を……と見せかけてあの少年が守ってる仲間二人を。」

「いや、そこは俺にしてやれよ。」

「やだ、つまんないもん。」

と言つていじけたふりをする満月。

「……ま、冗談はさておき。」

「どこからどこまでが？」

「とりあえず河豚鬼にリバーブローを食らわせるのは本当。」

「…斬りかかるんじゃないやなかったのか？」

「で、少年。」

作戦タイムは終わりだぜ？

せいぜい頑張って逃げ惑ってくれ。」

そういつて瞬身の術でカナグの背後に回る満月。

あまりの速さに一瞬見失ったが、360度見ることができて透視のできる白眼ならば一瞬程度のミスはカバーできる。

腕をまるで刃のように鋭くした満月の攻撃を身をかがめて避け、そのまま柔拳を叩き込む。

が。

「さっきから言ってるだろう？」

僕にチャクラに働きかける系の術は通用しないぜ。

特に柔拳なんてのは。」

と言つて余裕で受ける満月。

その態度は完全に格下に対するものであり、そして防御すらしない傲慢さである。さらには反撃できるタイミングであるにもかかわらず、それをしない。

「一応聞くが、俺が降伏し目を渡した場合、仲間二人の命は保証してくれるのか？」

俺が目的と言うのは、この眼が欲しいのだろうか？」

「ないね。」

だつて、これ、極秘任務だぜ？

仮に大人しく両眼を差し出されても知られちゃならないものだし。」

「そうか。ならばやることは変わらん。」

木の葉にて日向は最強。

柔拳が通じぬ”程度”で攻撃手段が無いとでも思ったのか？」

そういつた瞬間、カナグの手のひらから高圧縮されたチャクラが撃ち出される。

「っ!？」

「八卦っ!」

破山撃っ!!」

凄まじい轟音と共に周りの砂が吹き飛び、大きな射出痕があたりに残る。

もちろん満月は吹き飛ばはずだ。

いや、手ごたえから察するに死んでいる可能性すらある。

だが、過信はしない。

先ほどの様子から純粹な物理的なものならば無理でも純粹なチャクラによるチャク

ラ砲撃ならばどうかと思つたまでだ。

それが無くてもまた生き返るかもしれない。

ゆえに今のうちだとばかりに仲間を二人抱えて回収し、逃げ出そうとしたところで満月が目の前に立っていた。

「ちっ!？」

わずかな時間は稼げると思ったのだが。

甚八がいても彼との距離は離れている。相手が油断しているうちにと思ってもそれらの考えは一切が無駄であった。

「んん〜なかなか素晴らしい一撃だったよ。

なんなら生かしてあげたいくらいだ。ま、嘘だけど。生かす理由がないよね？」

と言って彼の振るう腕の先には回転する水をまとった拳。

「か、回天っ!!」

ある種の絶対防御である日向伝統の防御術。

回天。

それにあたるのは同じく回転している水の塊だ。

ただ回転している水をまとった拳。

それだけなのに、それだけのはずなのにその拳は徐々に回天の勢いを削り、カナグにヒットする。



「ぐあああああつ!!」

そして倒れたカナグは頭を踏みつけられ固定、そのまま目に何かが入る感触とともに  
激痛。

「つつつつつつつ——!?!」

あまりの激痛に目を抑え、そしてどろりと流れる血。

手で抑えたがために見えない左目の代わりに残る右目で見たのは満月の右手にある  
自身のものだと思われる”ソレ”である。

”ソレ”は満月の手から滲み出した水で保護され、まるで小さな水牢の術に捕らわれ  
ている様だ。

そして閉じていても、手で押さええていても見えていたはずの風景が、左目が見えない。  
それが意味することは。

”ソレ”を…俺のをつ!!”ソレ”は俺の、父上や母上の…誇りだ…日向の…日向の…  
誇りを…かえせええええええええええええええつ!!」

チャクラが視覚化できるほどの圧縮された柔拳を繰り出すも、その拳は

「おつとじゃあ、返してあげよう。」

自然に出された自身の”ソレ”が盾になったことで止めざるを得ず、そして止まった  
ところで再度重い拳を受けて数百メートル飛ばされた。

「いほつ。」

血反吐を吐きながらもカナグは立ち上がる。

ここで自分が死ねば自分の誇りは、父や母が誇ってくれていた自分のソレが永遠に失われる。

どころかこんな輩に好きにされている。

それがどうにも許せなかった。

なによりも、仲間二人の命まで危ない。

だが、最早絶体絶命。

諦めないことは美徳だが、今下手に逆らうのは下策。

そして、彼はあきらめなかった。

諦めなかったがゆえに彼は選択した。

「なんのつもりだい？」

土下座と言う選択を。

「俺の目ならいくらでもやる。

だから……だから頼む。

あいつらの命までは取らないでやってくれ。」

血だらけになりながら、今にも倒れて気絶してしまいそうな意識を必死につなぎとめ

ながらも、彼は選択した。

ただ死ぬことをあきらめずに、せめて仲間の命だけは助かるようにどうすればいいかを考え、プライドもヒビキ達に対するリベンジに対する思いも、父や母に誇っていた自分の強さも何もかもかなぐり捨てて、みつともなくも泣きながらに懇願した。

「…はあ、まったくこっちは殺人鬼ってわけじゃないんだぜ？」

勘違いしてるよ少年。

忍だつて人間だ。」

「…ならっ!？」

「ああ、人間つてのは結局一人では生きていけないもんさ。

調子乗つて抜け忍になったは良いものの、もう、霧隠れの里の快適さたるやね。

抜けて後悔したというか、抜け忍になった今じゃ色々金が無いと困っちゃうわけ

で、確実にこの仕事はこなしたいわけよ。

だから悪いな、殺させてもらうよ。」

「…っ!？」

要領を得ない満月の言葉に希望が湧いたが、それは変わらず絶望への宣告だった。

「なあに、少年。

そんだけまっすぐな心もってりゃ天国に行けるさ。」

安心して逝きな。月並みで、チンピラっぽい言葉だから好きじゃないんだけどお仲間もすぐに送ってやるよ。」

と言つて満月は刃に変えた腕を振るう。

その一撃は今までの遊び半分とは違い、達人が振るう一撃のように鋭く咄嗟に反応しようとしたカナグは為すすべもなく斬り捨てられるところで満月は飛び去った。

カナグの目の前に突つ立つ電気をまとうクナイがあつた。これを避けたためだと思われる。

「誰だよ？」

男がかつけえ死に様さらすところで無粋な真似するのはさあ。

僕、おこつちやうぜ？」

「ふざけた奴。」

その一言と共にカナグの目の前にはここ数日のうちに目に焼き付けた後姿が目に入る。

「雷遁の特訓しておいてよかつた。」

うちはヒビキの背中が大きく見えた。

## 一方、ヒビキ達は

さて、今回の砂漠におけるサバイバル演習。

合格条件は以下のとおりである。

参加者が半数以下になった段階で砂漠を超えた先にあるゴール地点にいることである。

簡単なようでいて、難しい。

参加者が半数以下と言うのがこれまたえぐい。

「いつ半数以下になるのか？」

「半数にならない場合においてどういった対応を強いられるのか」

「半数以下になった段階でゴール地点にいないてはならない」

というのがキモである。

砂漠踏破自体は別にむずかしくはない。

仮にも忍であるし、この世界の忍はチャクラと言う摩訶不思議物質でたとえ砂漠と言う過酷な環境であろうとも飲み食い無しで半日くらいは余裕綽々で動けるのだ。

何よりも忍術と言う魔法みたいな力もあり、水遁術を使うだけで生命活動における重

要アイテム、水が簡単に手に入るためになおのこと。

地球でいうならば砂漠で一日、生き残るのは至難の業であるのだが。

しかし、砂漠も戦闘を前提とした踏破ともなれば事情は変わる。

半数以下になってなければならぬ。というのは逆に言えば誰かが必ず戦わなくてはならないということであり、またどこかに隠れて様子見をしているというのも悪手である。

チャクラと言うのは無から生み出されるものではない。

ただでさえ過酷な自然環境において、精神エネルギーと身体エネルギーを同時に使うチャクラを扱うことそれすなわち、体力消耗を加速度的にアップさせる。

隠れて待つというのは厳しい選択だろうし、ゴールにいなければ合格になりえないということもある。

「いの一番にゴールして良い場所を確認しつつ、漁夫の利を得るのが吉だな。」  
とイタチが言う。

道中で人を減らし続けるのは途中で半数以下と言う条件を満たしかねないし、かといってゴールで待ち続けていても半数以下になってゴール地点にいるものという条件の都合上、せいぜい二日。遅くて三日目くらいには誰もが「まだ半数以下ではない」と気付き、そこでのバトルロワイヤルが始まりかねない。

どこに誰が潜伏していて、自分たちは隠れているのか、攻撃するにしてもほかの班をどうするかを考えながらの攻撃にしなければならぬ。

あまり強いところを見せればほかの班からの共同戦線による同時攻撃を受けるなど言うこともありえる。

また、逆に強者同士が組み、より合格を盤石のものとするという手もあり様々な手段が予想できる。

ゴール地点とは名ばかりの、魔窟である。

地図にはゴール地点とあるがそういったことを考えてか、ゴール地点はやたらと広い範囲だ。

はじめからそうしたことを念頭にしている気がする。

馬鹿では務まらないし、頭でっかちでも合格は難しい。

そういう試験である。

またそうしたゴール地点付近での潜伏が長ければ砂漠と言う環境で体力を消耗していき、どんどんと思慮を削られていく。

なかなかどうして考えられていた。

イタチが言うように道中では極力無駄な戦闘は避けて、真つ先にゴール地点付近の探索をして有利なポジションやら潜伏するであろう場所の確認をするのが無難。



「道中有利であろう、砂隠れを倒すのもまた手だが……」  
とさらに続けてイタチは言う。

確かに砂隠れの下忍たちは木の葉の忍に比べてあらゆる点で有利である。

自分たちの土地であること。

砂漠の生き方が分かっているであろうこと。

こうしたことに対して試験前に木の葉の一人の下忍が不平を唱えたが、即座に却下。不利な状況と言うのはいくらでもあるし、そうした状況を覆ってこそ忍、である。

それが分かっていた木の葉の上忍たちはむしろいい経験でラツキーだと思っている。

「……なんかそうしたくなさそうだね、イタチ君。」

と、タマモ。

「別にそんなことはない。」

真顔で答えるイタチ。

だが付き合いの長いタマモやヒビキは概ねが分かっていた。

どうせならゴール地点での緊迫した潜伏合戦がしたいと思っっている。と。

あとは単にそこまでして倒すほどの理由がないというまっとうなこともちろん考えているだろうが。

「……」

そして付き合いのながいイタチもまた気付いていた。

二人が自分の今の言葉を信じてないということ。

それなら無理に隠す必要もないわけで。

「これもいい経験になるだろう。」

お前たちのためでもある。」

と言つて、締めくくつた。

その顔はすぐに振り返つていたために見えない。

☆ ☆ ☆

「っ!？」

初めに気付いたのは簡易とは言えども写輪眼ではない感知忍術を会得していたヒビキである。

次に気付いたのはヒビキと大抵一緒にいるタマモ、そしてイタチだ。

「これは…」

一瞬である。

一瞬であるし、簡易でしかない感知にかかる、それだけで十分にわかるほどに洗練されたチャクラを持つ忍のチャクラがここから五時の方向で感じられた。

もちろんヒビキとしてはすでに会場にいた忍達に対してこつそりと感知や、常に展開

している黒いカラーコンタクトの下にある写輪眼で概ねの技量は把握していたつもりである。

隠していたにせよ、技術的なものともかくチャクラ的な意味では、これほどのチャクラを持つ忍はいなかったはずだ。

自分の見立てを疑ったが、今のヒビキの写輪眼は下手なうちはよりもより多くの事象を見抜けるほどには習熟していた。

そしてサバイバル前の模擬戦のような試験時に潜伏していた複数の忍のことを考えると、いよいよキナ臭くなってきたことを心身ともにはつきりと自覚する。

「……どうする？」

イタチが一見いつもと変わらぬ様子で聞く。

が、雰囲気はぴりついていた。

イタチも何かしら普通ではないことは気付いていたし、どこかで何かが起きるとは考えていた。

ゆえに彼は聞いた。

この脅威を確かめるべきか、ただただ逃げるべきか。

確かめに行くというのも一理あるし、また、君子危うきになんとかと言うように近づかないというのもまた一理だ。

情報は武器である。

仮に会場内の下忍だったとしても、また何がしかの企みであってもこれほどの力を持つ存在であれば情報をわずかでも集めておきたいのは当然であるし、しかしその一方でそこそこの距離にもかかわらずヒビキの未熟な感知忍術にも引つかかるほどの強者に近づきたくないというのもまた当然だ。

「イタチくんはどう思うの？」

タマモもこの二人に鍛えられているためかそれくらいのこととは分かった。

しかしそこまでであり、どちらを選ぶべきかまでは判断が付かない。

「俺は見に行くべきだと考えている。」

ノーリスクノーリターンで得られるものなんてたかが知れているしな。」

つまりリスクを払い、リターンを得ようという考えだ。

ここで逃げてもいいが、それでは何の情報もなしにこの相手と戦わなくてはならない。

それであるなら、何がしかの獲物を捕らえようとしている、または捕えているであろうほんのわずかでも周りへの注意が散漫している可能性がある今が好機と判断してのことだ。

ただ口にはしなかったものの、自分ならばこの相手とも渡り合えるという慢心ではな

く自信があつたし、たとえ襲われているのが砂の里の下忍とは言えども助けられる分には助けたいとも考えていた。

これらの考えはヒビキも同じであり。

そして彼らが目にしたものは蹂躪されたカナグの班であつた。

もちろんすぐには出て行かずに、彼らと相手の二人組の情報を収集しつつ、ぎりぎりまで待った。

これは試験のライバルを蹴落とすためではなく、相手の技量を鑑みての措置だ。

「…身のこなしから察するに、下手な上忍では相手にならないレベルだな。」

というイタチの言葉にヒビキは冷淡に。

「よく食らいついているというところ。」

と言う。

それに対してハラハラしながらヒビキとイタチを交互に見るタマモ。

「早く助けないの!?!」と目で言っていた。

「極力動きを見たい。タマモもほら、写輪眼でしっかりと見ておいて。」

「う、うん。」

助けに行つて一緒に殺されましたでは笑い話にもならない。

彼らには悪いが命のぎりぎりまで耐えてもらうことにする。

「日向カナグだっけ。彼の柔拳がまるで聞いてないように見える。」

「えと、私にはなんかあの人のチャクラ自体が変に見える…なんか水…っぽい？」

「柔拳はチャクラを送り込んで直接、内臓や経絡系にダメージを与える技だ。」

彼の体は水化しているから…おそらくは傷ついた経絡系や内臓をいったん水化させて、また再構成しているんだろう。」

そうした話し合いと見学を続けつつもこれで命が終わるとカナグが観念したとき、ヒビキ達は飛び出した。

カナグたちの命を、目の前の格上を下すために。

「誰だよ？」

男がかつけえ死に様さらすところで無粋な真似をするのはさあ。

僕、おこっちやうぜ？」

「雷遁の特訓しておいてよかった。」

うちはヒビキにとっての死線がここにあった。

## 激突

カナグたちの戦いを見ながら、そしてヒビキ達は対策を考えていた。

それにもなった作戦を相談してから現れたためにその動きはなめらかで迷いが無い。

「火遁っ！」

豪火球の術っ!!」

まずはタマモの牽制。

当然、満月と甚八は避ける、までもなく爆刀・飛沫によつて斬り飛ばした。

爆風に紛れて四つの人影が舞い出る。

ヒビキとイタチの影分身である。

お互いに二人分づつ、ヒビキは満月を、イタチは甚八を相手取るように分身による挟撃をした。

だが、それは満月の体から突き出た針のような水によつて貫かれて消え去った。

「こんなもんかい？」

ひよっこども。」

「まさか。」

というヒビキの声に反応したのは地面である。

「っ!？」

「土遁、瓦割」

瓦割された瓦のように地面が避け、そして中心に向かってくぼみ落ちていく。

足元が崩れ、飛び上がろうとするも：

「くっ!？」

正確無比なイタチのクナイ術による牽制によって動きが一瞬鈍った。

水化の術によってダメージは受けねど、衝撃を受け流せるわけではない満月も同様である。

そしてヒビキにとってはその一瞬で十分だ。

「土遁、土牢堂無」

土遁による結界忍術の一種であり、術者のチャクラと結界内に閉じ込められた者のチャクラを使用して中から出ようとして結界に付けた傷を瞬時に回復させることができる土遁術における拘束術の一種である。

もちろん彼らほどの忍ともなればせいぜい数秒から長くて数十秒の時間拘束するだけで終わる。



しかし、その少しの間で十分だ。

イタチとタマモによる火遁豪火球が、土牢の目の前、直下に空いた穴へと吸い込まれるように撃ち出される。

そして撃ち出された豪火球は土牢の中へとつながっている穴へと送り込まれ、当然のことながら中は灼熱地獄で生きながらに業火に焼かれるのだ。

「合体忍術。蒸し直火焼き。」

と無表情で言う。蒸すにしては火力がおかしいのだが。

「もう少しなんとかあると思う。」

と苦笑するタマモである。

そのタマモに釘をさすのはイタチだった。

「気を抜くな。」

おそらくまだだ。

奇妙なほどに静か……つやはりかつ!？」

悲鳴、ないしは肉の焼ける音位は聞こえても良い筈なのに、土牢の中からは奇妙なほどに何も聞こえず、ただ豪火球の猛る音が響くのみ。

不自然にもほごがある。

そのイタチの懸念はあっており、土牢は破壊されるが、しかし“爆発”した。

この合体忍術は破られることも踏まえた二段構えの忍術である。

まずはヒビキによる土牢堂無によって閉じ込め、そこで火遁を送り込み、熱を逃さずに瞬時に中の敵を焼き殺す。が、それが成るまでに破られたとしても問題はない。

なぜなら中の酸素は豪火球によって消費されており、たとえ数秒と言えども中で消費された酸素は莫大。

もといそこへ中の敵がどうにかして出てこれたとしても、くすぶった火へ一気に酸素が送り込まれ、それこそ爆発する勢いで燃え上がる。

現実にも火事場であるバックドラフト現象と呼ばれるものだ。

しかしそんな二段構えの強力な忍術は通用しなかったようである。

「いやはや、さすがの僕もちつとばかし死ぬかと思つたぜえ……ちいとだけどもな。」

「油断し過ぎだ。たわけ。」

「はあ？」

僕のおかげで助かっておいて、それはちよつと言いくさ悪くないですか？」

「もともとお前が様子見で遊ぶというから付き合つてやったままだ。」

俺を守るのは当然の義務だろう。」

甚八の体にはスライム状の水が覆っていた。

そしてそれらは長く伸びた満月の腕へと吸い込まれていく。

今ので欠片もダメージが与えられてないとなると……

次は彼が避けた雷遁のクナイをヒントに、雷遁で責めるべきか。

薄まりつつある原作知識でも彼の弟は雷遁に弱かったはず。

であれば満月自身もそうだろうとの判断をしてヒビキは雷遁の準備をする。

「これはきつい。」

とヒビキは「一人」、つぶやいた。

「しようがない。少し無茶をしよう。」

そういつてヒビキは八門遁甲の第二まで開ける。

第二までしか開けられないとも言いが。第三からはまるでできる気がしない。

これをガイ上忍や、リー、タマモは軽々と開けるのであるからすごい。

多少体にガタがこようとも、格上が相手だ。

「今ならば」まだ無茶が可能ということもある。

分断をする。

そう、分断だ。

「っ!？」

すでにガイからもらった重りは外してある。

そして第二までとは言えどもヒビキの、彼女の身体能力は爆発的に高まる。

印を結ぶ速度も上がり、しかしまずは打撃が少しでも通用する甚八に向かう。

満月はこの期に及んで余裕の表情だ。

甚八のガードやフオローに入る気配すらなかった。

好都合だ。

傲慢に立ち尽くしてもらえないならそれに越したことはない。彼女は正面から本気でやりあうことに喜びを得る武芸者ではないのだから。邪魔してもらわない方が好都合である。

ゼロ距離による…水遁水龍彈の術を食らわせる。

それが分断するための第一の手段。

だが、爆刀によってこれまた弾き飛ばされる。

凄まじい威力はもちろんのこと瞬時に近づき、そして刹那の間もなく放ったゼロ距離水龍彈をいともたやすく刀ではじく、凄まじい技量もまた脅威であるが、すでにある程度は見切っていた。

連発は出来ないということ。

かの刀の特徴はなんといっても刀に巻きつけた幾重もの起爆札のようなものと、そしてそれによる衝撃力、そして自らの爆発に耐えうる頑強さだ。

その威力ゆえに少量のチャクラを刀に込めて少し振るうだけでちよつとした忍術など比べ物にならないほどの威力がでてしまう。

大味でシンプルでありながらもその脅威具合は決して軽視できるものではない。

だが、どの忍術にも弱点や欠点があるよう爆刀にはリチャージ時間というのが存在する。

写輪眼だからこそ見切れたりチャージの瞬間。

起爆札には連鎖爆発する機能、というか、特性がある。

もともとは爆発物として作られた印が刻んであるためここは特に不思議ではない。

しかし飛沫に着けられた起爆札はすべてが一緒に爆発するというわけではない。

そのことから簡易の見積もりだが、しかし確定的に起爆札には表面以外の起爆札を保護するための何がしかの「しかけ」が存在すると見た。

そしてそのしかけが解除されるのが表面の起爆札による爆発が完全に消えさつた瞬間だ。

消え去つた瞬間にすぐさま使えるようになるため、また扱うものの技量も相まって、そのタイミングはシビアだがそれでも爆発の終わり際を狙えば十二分に可能性はある。

ゆえに。

影分身に水龍弾を使わせ、そして今度は本命の忍術をもう一体の影分身が使う。

もとい、二人の分身による間髪いれぬ連撃忍術である。

「分身とは言えども、印の結ぶ暇すらも与えぬ連携……そして、これは豪龍火の術かつ!? 歳の割に良い術を使うっ。」

豪龍火によって甚八の右腕をとらえ、そのまま引きずって行ってもらおう。

凄まじい速度で遠くへと飛んでいく甚八。

刀を持っている方の手を狙ったために、刀で吹き飛ばすことは出来ず、印も結べない。これで。

「一対一ってか？」

残念でしたあ。

そうはならないんだなっ。これが。」

にやりと満月が笑うのとはぼ同時に背後から衝撃がくる。

「水遁っ大突破っ!!」

「あぐうっ!」

そして消えた影分身。

「また影分身かよ。めんどーだなあ。」

「すまん、遅れた。」

「遅れたじゃねえよ、デブ。」

いつまで道草喰ってんのさ。殺しちやうぞ。」  
背後からの突如の忍術。

それを行つた相手は口元に肉まんのカスを付けながら、現れた。  
「肉まん食うから遅れると連絡しておいただろう？」

そもそも俺の体は脂肪じゃなくて筋肉だと…」

「ばかかつ！」

たしかに遅刻しちやうとき連絡は大切だよ？

連絡するのは良しとしよう。むしろ感心だよ、お兄さんは。

でも、そんなアホな言い訳が社会に出てから通用すると思つてんの？

だからお前も半ば追い出される形でここにいるんだろうが。扱いにくいってよお。

せめて任務くらいは遅刻するな。次、遅刻したら鮫肌は俺がもらつてお前はぼぼいの

ぼーいだから。」

「ひどいなあ。」

とけらけらと笑う巨漢の男。

大刀・鮫肌の現使い手。

河豚鬼である。

「…不確定要素がこれでハッキリした。」

「おや？」

気付いてた？

まあひよつこといえども気付くわな。

忍者の基本はスリーマンセル。

俺たちにも三人目がいると考えるのは普通だろうし、ひよつこだからこそこの前までそういつたことは教えられていただろうしねえ…とまあその辺はさておき。」

ヒビキはより目にチャクラを込めた。

そして彼ら二人を相手取るためにも少しの油断も許されない。

ヒビキの背後にいる二人も身構え、本格的な戦いが今始まる。

「火遁、豪火球っ!!」

☆ ☆ ☆

「妙だな…」

「何がだ？」

「甚八が戻ってこない。」

と言ったのは満月。

「肉まんか？」

「アホ言え。甚八は見かけに反して真面目君だ。」



途中で別の小隊と出くわしたか？」

「そんなところだろう。」

俺たちの姿を見られるのは不味い。殺した後に、下忍同士がやったように見せる工作でもしてるんじゃないか？

あれ、手慣れてても割と面倒だからな。」

「…それにあいつらの動きも気になる。」

「逃げてるだけだろ？」

「時間稼ぎととらえることもできるだろう。」

「…まさか、と言いたいところだが…確かに違和感を感じてる。」

逃げてるとか消極的だとかとかじゃないな…こう、単に手数が少ないというか。」

「河豚鬼、甚八を探してこい。」

「…考え過ぎだと思いがねエ…まあ、見てきますか。」

「それと多少は強いのを使ってもいい。時間優先に切り替える。」

「…ますます考え過ぎだと思いが、リーダーがそういうならそのつもりで言ってくるや。」

「手早くな。」

もう遊びは終いだ。」

そういつて満月は水遁、水龍弾を使い、自分の周りに渦巻くように発動させた。

「何をする気……?」

ヒビキは崖に潜伏しながらも満月の姿を観察する。

彼女の戦法は単純だ。

逃げながらの攻撃である。

ちくちくとダメージを与えて削っていく作戦だ。

が、あまりダメージを与えられているとは思えないし、残りのチャクラも少なくなつておりいささかペース配分を間違えているのも痛い。

幸い、こつそり目玉をいただくという目的上、満月も河豚鬼も大規模忍術は使わないようでなんとか消極的現状でもしのげていたが、もう4、5分は経過している。

長いと見るか短いと見るかは微妙なところだが、おそらくはここらで焦れてそろそろという感じがしていた。

案の定、変な水遁の使い方を始めた。

どういふことなのか。

渦巻く水龍弾は徐々にその勢いを弱め、しかし水自体はその場にとどまり大きな水塊となつている。

本来ならばそのあたりに霧散するはず。

「…そういうこと。」

大きな水龍、そしてそのてっぺんには満月の上半身である。

「おおよその検討はついてんだな、これがっ!!」

ヒビキの気配を捕えていた満月は凄まじい速度でヒビキの元へツツコむ。

それに対して土遁土流壁で大きな壁を作る。

目くらましの効果を期待し、そしてその間にまた違う場所へ隠れるという手段を取ろうとしたが、背後から音、地面に穴が開いており、出てきたのは水で出来たしつぽのようなもの。

先っぽには目玉だけが付いており、それがこちらを見つめていた。

それを見てからの間髪入れずの土流壁の破壊。

砂の中に突っ込んだ水流をヒビキの足を抜けて背後に突出し、その先っぽに付けた目玉で位置を確認、そのままの勢いで熱い土壁をぶち抜いてきたのである。

原作知識にも弟が湖と融合し、大きな体を持つていた。

水龍弾と融合しているのはその技だろう。

彼の場合はさらに体の一部分という単位で水塊の中を移動できるようだが。

すぐさま立ち退き、かわす、水しぶきと砂煙に紛れてさらに突撃をしてくる水龍と化した満月。

「ふっー！」

「いまさらその程度のチャクラ流しは効かないぜえっ!!」

雷遁のチャクラが流れるクナイを投げるが、簡単に弾かれ、それはまるで通じない。

「直接流さないとダメか。」

「そんな暇は与えないけどな!」

直線的で避けやすいのが幸いである。

またもや突撃を危なげなく避けるが、水龍の体から突起のように水が噴き出した。

その先っぽには大きな拳が付いており、これで殴ろうというのだろう。

だが問題はない。

これも少し当たりそうになりながらも避ける。

「まだまだなんだよ、これがあつ!」

水網打尽っ!!」

またもや突撃、しかし今度は各所から飛び出た水で出来た拳も一緒である。

その数は10本ほど。

これならばとまずは一つ目を避けるが、避けた水流からこちらに向かってさらに水流が射出される。

「っ!」

それもなんとか避けるが、そこからさらに水流が射出。

合計、10本の腕からまるで枝分かれするかのようになり、こちらを狙って鋭い高圧アクアクターのような攻撃が飛んでくる。

それらが交錯し、網のように見える。

その姿は網で蝶を捕えるかのよう。

「っ!?!」

数多の水流がヒビキの体を穿つ。

そしてとどめとばかりの水龍本体による突撃。

爆発とも言える水しぶきが辺りに飛び散り、同時に遠く離れた場所にて大きな砂煙が起こった。

そしてここで初めて満月は理解した。

「…まさか……やってくれたな。」

ヒビキ“だったもの”は文字通り煙へと消えた。

そして気配がすべて消えていた。

「初めから……僕に対する人員は”すべて影分身”で賄っていやがったのか!!!」

そう、ここにはもともと影分身しかいない。

仲間だった二人もいつの間にかいなくなっていた。

それはおそらく元々は今、相對していた小娘の影分身が変化していたもの。

手数が少なかったのは元々影分身に込めていたチャクラ量の都合上、あまり派手に連続で攻めきれなかったため。

そして時間を稼ぐため。

三人で一氣に格上を屠るための…先ほどの豪龍火の時点で気付くべきだった。分断したとしてもすぐ合流されたら意味が無い。それを足止めできる人間が必要だと。

いや、頭のどこかでそれは考えていた。が、問題ないと傲慢にも斬り捨てていたので。

本体は—

満月が砂煙が上がったところへ向かうと、胸から血を出し死んでいる甚八と、これまた死にかけて倒れていた河豚鬼であった。

そして倒れ伏していたはずの日向のガキとその仲間たちもいない。

「いるのは分かっているぞ…ガキども。」

と言つて振り向く満月の目は爛々と怒りに染まっていた。

## 鬼才イタチ

イタチらの考えた作戦は簡単である。

数で叩きのめす。

これだった。

初めは打撃が通じない満月に対して、あらゆる忍術をある程度のレベルで使えるヒビキが相手をしつつ、その間に甚八をイタチとタマモで潰すという作戦だった。

しかし、これにイタチは異をあげる。

それが不確定要素、相手の人数である。

本来、忍者はスリーマンセルである。

これは少なすぎるといざと言う時の備えが足りず、多すぎると潜入などの時に気取られやすくなったりするそうだったメリットデメリットのバランスが良い具合にとれる人数であるとして忍者の基本とされるものだ。

よほどの理由、たとえばスパイミッションややむをえず人数が足りないなどそういった理由が無い限り、忍の力量にかかわらずそうするのが定石とされている。

つまり。

もう一人が潜伏、ないしは後から来るのではないかと言う懸念があった。

そこで考えたのが戦闘中にどうにか甚八を分断し、分身で満月の気を引きつつ速やかに殺すという作戦である。

満月には分身をあてがいがい、その間に三人で甚八を圧倒しようという形になる。

が、これには特に二つの難点があった。

一つは分身でごまかせるかどうか。

二つはチャクラが持つかどうか。

である。

それこそ影分身などの実体を持つ分身術でなければ超一流クラスの彼ら相手に騙せるとは思えない。

しかしそれには問題があつて、チャクラが足りないということである。

影分身を筆頭に実体を持つ、いわばばれにくい分身術と言うのは忍術の中でもチャクラ量を大量に必要とするもので、特に今回は満月を引き付けるに当たり分身自体にも忍術を使わせない、つまりその分余分にチャクラを込めなくてはならなかった。

ヒビキはイタチに見られるのを少々ためらったが、ここで死んでは元も子もないという事で切り札の一つを切る。

それが九尾チャクラによる影分身アタックである。



イタチもヒビキもタマモも同年代に比べればチャクラ量は多いほうであるが、同じころのナルトには到底及ばないレベルである。

そこをどうにかするべくヒビキが考えたのが九尾襲来、正確にはオビトによる九尾を使つての襲来事件の際に取り込んだ九尾チャクラの定番であった。

満月たちを土牢に閉じ込めた後、瞬時に自身の服をまくり上げて、真つ白で絹のような肌を露わにしながら、その思わず撫でたくなるほどのぶにぶにしたお腹には封印術が浮き上がっていた。

これはナルトに使われたものとは違い、九尾のチャクラを完全に封印しながらもわざわざかばかりの九尾チャクラを体に流して九尾チャクラを体に馴染ませるのを目的にした印術である。

系統としては大蛇丸がサスケに刻んだ呪印の封印機能つき、というのが正しい。

その印術にヒビキがチャクラを宿した指でなぞると、印が体にぞぞと凄まじい速度で広がっていき、首元にまで達するところで止まる。

そしてそれらは体表を蝨きながらもヒビキの両腕に巻き付き、次の瞬間、両腕は真つ赤にそまつた。

まるでナルトが九尾のチャクラの尾が4本以上の状態の時のように。

両腕だけが真つ赤に染まつたのである。

「っ……っ!!」

激痛に顔をしかめるヒビキ。

だが、それに戸惑っている暇はない。

この封印術は尾獣チャクラによってヒビキが死なないために、とその重く、毒にもなるチャクラに体をなじませるためのものだった。

話変わるが、金閣、銀閣という忍がいる。

彼らは九尾に挑み、九尾に食われ、しかし胃の中で九尾の肉を食って生き延びた伝説の一つに語られる忍である。

その後、彼らは九尾の腹から出た後、九尾の肉をくった、もといチャクラを取り込んだためか尾獣化が可能になったという。

それを真似した忍がいたが、それらはすべて命を落としたり。

何が言いたいかと言えば九尾の、もとい尾獣たちのチャクラは高濃度であり、それは毒であるということだ。

誰にでも扱えるものではない。

そしてヒビキにもそれは当てはまる。

九尾襲来の際、体に取り込んだ九尾チャクラはヒビキの体を蝕んだ。

彼女は体全身に広がる激痛に耐えながらもなんとか封印術を自らに施し、それからは

わずかばかりのチャクラを体に流して徐々に徐々に馴らしていくつもりだった。もちろん今はまだ慣れ切っていない。

ゆえにこそその激痛である。

タマモが心配そうに見るが、ヒビキは我慢をして影分身の印を結ぶ。

そして出来上がったのは10ほどの影分身だ。

十分に戦える影分身が10。

甚八との戦いや、まだ試験中であることも含めれば十分な数である。

「たぶんすぐに分断できる……っ……イタチと……タマモは配置に。私は念のため、少し離れたところで影分身の追加をしつつ向かう。」

「分かった。」

イタチは特に心配そうな顔もせず、すぐさま行く。

タマモはしかし、いかなかった。

「わ、私……やつぱりここに……」

「大丈夫。」

脂汗を垂らしながら、ヒビキはめつたに見せない笑顔で言う。

「でも……もし本体のヒビキちゃんがきづかれたら……」

そう、八門遁甲以外ではでんでダメな落ちこぼれのタマモですら分かった。

彼ら、満月たちの力量が。

事実その可能性はある。

しかし。

「ほら、いって。」

「…。」

「イタチは信じて行ってくれたのに、タマちゃんは信じてくれないの?」

今はイタチとタマモに化けた分身が土牢に向かって火遁を打ち込んでいた。

「そういえば…」

イタチは何の感慨もなくすぐさま所定の配置へと言った。

タマモはそれを見て、いくらそうする必要があるからと言っても冷たいと思ったが…  
簡単である。

イタチはヒビキならやり切れるだろうと信じていた、分かっていたからこそ何の声も  
かけなかったのだ。

もちろん失敗する可能性も分かっていた。

が、ここにとどまっていたのは確定で失敗するのだ。

痛みがどうだの、仲間だからどうだのはこの戦いを生き残ってから存分にやればい  
い。

そう考えて。

「分かった。」

と答えてタマモは行く。

「それと頑張つて。」

「まかせて。」

☆ ☆ ☆

「こんなところまで飛ばされるとはな…少々舐めすぎたか。

とはいえ、一分もあれば戻れ…っ!？」

ヒビキの豪龍火は威力を削り、そして距離を、持続性を高めたものだった。

ゆえに甚八の腕に火傷はなく、少し服が焦げている程度だった。

その分遠くに飛ばされたわけだが。

もちろん分断するということは分断させて満月を倒す手段があるという可能性があるわけで、たとえ格下だろうと油断は命に届く。

ゆえにすぐさま戻ろうとして身をかがめた。

背後からのクナイによる斬撃を避けたのだ。

そしてすぐさま手元の爆刀・飛沫を振るう。

が、それを避けられ、そしてさらにクナイが振るった自身の腕に向けて突き立てられようとしたところで不意打ちをしてきた輩を蹴り飛ばした。

そして自分を襲った相手を見ればなるほど。

ガキである。

写輪眼のガキ。

ターゲットの二つだ。

「下忍のくせに大した身のこなしだ。

さすがうちは一族……とでも言っておこうか。」

「……」

甚八に対するイタチの返答はクナイだった。

投げつけられたクナイをかわしつつ、向かってくるイタチに対して爆刀を振るう。

忍び刀七人衆は一人一人、自分の持つ刀を扱うための技能を有している。

甚八の持つ技能は馬鹿力。

どんなに強力な攻撃力を持っていようと当たらなければ意味はない。

爆刀飛沫を代々受け継いできた忍はその誰もが剛力持ちであり、下手な刀使いよりも

その剣術は卓越していた。

忍び刀七人衆の中でもその剛腕によって振り下ろされる斬撃は重量級の武器を扱っ

てるとは思わせないほどに鋭く早い。

そして当たればほぼ即死。

今回も多少身のこなしが良からうが、経験の薄いイタチに対してわずか四手―四振りの斬撃でその命を断とうとしていた。

だが、体がわずかに鈍る。

「っ幻術かつ！」

「はっ!!」

目を合わせまいと気を付けていたが、イタチからも目を合わせにいつてるためそれはいかに甚八と言えども至難の業。

もとい瞳術にかかるがそれも数瞬。

イタチの振るうクナイを間一髪でかわす。

「…。」

イタチは表情も変えず、口も開かない。

写輪眼による幻術もすぐに破られてしまっても。

それから何度かのクナイと刀の応酬が繰り返されるもどちらも決定打が無く時間だけが過ぎていく。

「…ふん。」

甚八は改めて爆刀を構え直す。

ヒヨッコだからと侮っていたつもりは無いが、本気を出してもいなかった。

ここからは本気である。

身のこなし自体は中忍レベル。

チャクラ量もそこそこ。

大戦を生き抜いてきた甚八にはそれ以上を相手にもしたことがある。

なんら脅威ではない、はずだった。

しかし、巧みだった。

非常に巧みだ。

フェイントや自身の目の動き、体のわずかな身じろぎを使って甚八にこう来ると思わせておきながらの、意表を突く動きを繰り返してくる。

もちろん一度でも同じことをすればそれに対応し、カウンターを当てることが可能だ。

しかし目の前の少年は一度たりとも同じ手段でフェイントをかけない。ゆえに引つかる。

自身の動き、というよりは心を読まれているようにも錯覚するほど。

実際には写輪眼で動きを読まれているだけだ。



しかし彼は……自分の動きによって甚八が「俺のこの癖が読まれているだろうから奴はこうくる、そこを突く」という考えまで読み取り、「そこをついてきたところを逆に絡め取る」という感じであつた。

先の先をわずかな情報から読み取り、確実に正解を選びとつている。

決して不可能ではない。

不可能ではないことなのだ。

だが。

格上であるはずの甚八の額に脂汗が流れ出るほどに彼は緊張していた。

こいつはなんなのだ？

本当に子供なのか？

表情からも何も読めない。何も言わない。

ただ淡々と自分を殺すために機械のように動く。

一瞬の油断でこちらの命が取られる、そう考えかねないほど。

イタチもイタチでその無表情の仮面の下で冷や汗を流していた。

当然である。

相手はすべてにおいて格上。

身体能力も経験もまるでかなわない。

しかし彼は普通に戦っていた。むしろ押ししていた。

それはイタチの相手のわずかな所作によって心の動きすら読むというたぐいまれな才能ゆえに。

これが彼が鬼才と言われる所以である。

相手の癖や動き、視点がどこへ向くか、発言の内容などすべての情報を統合し整理し推理して人の心を見透かし、心を読む。それを戦いに利用するのだ。

ゆえに、

「時間もかけてられないのでな。」

という言葉に甚八の意識がわずかばかりに逸らされた。

イタチの表情はにやりと笑っていた。が、これは恣意的に作った物であり、今までなんのリアクションも言葉もなくいきなり、その端正な顔を下卑た笑いに染めながらもしゃべりだしたことに「ほんのわずか」ばかりに意識を持つてかれた。

そう、イタチの思惑通りに。

そのほんのわずかが勝敗を分けた。

甚八の地面が盛り上がり、刹那、反応が遅れた甚八は刀を振るう。

が、それは未然に防がれた。

目の前のイタチによって手首を蹴られたのだ。

イタチの本体に意識を引き寄せ、そこから土遁で潜っていた“者”へ意識をよせる。そして本命の本体で一気に接近。

振り払おうとする腕を蹴り飛ばす。

そして地面からそのままの勢いで出た“イタチ”にはクナイが握られている。

「終わりだ。」

「…そうだな。俺の勝ちだ。」

甚八がにやりと笑う。

そしてイタチの写輪眼が彼の刀を持たぬ左手に吸い寄せられる。

左手は高速で印を結んでいた。

片手による遁術。

「っ!？」

たとえ目で見きれても彼は空中だ。ただ両腕を交差し、体をちぢこめて極力当たる部位を少なくするしかできない。

それから数瞬の間もなく、爆発。

甚八の切り札、「爆遁」である。

彼は血断限界を持つっており、その名は爆遁。

文字通り爆発させることが可能な忍術だ。

片手の印すら可能な忍術。

大抵の忍は彼の持つ飛沫ばかりに警戒を向ける。

だが、彼の本当の切り札は飛沫を潜り抜けた先にある。

爆刀を潜り抜けたと相手が考えた瞬間。

彼の本命の爆遁が発動する。

片手での印が可能であるという本来ならあり得ないこと。

そして、近距離からの圧倒的な暴力にこれを潜り抜けて生き残った忍びは片手で足りるほどではない。

ゆえに豪龍火があっても彼はそのままにしていた。

切り札であるために。

この時のために。

「切り札は最後まで取っておくもんだ。」

という彼の声が爆発と共に響いた。

が。

その声はすぐに焦りの声へと変わる。

「ちいっ!?!」

背後からの風切音。

瞬時に体を傾けて、飛んできたものを見てみればそれはクナイだった。仲間かと思ひ周りを見渡そうとしてそこで気付く。

目の前には先ほどの少年であるイタチと：イタチではない可憐な美少女。そこで気付いた。

地面から出てきたのはイタチの分身ではない。イタチの姿をしたヒビキだったのである。

体のところどころに焼けた跡を残しながらも、その手に握られてるのは今飛んできたクナイ。

そしてそれには火遁のチャクラが込められ、赤熱していた。

咄嗟にかばった腕を焼き貫きながらもクナイが胸に突き刺さる光景を目にしながら甚八の意識は途絶えた。

## 焦り

「大丈夫っ!？」

「ヒビキちゃんっ!？」

凄く焦った声でタマモが駆け寄ってきた。

「ごふっ…大丈夫…なんとか…。」

吐血しながらも答える。

「ぜんぜんだいじょうぶに見えないよう!」

「たまちゃんこそ…だいじょうぶ?」

先ほどのクナイはタマモの八門遁甲を使った状態での投擲だった。

ゆえの心配である。

「わたしなんて全然大丈夫だよっ!!」

「それよりも…」

「ああ、それよりも他二人をどうするかの問題だ。」

「イタチ君っ!!」

イタチのあまりの言葉にタマモは食って掛かる。

確かに言っていることは正しい。

しかし、少しはねぎらいの言葉くらいかけてあげてもいいのではないだろうか。「反省なら生きていけばいくらでもできる。」

…俺のミスの挽回もな。」

と言つてその顔をわずかばかりにゆがめる。

そう、イタチはさきほどの爆遁までは計算にいれていなかった。

なにがしかの切り札はあるとしていたが、それを使わせる間もなく三人がかりで倒そうという魂胆だったのである。

極力消耗せずに。

その結果がこれだ。

ヒビキの白い肌のあちこちには醜く焼けただれた跡があつた。

なまじ綺麗な肌だっただけに見えてより痛ましい。

ヒビキとイタチが爆遁の直撃を受けてそこまで大きな怪我を負つてないのは九尾チャクラを体全体にまとしてイタチをかばつたためである。

ナルトで言うところの尾が一本出た状態であり、全身にまをつたチャクラが爆遁から身を守つたのだつた。

が、その被害は甚大である。

九尾チャクラといえども万能ではなく、物理的力を有していてもそれは爆発を防ぎきるほどのものでももちろんない。

イタチは改めて気を引き締めた。

もちろん彼も心配はしていたし、できることなら撤退を選びたいが日向のカナグに言っていた言葉を聞くに彼らの目的は写輪眼も含まれている。ゆえにその手段も意味が無い。

持久戦や撤退戦になれば負けるのは経験の薄いこちらだ。

一番可能性が高いのは純粹な戦闘。それでこの体たらく。

イタチは改めて今回の戦いを厳しいと認識する。

ヒビキの傷は九尾によるチャクラでみるみると治って行っている。

だが、同時にダメージも受けていた。

尾獣チャクラの特徴である適性の無いものにはダメージを与えるというものだ。

吐血はそのためのものであり、高密度のチャクラにチャクラが流れる器官である経絡系が悲鳴を上げているのである。

九尾チャクラを解放しても死んでいないのは封印術にある程度の制御効果があるためと、わずかばかりに馴らしていたためであり、治療が始まっているのもそのためだったが、それと同時にダメージも入る。



たとえて言うなら毒状態のキャラに常時回復効果をかけているようなものである。毒によるダメージが毎秒10だとしたら常時回復が20のような。

ダメージを受けて、そしてそのダメージ以上の回復をして、それが全快になるまで繰り返されるのである。

言うまでもなく全身に軽くはない痛みが走るが負傷したままで勝てるほど甘い相手ではない。

ゆえにヒビキは堪えた。

「結局どうなの、たまちゃん。」

「…う、うん。大丈夫。二門までしか開かなかったし。」

「そう。影分身の情報によるともうすぐここへ河豚鬼が来る。準備をして…っ。」  
痛みをこらえながらもヒビキは立ち上がる。

影分身は消えた瞬間、その経験を本体へとフィードバックする。

その情報からすぐに河豚鬼が来ることが分かった。

そのための準備に入らねばならない。

作戦会議に使える時間は約一分。

医療忍術も使いつつ、ヒビキは丸薬を取り出した。

「それとこれ。イタチも。」

「これは？」

イタチが聞いた。

手には黄色い飴玉のようなもの。

「兜一族が普段飲んでる樹液を丸薬状にしたもの。

チャクラが一時的に活性化される。兵糧丸よりも効果が高くて体への負担も少ない。

滋養強壮の効果もある。」

そう説明しながらヒビキも飲んだ。

「分かった。」

ヒビキの説明を聞いて飲んだイタチと、聞かずとも飲めと言われたら何か理由があるのだろうと判断してすでに飲んだタマモ。

「次は作戦通りと行きたいところだけど、今回のあいては不味い。

忍び刀七人衆の河豚鬼は尾のない尾獣……。」

原作知識を説明しようとしたところで痛みが響いて顔をしかめる。それを氣遣ってかイタチが説明を引き継いだ。

「チャクラを食うと言われる刀を持つ忍か。」

「知ってるの？」

と、タマモが聞いた。

「ああ、父さんから聞いたことがある。

凄まじいタフネスを持つとか。」

「それがネックだ。

時間をかければ鬼灯満月も加わり、勝てる戦いも勝てなくなる。

だから今回はタマモに頑張ってもらおうと私は考えてる。」

「わたし?」

「うん…無理してもらおうことになるけど…」

「大丈夫。頑張るよっ!!」

と言つてふんと気合を入れるタマモの姿は愛らしい。

が、そうも言つてられない。

「よろしく。」

「その間に俺たちは日向の連中の保護…か?」

「うん。」

簡単な話だ。

硬い盾には強力な矛でぶち破る作戦である。

「…いや、今回は俺が出よう。」

「…どうして?」

ヒビキはあつけにとられた。

今のところ、甚八の切り札は読み切れていなかったが、それでもなんとかこちらになり有利に動いている。

事実チャクラ消費量はそこまでもないし、傷も苦痛を伴っただけで九尾チャクラを体に循環させるだけで傷が治るのだ。無傷と言ってもいい。

ここで切り札の一つであるタマモの八門遁甲を切るのは痛い、しかしかといって満月には物理攻撃は通用しない。

ゆえに残しておいてもあまり変わりは無かった。

それはイタチも分かっているはず。

もしや、また先ほどのように作戦の変更か。

上手くいくならそれでもいいが。

「念のためタマモの八門は残しておくべきだ。

俺が残って時間稼ぎをし、そしてタマモは八門を使って救助を要請する。

それが一番だと考える。」

「それは最初に無理だと話したはず。

八門遁甲に持久力は無い。」

八門遁甲は強い。

強すぎるくらいだ。

が、ゆえにこそその欠点がある。非常に使いにくいということだ。

もとい土地勘もないタマモが砂漠から出る前に八門による反動で動けなくなる可能性の方が圧倒的に高い。

だからこそヒビキの口寄せによる兜一族に空を飛んでもらって救助を要請するという手法を取ったのだ。

しかし、これもおそらくは無理だろうと考えている。

なぜならこれは写輪眼を狙ったこの計画はもともと練られたうえでの計画犯行の可能性が濃厚だ。

救助を呼ばれないようななんらかの手段が講じてあるはず。

呼び出した兜一族にも何か危険があればすぐに還っていいと伝えてある。

ゆえにそれも望めない。

もとい自力で帰るしかないのだ。

「オールマイティーに動けるヒビキと一緒にならその可能性も高く……」

「どうしたの？」

「らしくないけど。」

「らしいも何も、俺は俺だ。」

こうするべきだと判断したから言っている。」

「だからそれがおかしい。」

イタチは誰よりも忍という職業を理解している。

もとい、チームワークが大切なことくらい今更私が言うまでもないこと。

その貴方がそんなことを言い出すのがらしくない。」

「らしいとはそもそもなんだ？」

勝手なイメージを俺に押し付けられても困る。

俺はそんなやつじゃない。個人の考えを、イメージを鵜呑みにするのは……」

「もしかして責任感じてる？」

だとしたらそれはお門違い。

さっきの一撃は誰も予想できなかった。」

「だからこそ予想してしかるべきだった。」

予想できなかったほどの事ではないし、その予想外で危うく俺もお前も死ぬところだった。

できなかった……で済ませていい話じゃない。」

「否定はしないの？」

「つ……この班のリーダーは俺だ。俺のミスだ。」

その責任を取ることに何の間違いがある。」

「本当にらしくない。むしろほっとしたけど、それがこの場面と言うのが面倒。」

子供は子供らしく……いい言葉だけどこんなところでそれを発揮してほしくないな。」

「子供がどうかか大人がどうかかそういった話をしている場合じゃないだろう？」

分かつたらすぐに動け。

俺が引き留めることを無駄にしないためにもな。」

「ちがう、どのみち無駄になる。」

相手は二人。

今からくる相手は一人だけど、いよいよ時間がかかってくればなりふり構わず襲ってくる。そうなればイタチでも一分二分と経たずに潰される。」

「勝手な憶測で物事を言うものじゃない。」

その十倍は持たせてみせる。」

「無理、不可能、ありえない。」

私の九尾チャクラを伴った分身体で上手く攻めれてと感じたのに5分が限界だった。

私よりも弱いイタチじゃなおさら無理。

仮に残るにしても私が残るべきでしょうか？常識的に考えて。

「貴方こそ憶測が過ぎる。仮にその作戦を通すとしても貴方がタマモと一緒に後退するべき。」

「言ってくれるな…：そういえばまだ本気でやり合ったことは無かった。」

今、この場でハッキリさせようか？」

「上等。」

「どちらか勝った方が時間稼ぎをする役でいいな？」

「それでいい。」

「分かった…：じゃあ…：ごふっ?!」

と二人が無表情のままヒートアップする中タマモのボディーパーローがイタチに命中した。

そしてヒビキにはほっぺを引っ張った。

完全な鼻唄である。

「落ち着いて。」

と、タマモに珍しく無表情で二人は言われて頭が一気にクールダウンする。

一見、無表情だがその実、怒ってるのが分かった。

「いふあい…」

ちよつと涙目になるヒビキに『あ、可愛い』と思ったタマモだが今はそれどころじゃ



ない。

「二人とも馬鹿な言い合いしてる場合じゃないでしょう？」

ようは私が今から来るやつをぶっ倒せばいんだから!!」

えっへんと最近膨らみ始めた胸を張るタマモ。

それを見てイタチは珍しく目を見開いた間抜けな顔を数秒さらした後、すぐに自然な笑みを浮かべた。

「すまない。」

「分かればよし!」

「…ほんとう勘弁して。子供らしいのはいいけどもつと別のところで…いふあい。」

「ヒビキちゃんも悪かったでしょ!」

「ごめんなふあい。」

「よろしい。」

結局、作戦は最初に挙げたもの。

タマモの八門で一気に叩きのめすというものである。

そのあとにはイタチとヒビキで満月を倒す。

それだけである。